

と男は仰山に膝を拍つた、其の手で太股のあたりを、恚う其の、頻に擦りながら、

「いや、御懇意を願うて、追々また私が其の音楽の御批評を願ひたいやて。音楽と云うても義太夫や、義太夫に限りませわ。私はな、人情の機微を察し、人格を修養するために義太夫を研究しますが、藝事も眞面目に成ると凡庸の聽人では一向に反射作用を起さないで、薩張り妙處が解つてくれず、また賞められたかて其までのもんや。貴下のやうに知識階級に類屬するお方の御批評を仰ぐのが何よりも研究やて。彼の月並の悪口や無いけれど、親類だけに二段きゝの格で以てな、いづれ、胸倉を取つて、聽いて貰ひますわ、ふん、うふん。」

と鳴らす鼻で、半ば縁談を香はせながら、又候親げに、今度は握手をしさうで、丸々と肥えて生白い腕をぬつと出すと、峰は肩を斜に、ぐい、と引いて、袴の襷袢に手を置いた。

「御免を被ります。——癖に成つて居ますから、胸倉を取るものがあると、投つ了ひます。」と瞬きもしないで言つた。

「はあい。」と、きよろんとして、全く投げられたやうな顔をしたが、やがて、装返しが目が目金の下で、パチクリと働いて、

「然うや、柔道お嗜みや。」と、其處まで興信所が届いたらしい。

「せめて洋服の時でない、此の衣もので胸倉を取られますと、形が失禮に成りますから。」

「失禮も何も無いが、貴下。」と妙な笑ひ方をして、密と顔を視ながら、

「すべて、親類附合ひに願ひませうで、まあ、御悠綏とな、今日は一つ。」

「直ぐお暇をしなければ成りません。まだ、勤めがあるんですから。」

「はあい、然ぢやと、又會社の方へ。」

「一寸、晝飯の時間の間を視て伺ひました。」

……一寸、晝飯の時間の間を視て、婿君が自ら、初對面で、出向いた、縁談の事となると?……

「はあい?」

六十二

男は、峰の意を計り兼ねて、偶と言ふ事に猶豫つたが、飽まで此の縁談に否應あらせまいと疊掛けて、

「まあ宜しわ、幾干御悠暢なさつたかて、申さば貴下の御親父御一人の經營と言うても差支へない、會社やて。その御子息の御勤務ぢや。ま、ま、氣まゝになさつても、一向に構ひませんわ。」

「構はん事があるものですか、怠けますと立處に罷免に成ります。」

「強い御常談で。」

「決して常談なことはありません、其の日から直に生活に困ります。」と、しかし微笑む。

「飛んだ阿呆らし、ふん、ふん、いや、阿呆らし次手に、些と斯う言ふ場合の雙方のしきたりの上では間違うて居るか分らんが、絹子な、妹や。妹ですが、丁ど内に居ります。あ、それ、琴を弾いて居たのを、いま留めました。絹子も貴下がおいでな事早や知つとりますわ。よつて、此處へ呼ばうかと思ふが如何なもので。」と目金の下から頬へ掛けて、鯨の髻に似た條を刻んで、大きな口で、ニヤ／＼と成る。

峰は眉をも動かさなで、

「其は、お見合せを願ひませう。」

「はあい、西洋では斯う言ふ場合には雙方を逢はせん事に成つとりますかな。私も馴れん事、こゝに假に婚約があつて、いづれもまだ一度も正式に逢うた事の無い、一方其婿たるべき紳士が、嫁たるべき貴女と、……まあ、して置きますわ。第三者と成つて、(と四角に出て、) 貴女の許へ、はじめて訪問したとして、其のされた方で、一室内でお紹介せをすると言ふ事は、此の何かな、西洋には有りませんかな。あ、私もな、一方國粹主義であるとともに、一方又非常に泰西文明の調合をするやよつて、——御覧なさい、室内の飾りつけなども、然るべき専門家の設計によつとるが、や、貴下は最新の歸朝者やで、尙ほ不備不整頓の點は、親類附合に、御注意も願

はうと思ひますが。……何かな、今日御訪問下さつた、斯う言ふ場合には、西洋の華族の家として、一家の主人、尙ほ又絹子の、貴下に對して取るべき様式は、英佛など何う言ふ事に成つとりますかな。」

「私は場末の下宿屋から、學校に通つて居ましたばかりですから、婚姻についての式も作法も何も知りませんが、私一人としての、今日の斯うした場合の考へをお話しすれば、縉紳の淑女たる御令妹は、故とお留めに成らないで、澄して琴を弾いてお在になるのが何よりだと思ふんです。」

「はい、成程、はい、如何にも。姫がピアノに向つて弾するのを、貴公子が傍らに立つて聴くと言ふ、西洋の戀物語や油畫の畫面などによくある様式で、——其處ぢや、音樂の價値は、うふん、ふん、(と大得意。) いや、分りました。では絹子の琴を弾いて居ります處へ、……いま更めて琴爪を嵌めさせてな、……其の奥座敷へ貴下を御案内と言ふ事に、早速取計らふ事に、いや面白い。姫が琴を奏する處へ、笛を吹いて近づくと言ふ、貴下は御曹子の役廻りぢやな、一層、庭下駄で、庭から萩の中と言ふ運びは何うやろ、面白い。」

峰は苦笑を禁じ得ないのであつた。

「太神樂や、茶番ではありません。私の言ひます、御令妹が澄まして琴をお弾きになつて頂きたい意味は、峰を念頭にお置きにならんやうにと言ふ希望なんです。」

「まあ、阿呆らし、貴下婿たるべき貴下を、若い女が念頭に置かないで居られるかな、まあ、阿呆らし。」

「阿呆の言ふ事をお聞き下さい。」

峰はびたりと卓子の上に手を置いて、

「それから、貴下のお取りになるべき、様式ですか、様式は、早く——今日私の伺ひました話の要點をお聞き下さるのが何よりなんです。」

「はあい。」と、痒いやうに鼻の頭を手の甲で擦つて言つた。

六十三

峰は青い椅子に、最う一度膝を正して、

「早速ですが、先々からお話しのごさいます縁談は、お断り申します。一寸其の事を申上げに出ましたのです。」と、判然言つた。

唯、いま男爵の擦つた鼻は、何うやら擦られたも同じに成る、其の穴で仰向けにふツふツと呼吸をしたが、

「はあい、お断りと云ふと、こりや、どんな事に成りますかな。」と、絞つた窓帷の色と、椅子の

色に、顔は素より、むくりと拱いた腕まで黄色に成つて、

「何か、条件のお申込みでもありますが、時日とか……又は何とかかな。」

「条件も何もありません。全く無い御縁と思召しのやうに願ひます。御懇志のほどは幾重にもお禮を申します。實は私のやうなものです。餘り御執心下さるので、關係しました親類うちも、父母からお断り申し兼ねますさうですから、唐突に伺ひまして失禮ですが、私が自分で、一寸お断りを申しに出ましたのです。」

「一寸、お断り申されては困りますな、ふん、アハン。」

と大きい、が、氣の抜けた笑方をして、

「一寸、お断り申されるやうな、そんな其の、等閑な縁談では無いのですのやて。當方の意志に於てはな。九分ぢや。(とボンと掌へ片手の四本の指を載せて、) 相調うた積りで、支度萬端、且つ當方媒妁の彼の伯爵夫人な、附添として、有名なる青野畫伯(茄子丸を言ふ。)も加はるつもりで。畫伯などは既に祝意を表すると言うて、萬障を繰合はせて、金屏風の揮毫にも取掛つとる始末やて、今更何うもな。」

「伺ひますが、」と峰は屹と遮つた。

「はあい。」

「此の縁談に就いて、唯一言でも、お返事を申したのは、今日の私が最初だらうと思ふんですが、如何でせう、違ひましたか。」

「いや、そりや、そりや、其に違ひあらへん。が、しかし、苟くも男爵大問家より申込んだ縁談を——」

と、言掛けたが、對手が違ふ、と見たか出直して、

「で、何かな、貴下は、御親類、或は御兩親のお心持で以ておいでに成つたのかな。」

「違ひます。——兩親をはじめ親類は、皆是非と申して、此の縁談を勧めるのです、……お断り申すのは私なんですから、お思ひ違ひの無いやうに願ひます。」

「すると何かな、何か絹子に就いて御不足でも……」

「罰が當るくらゐです。……御令妹の淑徳、賢明は、學校が一つで、内の妹が存じて居ります。」

「こりや五里霧中ぢやね。すぢや、何で御承諾下されんな、……仔細が分らん。」

「仔細も何も有りません、私は結婚がしたくないのですから。」

「あ、あ、獨身主義、ふん、うふん、あは、(と急に笑ひ出し) 能くある奴やて、貴下の年配ではな。いや、そりや明かん、間違うとる。一時の感情ぢや。何うにも成るやて。それなら私の方でも然う心配するがものはない。早い話が、妹が彈いて居つた琴の音が、あの時留まんで、尙聞

えて居つたら、貴下の返事が、所謂其の色よい方に變つたらうも知れんくらゐなもんやて。」

「いや、たとひ琴の音は續いて居ましても。」

言ふ時、峰は衝と身を起して、青い椅子の凭を壓へた。

「絃は切れたんです——失禮します。」

「何ぢや！」

と、男が色を變へて、椅子に大の字に反つて、握拳を擧げて怒鳴つたのは、しかし、さすがに峰に對してでは無かつた。——小間使が出たのである。

「は、」と濃化粧で眞紅に成る。

「何ぢや！」

「三浦柳吉とおつしやる方がお玄關へおいでに成りまして、(今日午前のうち電話で御都合が伺つてあるから)と、あの、然う言つて、お目に掛りたいと申してでございますが。」

「うむ、承知しとる、通せ。」

「は、」と、おどくしつ々怪訝な顔で、廂髪の額で視上げて、

「通しまして可うございますか。あの、そして、御婦人の方ですが。」と隣きしつ々解せぬ顔。

片輪車

六十四

實は「通せ。」と言はれて、取次だもの躊躇するの無理はない。男の權幕と、居合はす客に遠慮があつて、其の場で小間使は何も言はなかつたが、此より前、門まで横附けにした自動車が一臺ある。……びたり、と留まると、然うした客には案内を待たずに應接に出るのが例で、件の家扶が、すぼけた腰の、肩ばかり怒らかして式臺に罷出ると、自動車の戸から、ひよこりと出た鳥打帽で横肥り、とぼけた眉毛の圓顔で、緋も袴も、よれよれに成つた壯俊が一人、素足に、ぼこぼこ靴を突掛けたのが、植込を左右に取つた、小砂利の上を、すた／＼と駆けて来て、ぶつきら棒にぬいと立つた體は、自動車夫人の脇腹から産れようと云ふ柄では無い。がら／＼を破つて顯れた、瓢男に其のまゝで、

「三浦。」と、唯其だけ。

「はあ、三浦何と申される。」

小間使が取次いだ口上にもある如く、當日は先んじて三浦から面會を請ふ趣、電話で男爵家の

都合の問合せがあつた處、昔の戀の仇ながら、偽か、眞か、對手の妻が營養不良で亡く成つたと云ふ事情。男が大襟度を示すため、快く其の旨を諾で、家扶は御前から内命のあつた三浦。たかが平民の畫工でも、多少は聞き嚙つた名のある人物の、自動車に不思議は無かつたが、駆込んだ瓢男が如何にも希有で、念のため聞返すと、

「柳吉てんです、柳吉。」と、ぎごちなく肱を袴腰に突張つて言ふ。

「で、お前さんは、え、其の貴下は。」

「僕か、我輩は書生だ。」と言ふが疾いか、式臺を、ぱつと横に開いて、雨落の砂利の上で、土下座せぬばかりに、頭を膝まで下げて、恭しく頓首する。

ものの餘りの慇懃さに、吃驚するほど釣込まれて、家扶も、はつと一度低頭平身に及んだが、やがて、のそ／＼と額を上げる、と同じやうに再拜して居る。で、小首を捻つて、俗に言ふ、お辭儀の繼足をしよう、とした、が、見合せた。斷然止めた。何だ、馬鹿にして居る。家扶にした禮ではない、と言ふのは、やがて自動車の裡から、艶やかな櫛卷の女の半身が顯れると、書生は頓首のなりで、角刈の顛で楫を取つて、くるりと其方へ向いたから。

ト出た婦が、門内へつと掛つて来た、が、服装が酷い。色が抜けるほど白いから、羅を透して、植込の木の葉の艶が映るのかと思へば、紺に染返した縞ものと見えて、瀧縞やら、よろけた

のやら、前の面影が日南に透く。草履ばきで、やがて、黄楊の櫛の上ぐらる、餘り長くない、釣棹の尖へ、風呂敷やら、何やら薄汚れた包をぶらりと結びつけたのを、擔ぐと狂亂の姿だけれど、然うでない證據には、棹を胸へ斜に取つて、一寸包を肩に當てて、尋常に二の腕で撓めて持ちながら、澄まして玄關前。

「はッ」と言つて、書生は更に又頓首をする。

「御苦勞よ。」と流眊に掛けると、無言で愈々頭を下げる。

「こウら」と婦人は、田舎出の山の手の令夫人の假聲を使つて、

「彦造。」

「はッ」と呼ばれて恐る／＼顔を上げた。六間堀の桶彦だ。此の野郎。

「御前様にお目通りをする間、あれへ下つて、控へて居や。」

「はッ。」返事とともに、桶彦は一ツ後退りをして、向直つて、飛出して、……自動車へ。

目も口もあつけに取られた家扶が、其の様體に首を巻かれて、聲まで掠れて、

「貴下様は？」

「三浦の代理に參つた、妻、舟子。」と仰山に嬌態を造つて、

「ほ、ほ、ほ。」と甲高に笑つたので、家扶は、ぎよツとしたやうに、肩を窄めて、ひよいと立つ

て、兩腕を眞直に前へ突出しながら、袴のうしろをふら／＼と引込む。——で、小間使が取次いだものである。

六十五

「何、婦ぢやと？」

「は、三浦の妻だと言ふんださうでございまして。」と、風體に依つて、小間使の取次にも言葉に甲乙の區別がある。

「通せ。」

男は、婦と聞き、妻と聞いても、「通せ。」と言つた。おなじ間違つたにした處で、男が婦に變つたのは色氣がある。別して男に取つては然うであつた。

「では、此で——」峰は、其處に、衝と立つたまゝで居て聲を掛けた。

「やあ、しかし、此のまゝでは何うも、しかし」と悶えるやうに兩腕を擦つたが、

「とに角、追つてお話をするにして、何は、三浦は、貴下御存じでは無かつたかな。」

「朋友です……」

「なら、まあ、宜しが。どんな事で、又琴の絃が繫げんとも限らんやて。」

「いや、琴の絃より、蜘蛛の巢が掛ると面倒です。お暇をします。しかし、其の今度の細君と言ふのは知りませんけれども、お玄關で擦違ひに成るのも、慌し過ぎませう。一寸挨拶をして歸りますから。」

其處へ、お舟が其の姿で、釣棹を手にしたまゝ、小間使に導かれて、怪しき日中の影法師の如く、次第に黒く成つて顯れた。

あの、流るゝやうな黒い瞳は、青い椅子を見た。黄なる椅子を見た。ト峰に其の瞳を注いで、ツ、と緋色の椅子に寄つて、身構へながら、

「おや。」

「……………」

「貴方は、若旦那。」

「三浦君の朋友です。——今日は急ぎます。然やうなら。」

つか／＼と室を出た、と思ふと、胸をあへと返して、肩越に男を視た。

「大間男爵。」

「何？」

「御邸内が廣くつて、僕は戸惑ひをするんですよ。」

時に小間使は居なかつた。彼にも此にも不興を重ねた御前の、禮たる見送りをしなかつたのを、わが桐太郎は峰の息子として、父母君のために、自ら恥ぢて、潔しとしなかつたのである。

「あ、あ、失禮。」と太い聲して、むつくと起きて、成程、弟嫁を發狂せしめた野獸の如き、唼の暗い、唼しい顔の色を露骨に見せたが、鄙吝と狡猾で積んだ年の効で、

「戸惑ひが希望ぢやつたで、奥座敷の方へな。いや、御親父、御萱堂に宜しうな。」

「恐れ入ります。」

慇懃に言ひつつ、男に送られて、ト見返つて、お舟と目を合はして其のまゝ出た。

影の襖に隔つた時、お舟は一息して、つツと室内から庭前を見ながら、卓上に差置き、客の座に、峰の分の紅茶の半ば乾して、其のまゝに有るのに目をつけて、一寸觸つて視て、冷えたのを、心ゆく如く、仰いで一口に呷と飲んだ。見ると、此の婦に怛した事がある。其の唇に當てたのが、咽喉を通つて、胸に注ぎ、乳房を兩方に流るゝのが、瓣を迂つて、清水の脈打つて走るが如く、美しく微に白い膚を透過る。ものを言ふのが又同じで、徒、口を動かすのではない、鳩尾から、乳、胸、咽喉に、聲が絲の如くちら／＼と光つて響く。蛇ならば輝く鱗が鳴るのであらう。

又煙草を飲む、其の煙が靡いて、蕩けて、薄りと青く霞んで、全身の筋に、ほんのりと揺れ込むのが見えるのである。

男が椅子に歸ると、お舟は銀製の器から、接待の煙草を一本、お辭儀なしに頂戴して、納めた顔で、スウと齒に沁むやうに吹かして居る。とばかりで禮もしなければ、ものも言はない。

閣下に對し無禮な婦、白癡か、狂人、此様なのは御前自ら手を下すまでもない。須らく殿様は、「見苦しい。」で、袖を拂つて、ヤオ、テン、衝と立つて、それ／＼に命じて擱出させて、あとを鹽ばなで清むべきである。が、こゝに妙なことは其の煙草で、ト吸ふ、醫のやうに片頬が薄く窪むと、色の白い襟筋へふは／＼と煙の通つて行くのが、それ、眞綿が陽炎を呑むか、残の雪に霞が掛るかと思えて、影の如く膚の肉が手尖まで揺れ靡く。

じろり、又じろり、と見慌れて、男は鼻をひこ／＼と動かし、うつかり酔つたやうな顔をして居たが、灰皿へボンと吸口を棄てたのに心着く、と急に下つた目をぎろりと剥いて、

「おい。」と呼ぶ。

「……………」

「おい、何ぢや、お前は。三浦の妻ぢやとか言ふが、氣が違つたらせんのかい。——おい！」
「待つて頂戴。」

と大きな瞳で凝と視て、莞爾すると、半ば起ち掛けた男の腰がペタリと着く。

「馴れない御殿だものですから、氣を打つて惜としたりして、早速には口上が出ませんの。」と柄にも無く甘えた口のき、やうで、一寸衣紋を抜きながら、

「日は永い、落着いて。」と、一ツ、縞子の帯の草臥れた山を敲く。

「何、何の用だ。」

「あら、叱らないで下さいな、三浦の妻でも、まだ戸籍の入らないうちは娘ですから、……お嬢ちゃん。ほ、一寸微紅と成つて、と、ぼぼぼう、と口で言つて、瞼のあたりを指の尖でばかす眞似。

「どツこいしよ、此の掛聲ぢやあ年増だね。」と椅子を立つと、袂の手拭を拂つたが、すツと退つて、床へ敷詰めた絨毯の上へ擴げて、故と其處へ膝を支いた。御殿の應接室の敷物に坐つた所は、花見の座と云ふ状ながら、服装が悪いから、本願寺を土下座で拜む形がある。處で、椅子の凭に預けたのを持つて下つた、以前の竹棹に包を結へたのを、ツイと御前の鼻の尖へ出すと齊しく、

「お願ひ！」と情なき聲を上げるや否や、ハと平伏して、手拭の上に手を支いた。

「わ！汚い。」

「御前様、お願ひ！……お取上げの上お慈悲をもちまして、お買ひ上げ遊ばして下さいまし、は

い、お情でございます。」と、泣くやうな音を出す。

「馬鹿にするな、無禮もの！」

男爵は、ぬい、と立つて、

「人を以て計らふ、控へとれ。」

「あ、一寸、もし。」

と、空さまに上げて押留める、腕を、又見せられるのは、其の聲の音あるばかりに響いて、白い肉の揺れるやうな氣勢がする其であつた。

「念のために伺ひます。御家來衆に、お任せ遊ばしても、お差支の無いものが、包の中に入つて居ると、思召すのでございますか。」と、悪落着きに落着いて言ひながら、睫毛を黒く又凝と視る。我にもあらず、男は起つたまゝ、引留められた。

「ふうん、金子に困るで、買うてくれか。古い書畫帖か何かぢやらう。早う言はんか、何ぢやと言ふに。」

「開けて御覽下さいまし。」

「汚いわ。」

「おや、そんな事をおつしやつて可いんですか。」と大道で賣るやうに、小工面に膝の前で包を解

く。……寫眞が大小十四五枚。

「汚いわ。」と呟えた聲で口眞似して、ふツ、と軽く吹きながら、二三度掌で賣品の埃を拂つた。

六十七

思はず、腰を落すまで慌てて蹲んで、男爵が手を出したのは、其が、大形にして、鮮明なる、閣下の寫眞だつたばかりでなく、胸に三個の勳章を佩びたのが、歴々と撮つて居たからで。――矢庭に引摺んで取らうと出す圓い拳をしなひで拂ふと、片手で攫つて、お舟は支膝で胸を反らし、て、(遣るか)で翳して、

「おつと、それから御覽じろ、も些と古いわね、ほゝゝ。」と笑つて、ひよいと持返した裏面を、睨目し看一看れば、爵位、實名を男爵が自署した一方に、(Kの君)と、あやふやに認めたのは、在五の中將の風流を横あるきに眞似んだ蟹の水莖。縁談は纏まるものにして憚り無く人づてに、稲村の娘お京に送つた、結婚申込みの逸品也。

單に其だけなれば、何う間違つて人手に渡るまいものでも無し、又渡つた處で、恥も外聞も内證で濟むから、ゆすががましく賣りつけらるゝ數はない。

「見せろ。」

「大の字、はきくしなにかねえ。」

「まあ、待つておくんなさい。御前、いざござなし、五百圓、懸引は半錢だつて無いんですよ。安いぢやアありませんか。念の爲め唯今お渡し申しますから、お手に取つて御覽なさいまし、だけどもね、力づくや、腕づくで、弱いものを手籠にして、取上げようとなさいますと、私あ尋常ぢや歸らない。怪我をするか不具に成るか、繩つきになるかして、(ちやくくらかちやん)か、(ぎつちよんく)で、鼻唄でないと此の邸は出ないんだから。可ござんすか。右から左へ、五百圓。其のおつもりでお受取んなさるんですよ。一寸、まあ。此處ん所を見て頂戴。」

と小指で弾いた、さあ、此處だ。自署して大間久一とあるわきへ、優しく、しをらしいが達者な女文字で、(落第)と書いてある。――

「佐賀町のお京さんの、御試験済が身上さ。」と、スツと立つて、仇に笑つた。

が、言つて置く。雨夜の釣舟で見た時には、確に此の落第の二字は無かつた筈、――お舟が自身か、誰かが書入れたものに相違ない。として、扱て、萬一五百圓で買取らなければ、淺草紙で複寫して、東京中へ撒散らした上、原物は、六間竹の大釣棹に、高帽子を冠せて、紅い匂袋の大なるを二ツ飾つたのに結へて、日本橋へ七日曝して、電車の交叉點と言ふ交叉點を押廻した後を、西の市へ出して、耀に掛けて賣るのだ、と言つて、大川の三股で拾つた事を話した。次手に、ほかの寫眞も署名の有無に係はらず、顔の知れたのが大分ある。生藥屋の次男やら、呉服店の舎弟やら、醫學士が御當人。會社員、銀行家、外交官、其の他、社交界の若手の流行形、ハイカラ形、キザ形、氣取形、ニヤケ形、いづれも、佐賀町の、あの美色と財産を、たゞで占めようと、推すな推すな連中。片端から賣りつけるから當分小遣には困りやしません、と澄まして聞かせて、最も人を悪く出りや、見せては絞り、見せては絞りで、一生の寶物だけれど、そんな阿漕な事はしやあしない。見切賣の一度こつきり、慾を知らないお嬢ちゃん、と又笑つて、當時ぢやあ高等學校は愚かなこと、中學の試験でさへ、及第の合格は、千人のうちに幾人とかで、學生さんは半狂亂、半病人に成ると言ふもの、如何でござい、と寫眞を出して、お京さんと、何十萬圓唯取りにしようなんて、落第は當前、向後お氣をつけなさいよ、と、人を呑んだ意見までして、チョツ、男は下落したね、最う些と骨がありや、千兩でも安いもの。

「さあ、お出なさいよ、耳を揃へて……一寸さ。……」

男爵が、唯恐しい顔をして、打反返つて、睨んで居ると、裾も浮いたやうに軽く寄つて、トンと其の肩を敲いて、

「まあ、待つておくんなさい。御前、いざござなし、五百圓、懸引は半錢だつて無いんですよ。安いぢやアありませんか。念の爲め唯今お渡し申しますから、お手に取つて御覽なさいまし、だけどもね、力づくや、腕づくで、弱いものを手籠にして、取上げようとなさいますと、私あ尋常ぢや歸らない。怪我をするか不具に成るか、繩つきになるかして、(ちやくくらかちやん)か、(ぎつちよんく)で、鼻唄でないと此の邸は出ないんだから。可ござんすか。右から左へ、五百圓。其のおつもりでお受取んなさるんですよ。一寸、まあ。此處ん所を見て頂戴。」

と小指で弾いた、さあ、此處だ。自署して大間久一とあるわきへ、優しく、しをらしいが達者な女文字で、(落第)と書いてある。――

「佐賀町のお京さんの、御試験済が身上さ。」と、スツと立つて、仇に笑つた。

が、言つて置く。雨夜の釣舟で見た時には、確に此の落第の二字は無かつた筈、――お舟が自身か、誰かが書入れたものに相違ない。として、扱て、萬一五百圓で買取らなければ、淺草紙で複寫して、東京中へ撒散らした上、原物は、六間竹の大釣棹に、高帽子を冠せて、紅い匂袋の大なるを二ツ飾つたのに結へて、日本橋へ七日曝して、電車の交叉點と言ふ交叉點を押廻した後を、西の市へ出して、耀に掛けて賣るのだ、と言つて、大川の三股で拾つた事を話した。次手に、ほかの寫眞も署名の有無に係はらず、顔の知れたのが大分ある。生藥屋の次男やら、呉服店の舎弟やら、醫學士が御當人。會社員、銀行家、外交官、其の他、社交界の若手の流行形、ハイカラ形、キザ形、氣取形、ニヤケ形、いづれも、佐賀町の、あの美色と財産を、たゞで占めようと、推すな推すな連中。片端から賣りつけるから當分小遣には困りやしません、と澄まして聞かせて、最も人を悪く出りや、見せては絞り、見せては絞りで、一生の寶物だけれど、そんな阿漕な事はしやあしない。見切賣の一度こつきり、慾を知らないお嬢ちゃん、と又笑つて、當時ぢやあ高等學校は愚かなこと、中學の試験でさへ、及第の合格は、千人のうちに幾人とかで、學生さんは半狂亂、半病人に成ると言ふもの、如何でござい、と寫眞を出して、お京さんと、何十萬圓唯取りにしようなんて、落第は當前、向後お氣をつけなさいよ、と、人を呑んだ意見までして、チョツ、男は下落したね、最う些と骨がありや、千兩でも安いもの。

「さあ、お出なさいよ、耳を揃へて……一寸さ。……」

男爵が、唯恐しい顔をして、打反返つて、睨んで居ると、裾も浮いたやうに軽く寄つて、トンと其の肩を敲いて、

「汝、持つて行かれるか。」

「え、持つて行きますともさ。」

少々ぐらゐ、不義、不善、積悪の祕事を新聞などで發かれたのでは、もの數ともしなからう、が、義太夫で人情を解すると言ふ色身な男爵に取つては、見合の寫眞に、落第の消印を打つて、大川の水に棄てた後で、手を洗はれたと言ふものを持歩行かれるのは、此の上も無い自尊心の打撃であつた。一度奥へ入つて、言ふがまゝの五百圓。小切手を認めて、お舟に突着けながら、底知れぬ意味ある態度で、言葉に少からぬ威嚇を含めて言つたのに、お舟の答は響の應するばかりも、張合ひの無いほどお手輕なものであつた。

「うむ、見事、持つてくか。」と、其の小切手の上へ、張肱の、つくね芋の如き握拳を無手と置いて、又睨むと、

「何を言つてるのさ、未練らしい。」で衣紋を直し、胸に萎々とした帯の皺を、ぐい、と伸ばした、其處へ着服の様子である。

「考へろ、能く。……天下に人の知つた華族の家に来て、ゆすりを働いて、な、何うして此を持つて行くのか。不埒もの。」と、忽ち五百圓丈けの大音を發して、破鐘の如く喚いたのは、盜賊は、其の通際を一喝せよの軍略を心得て、弱腰を蹴掻かことしたのらしい。

「ふ、ん。」とお舟が鼻で笑ふと、つかくと、しかし、落着いた樓の運びで、室の一隅に今は鎖した、瓦斯暖爐の上の小棚に、飾り着けの呼鈴を——心得たものかな——リーンと壓すと、小間使が白足袋の小刻みに來て、「は、と御前に向ふ、横合から、

「姉さん、書生を呼んで下さい、私ん許のだよ。」

「は。」又ツ、と刻み足で、引いて行く。

「こら！何をすると叱る間も無い。」

「御前々々御前、此の暖爐ツてものは、何ですか、夏中氷を入れて、冷蔵庫のかはりには出來ないものなの。」と棚に手を掛け、珍しさうに上から覗く、と思へば、ひよいと娘らしく優しく低く居て、鐵扉を敲いて——男爵が、齒を嚙んで何も言はぬのに、

「あら、然う、冷蔵庫には成らないんですか、不自由なもんだわねえ。」

「はツ、奥様。」と、桶彦が頓首する。

其の間、大間男爵は言ふ術も詮方も無かつたのである。此の上は、撲るか、蹴飛ばす外に、取るべき手段は有りさうにも思へない。

お舟は周囲の庭を廣く、すらりと暖爐に寄凭つて、持つといで、其の小切手を。

「おい、」と返事もいけ粗雑に、卓子から引たくつて、懷中へちよろりと入れる。
「次手に小道具の始末をして。」

「おい、」と、寫眞に手拭なんぞ、釣棹ぐるみ引擔ぐ。

「此の埋合せにや、御前、持參金の後家が可いわ、……然やうなら。」

男爵が扉を閉めた、グワンともドンともツーンとも、其の音の凄じさ。大間の憤怒は音と成つて、唯此の響に籠つたのである。

「おや、鬼ヶ島。」と片頬笑して、

「釣つた處は浦島だねえ。おい、龜や。」

「私あ龜か。」と桶彦は首を窘める。

「背負、背負。」

「わあ、堪らねえ。」と、あらう事か疊廊下を巫山戯て出て、玄關で小手招き、横着けの自動車で、通魔の如く颯と出た。が、此の行方は——小網町邊の銀行へ寄つて、それから芝、日影町の何とか云ふ名代の古着屋で、着ものの上、指環、突込みの簪まで、忽ち意氣づくりの貴婦人に變ると、桶彦を歸したあとを、築地へ廻つて、出雲橋を渡つて、其の向御存じの第一流と言はる、待合の奥、三ッ指で仰を伺ふ女中に、歌舞伎座出勤中の舊俳優大名題の何某を、召せ、との御意。

宵月

六十九

「松どん、それぢやあね、お京様は、お歸りがけに大きい御新造さまのお墓參りを遊ばすつて、靈岸町で下りて、淨玄寺へお寄んなさるから。」

「へい。」

「お前さんは、づつと此の電車で先へ歸つて、(お手間は取れませんが)少し遅く成りますから御心配をなさいませんやうに。」と若い御新造さんに然う申上げて下さいよ。」

お常と言ふ圓鬘に結つた實體な其の女中が、押上の電車が菊川橋を越えるあたりで、小僧の松吉に、恚う言附けた。此の二人が伴をして、佐賀町のお京は、秋晴の此の日、月參りの柳島へ詣でて、あとを橋本で早めに支度をした歸途であつた。昨年世を去つた母親の墓が淨玄寺にあるのである。

歌の藥芍
で、靈岸町へ電車が着くと、此處で下りる者は、そんなに無かつたが、日暮前の例による混雑ゆるゑ、お常が釣革の人を分けつつ、娘の分と、涼傘を二本に、小さな風呂敷包を持つて下りると、

人温蒸に少し上氣をした細面の、中脊で華奢なのが、艶かな銀杏返、白瑠璃の根掛して、曙の露の酔へるが如き、朱鷺色の瑠璃を柿の實に擬へ、表烏金、裏黄金の葉をあしらつた黄金脚の簪、黄楊に一面の銀、瑠璃色に一輪龍膽を描いた挿櫛。紺地にお納戸の金紗縮緬の縞の袴、藤紫七寶つなぎの紋と、黒襦子の腹合せの帯、紺と淺葱段々鹿の子の背負上げして、無地の藤紫の半襟、紺の紋縮緬の長襦袢、言ふまでもなく棲深し。

蕙の錦を刺繡した小さな信玄袋を、白く輝く手首に掛けて、袴の裾を細りと清らに下りると、お常が引添うて一寸道傍へ立つた、と思へば、ひよこりと其處へ、松吉の鳥打帽、横ひしやげの廂の下の猿眼。

「あら、まあ、」

お常が驚いて、

「何うしたのさ、お前さんは先へ歸つてお言託をするんぢやないか。」

「あッ、然うだ。」と刎上ると、縫上げの嵩張つた腰を振飛ばいて、もう停留場をギリ、と出て、速度を加へた電車の横を擦るばかりに、夕空を浴びて躍つて驅ける。

「危い、お止しよ〜、」とお常が駒下駄を踏んで、身悶する、と其の間さへ待たなかつた。

「松どん危い。」

と優しいが凛と透る聲を掛けつつ、

「松どん。」と呼びつつ、何と、小走りに颯と蹴返す棲、近火の時とて慙うした姿を見たものは、よもあるまい。羽二重足袋は霜を亂して、町を散る薄錦葉。

ひよい、と飛絶つた鞠のやうな小僧の腕を、此の追ふ人へ心中立に、車掌が、ぐいと引いて乗せたと思ふと、眞赤な顔して、松小僧、橋本でした、か食つた元氣の好き。鳥打帽を高々と振離して、ひよこ、とお京を見てお辭儀をすると、ちよろりと車中へ見えなく成つた。

其のまゝ、お京は立止まると、スツとおくれ毛も靜まつたが、動悸の響の袖を傳うて、微に裳へ流るゝのが、尙水際が立つのであつた。

「何を遊ばすんでございますね、あゝ、驚いた。」と此の方は所帯崩して、あたふた駈寄つたお常が、吻と言ふ息を吐いて、

「飛んでもない、お京様。」

「だつて、だつて、」

「貴女、だつてぢやありません、怪我でもなすつたら何うなさいます。」

お京は軽い咳をして、

「少し苦しい。」

「まあ、お胸が痛みはしませんか。」
「否」と涼しい目で莞爾する、紅をさしたか、と美しい唇の色に似ず、息がはずんで、玉の面は月の蒼みを帯びたのが、ふと心づくると、町の兩側に、往來がづらりと足を止めて左右から見居たので、はつと雪なす頸を伏せて、肌着の襟の紅幽に、お常の胸へ俯向いて、
「行かうよ——急いでさ。」

七十

烏の留つた火の見える。……伽藍の屋根は其よりも高く聳えた、靈巖寺の門から右へ入つて、寺の間を縫つて行く。——古は坊舎八ヶ寺、所化寮七十五院と稱へた三萬坪の地なれば、町を一つ裏へ廻ると民家は數ふるほどもなく、寺と寺とが連なるが、門傾き、堀崩れて、蔦生ひ、葎結ばれて、無住らしい廢院も少くないので、地境も無き、卵塔場の疎な竹垣、壊れたる枳殼垣で、僅に道を分つばかりの處が多い。

然れば臺を迂り、泥に倒れ、草に轉つた無縁墓の數々は、苔のみ徒らに黒く肥えて露を吸ひ、瘦地に茂つた雜草は、莖を硬く葉を逞しく立蔽ひ重り合つて、颯の面、猫の髯、狸の尾の、時を得顔に躍り狂ふに異ならねば、吹く風の強くもあらぬに、戦いて立つ古卒塔婆も供養の葉と思はれず、雨に朽ち、霜に曝され、氷に裂けた野晒の迷出しやと疑はる。荒墓の曠野の中に、此處彼處、むら／＼と湧いた青五輪は、消え行く西日に黒き入道の影を顯し、瓦焼く竈を築いた狀の濡れ佛も、口を開いて、化けてやおはすと凄いやう。たゞ其中に優しきは、幾十年の昔にや、手向けのまゝに根を持つた、一叢々々木槿の花の、榛を力に咲いたのである。其の白くまた淡紅色の花の露にすら／＼と霧が添ひつつ、薄、屋花の穂に靡く。と可懐しさの色に出でて嫁菜が淡く咲交る。が、紫の故とし言へば武藏野の哀は此のあたりをこそ言ふよと見ゆ。——あれ聞け、蟲が鳴く、蟲の聲々。

早や遠近の灯の影、一つ二つ三つ、星より早く紅に幽に點れて、揺れ亂れぬのが頼母しい、でない狐火に紛れよう。

來かゝるお京の姿の伊達も、此の細道の、まばら垣、草に薄に添ひ行けば、暮寒く露冷うして、棲、腋明の紅さへ、水引の花より細かつた。

「勿體ないわねえ、……お常どん、手をお貸し。」

お京は、すつと腰を撓めて、其處に何體、前後に右左に倒臥して見え給ふ、石の如意輪觀世音の、中にも薄を御枕、破垣の外に御首のあるのを、手頃なれば捧げ起した。

「眞個に、勿體なうございますね。」お常も沁々手傳ひながら、

「暴風雨の時のまゝ、なんでもございませうよ。」

「でも、此間通つた時は、こんなでは無かつたけれども。」

「あれから、又暴風しましたもの。」

「差出ましたかも知れません。」とお京は袖に手を合せ、

「御免なさいまし、観音様。」

「観音様。」

「お膝の處に咲いて居ました。嫁菜の花を下さいまし。」

と露ながら折つて起つ。

「今日は思掛けず来たもんだから。」

「ほんにお花の用意がございませんでした。」

「お目に掛けようね、母様に。」

打見遣る、尾花の末に、夕霧に浮んだ棟は、巨なる空行く船の形に見えて、其が淨玄寺の屋根である。

また一陣風添へば、草は垣根から、其方狀に颯と靡いて、櫛の葉白くはらくと水一筋流る、如く、浅茅生の露の分れて散る中に、地藏もおはする、如意輪の御姿。今見たよりは數多く、北

に西に、伏まろび、仰倒れてましますは、われら人間の惱みに、惱み、苦みに、苦み、あこがれに、あこがれ、戀に、戀ひて、あはれ生命にもかはらせ給ふ、とうら悲しくも尊いのである。

お京の目は涙ぐんだ。瑪瑙の簪に薄い霧。

七十一

「お常どん、姉さんにも話をして、石工か何ぞ入れて、ちやんとお据ゑ申さうと思ふわ、私。」

「え、結構でございますとも。」

如意輪の御姿の、皆夕暮の墨染ながら、御顔の、ふと輝いて見えたのは、こぼるゝ涙の光のみ

かは、永代あたりの空低く、霧柱した五月月。

あたりに近き入江、横堀、人の家の淀める池にも、今頃なれば水に浮く鯛の背から暮初めて、

かうした月の細い影は、ひらりと翻る銀の鱗に映る……

「豆腐屋さん——」

野を越え、町を越えたあたり、遠くから響いて聞えた、幼なさうな女の聲。……水口や出窓で

無しに、横川の岸のかゝり船から苦を出て呼ぶ状の、青く澄んだ水とともに、蘆とともに、筏と

ともに、橋とともに、大川に住む身の、眼に泛び胸に沁む。

お京は嫁菜の手の袖を合せて、夕餉の茶を呼ぶうら悲しい其の聲の、籠つて餅に成りさうな、
浄玄寺の森を墓越に視て立つた、——恚うして逢ひに行くさきは、可懐しく、可慕しき母の冷
き奥津城の、……それさへ影は暗からむ。

「寂しいねえ。」

「秋の日は此ですから、些とも油断はなりません。」

夜は取巻くやうに襲つて、イむ人の姿のみ、水で描いて映出す。

「お京様。」

「あゝ。」

「大分暗く成りましたが、矢張りお参りなさいますか。」

「行くともさ、母様に逢ひに行くんだもの、途中から歸られて。」

「真個然うでございますね。」

「では、観音様。」

「観音様。」

薄が送れば、尾花が招く、嫁菜の花に行く袖は、霧を渡るやうである。
「蟲が鳴くこと。」

「好い聲ですが、寂しうございますね。」

「冷い、細い、水の音を聞くやうだわね、寂しいこと。」

「お京様。」

「あゝ。」

「お寂しうございますか。」

「寂しいよ。」

「お京様。」

「あゝ、と空な返事する。」

「貴女。」

「あゝ、何だい。」

「貴女、あのう。」

「何だよ。」

「貴女、お婿様をお持ち遊ばしな。」

「欲しくなつたら。」

「そんな事をおつしやつて、お欲しくないんてございますか。」

「まづね。」と、澄して言った。

「ですがね、こんな道を恚うやつてお歩行ひ遊ばす時、常やでなくツて、お婿様だつたら、どんなでせう。」

「活動寫眞の看板だね。」

「まあ。」

「きつい嫌。」

「そんな事をおつしやつて、……持つても御覽なさらないで、……一寸、お京様。」と一足追着く。

「お常どん。」

「へい。」

「こんな處で、お婿さんの話をする、お月様の影で狐が化けるとさ、そら、あの薄が。」

「あれえ。」

「何だい、臆病。」

お京は花を夕月に、

「あ、雁が渡る……」

「棹させ、權立て、

雁々渡れ。

後の雁が先に成つたら、

筈取らしよ。」

「お京様、貴女、簪を左へお挿しかへなさいましな。」

何心なく手を遣つて、

「あら、何故なの。」

「夕方の月に、雁が空を、あゝ、翻々と、……こんな時に、簪を然ういたしますと、事託かつて来た好い音信のお玉章を、雲から置いて参りますとさ。」

「然うかい。」と柔順に一寸挿直して、

「待つ音信も無いけれど、母様のお使かも知れないから……」

空の羽音に散るやうな、薄の露を二人で見たり。

「心細く成りました。」

「もう直だよ。お墓が其處だから私は却つて氣丈夫なんだよ。お常どん。」
「はい。」

「あれ、あれは狐ぢやないの。」

「不可ません。」

「見たが可い、餘りお婿様々々ツて言ふもんだから。」とすん／＼お京は先に立つたが、

「一寸、犬が出はしまいかね。」

「それ、御覽なさいまし。」

今度はお常が露を拂つて、主従やがて淨玄寺に辿り着くと、這は什麼、古は寺領百石と聞えたる、一座峰の如き大伽藍の門は、巖を削つて、鐵を以て蔽へる如く、大地を壓して鎖したり。慌しく、お常が潛門に、ひた、と着いて、押試むるに、お京も双手を添へたれど、唯此の人を入れどとやうに、齊しく寂寞として封されて居たのである。

「飛んだことをしましたわね。」

「……………」

「口惜いぢやありませんか、敲きませう。」
お京が黙つて行むので、

「敲きませう、可うございませう。」

「お止しよ、庫裡が遠いから聞えはしない。」

「否、四邊が静かですから響きますとも。」

「尙ほ悪いわ、騒々しくつて。」

「構ひますもんですか。」

「不可い、佛様が在らつしやる、お騒がしいから。」

「ぢやあ折角何で、残念ですが、こゝからお拜み遊ばしてお歸りになりますか。」

「それは可厭だわ、母様に逢ひに行くのに、何だか木戸を突かれたやうでさ。」

「では、何ういたじませう、困りましたねえ。」

「お待ち、可い事があるの——でもね、お前叱言を言つちや不可いよ。」

「私が叱言を、とおつしやつて。」

「まあ、可いから、此方へおいでな。」

門を後へ小戻りすると、以前は淨玄寺の下寺らしい、善明院と言ふ大分荒れたのが一ヶ寺あつて、其の門は葎の中に薄明く開いて居る。

心得濟ました様子で、お京が草を分けて入るから、「お京様。」と言ひ／＼、お常が續くと、門内

狭く直ぐに卵塔。で、其の石塔、石碑の間を潜ると、一方が溝を隔てて往來の道に繋つて、一方は形ばかり仕切つた竹垣のまばらなのを境に、其が隣の淨玄寺の墓所に成る。

とばかりで、お常は半ば其の意を得た。深川佐賀町の豪家の墓は、一むらの樹立の梢を抜き、礎に蓮池を控へつつ、黄昏に、星を頂き、影を宿して聳えて見える。

が、尙聞けば、いつぞやはあの、蓮の花の盛の頃、寝られぬ短夜のしらく、明の起きぬけに、小僧を連れて詣でた時、其の時は未だ淨玄寺の門が開かないで、小半時待侘びつつ、彼方、此方、東雲の空を視めながら、ふと此の善明院の門から墓越しに家を見附けて、此の竹垣を跨越して入つたのだ、と言ふ。

「まあ、貴女が。」

「だからさ。」と樹の下枝に、一寸背いて、含羞みつつお京は莞爾。

七十三

素木の薄い駒下駄を、垣の破目に衝と掛けて、片袂を揚げながら、草の葉ながら竹に縋る。：高さは乳のあたりに過ぎないのであるが、細く緋が散れば緋を庇ひ、青く袂が返れば袂を庇つて、爪先の白さも慎ましければ、手も足も進まずに、帯の綾、衣の艶のみ、山鳥の尾の草がくれ

つつ尾花に縋れる。

「跣足に成つ了はうか知ら。」

「まあ、貴女。」とお常は氣を揉む。

「其の（まあ貴女。）が不可いのよ。」

「だつて、お京様。」

「其の（だつてお京様。）が不可いのよ。」

「あら、何ういたしませう、私はもう。」

「何うしようたつて、お前、偉い！とか、旨い！とか言つて景氣を着けておくれたと、其の勢で仔細なしに飛越せるんだけれど——いつかの時は松どんだらう。——（此處が可い、お跨ぎなさい。）ツてお前、自分でひよいと飛んで、また飛返つて見せて、（偉い。）ツて手を拍いてくれるから、何でもなく越したのに……松どんたら、私のお参りをするうちも、獨で、飛越えたり、跳越えたりして居るんだもの。……少し高い踏段ぐらゐにしか思はなかつたけれども。」

「では、松どんが、こんな處をお教へ申したのでございますね、怪しからん奴でございます。」

「それ、御覽、お前は、然うやつて、横に居て、私の袖でも捲れると、あ、亂暴だ、お轉婆だ、蓮葉だ、と氣で躡めようとして居るから足が窘んで不可いんだよ。」

「まあ、だつて貴女。」

「心懸が悪いわ、其の（まあ）（だつて）なんだから、……動ともすると……」

「そんな、（動ともすると）なんて煩かしい事をおつしやつて、私は存じません。」

「知らない……私も。」

お京は二つばかり垣を敲いて、

「焦つたい。」

「仕方がございません、今日は此處から御挨拶をなすつてお歸りなさいましな。」

「不厭だわ。——一寸、傍へ行つて甘えて來なくつちや——お常どん、お前、後から後生だから私を抱き上げてくれないか。然うすると越せるから。」

「では……お怪我をなさいますな、お召ものは構ひませんが、お簪なんぞ振落とすと不可ませんよ。」

さあ、（掛聲で、）よう。」

「あれ。」

「え、」

「擦つたい。」

「幾世さん……」

寂するやうに響いた男の聲に、二人はひつそり、蟲の音も止んで、寂然とした。

「幾世さん、……幾世さんぢやないか。」

初のは、おなじ墓地に、彼方此方、樹立の如く背も高い、茂つた木槿の薄暗闇を通して、道端の溝の彼方で聞えたが、二度目を呼んで然う言つた時は、最う其の聲の主は、此の善明院の浅い門をつか／＼入つて、垣の二人の背後に立つた。

唯、お京の密と背けた横顔を一目見つつ、帽子に手を掛けた其の人は、一星天に高く、眼爽かなる峰である。

お常に向直つて、一寸會釋して、

「失禮でした。」

「は、」

「通りがかりに……知合の婦人が居るやうに見たものですから。——年紀恰好が似ておいでなさるので、間違へたと思はれます。お託をします、御免なさい。」

其のまゝ踵を返さうとするのを、一步追つて、お常が小腰を屈めて、

「否、何ういたしました……お詫なんて、飛でもない、貴方、申譯なら此方から申さなければ成りませんので、實は……」

知合の婦人と言ひ、言ひつつ此處に來た峰を視たお常は、誤つて、誰かと打合せなどして暮參に來たらう、其人たちの菩提所だ、と思つたらしい。二人が侵入の故由を言つて、不束を謝したのである。

七十四

峰はお常の言ふのを聞いた。——事の垣越の儀に及んだ時、其の睜いたる目許に、ふと優しい影が添つて、

「然うですか。何御斟酌には及びません。私の家の菩提所でも何でも無いのです、……今日は心當りを捜したい男があつて、木場から、あの邊を散歩かたゝ歩行いて來て……其の人ではないのですが、少し用のある婦人の姿を見たやうに思つたのが人違ひで、却つて此方こそ失禮しました。然うですか、暮參においでなすつて、隣寺の門が閉つて。……構ひませんとも、私にしたつて、こんな場合には、そりや遣るんですよ。」

と瞬きもしないで言つて、

「後見がお前さんぢや、力が無くつて不可いでせう。私が乗越させて上げませう。」

「は、」とお常の方が、上の空で、唯、腰を屈めたばかり、其を何うと云ふ隙もなかつた。

峰に斜に袂を見せ、葉隠れに立つたお京の袖に手があたると、腕に洋杖の柄が掛るのと一所であつた。美しい人形を後向きに抱くやうに、すつと草から裳を抜く、とお京が兩袖をはつと絞つて、深く面を蔽うた時、月影は晃々と薄の穂に輝いて、帯は照り映えて竹垣をスツと向うへ。

……や、ひぞつたか、はじめは、其の帯の重いやうに應へたのが、抱上げると軽く成つたは心を許したのであらう。峰は傳説ある美女の彫像を扱つた如く兩の腕に感じたのである。

「手を離しますよ。石塊や瀬戸ものの缺片はないか、下を視てお立ちなさいよ。」と峰は垣越に覗くやうにしながら言つた。が、お京が袖屏風を除らない上、頸も白く垂る、地を離れた身の便なさは、離すと草に萎れ伏しさに思はれて、腕で一呼吸支へたが、膚の衣、また、袷、二重の帯を隔ててさへ、男と云ふものの手の觸れたことのない處女の身の、恰も太陽の影に、苔の咲くが如き、膚の揺めきと、血の流る、氣勢を感じて、忘る、やうに手を離した。

瞬間、夢の如き光景は、白雪を束ねて虹の彩絲を縷つた鞠の、峰の掌を這つて、尾花に隠れた風情であつた。

「まあ、貴方。」と、お常が半ば恍惚りしたやうに言つた。

「うまいでせう。……先祖は雲助なんだから。」と微笑んだ。

「あんな事を、おつしやつて。」

お常は、まだ顔を蔽うたまゝのお京を見て、
「貴女、お禮を。」

「申戯ぢやない、雲助に禮を言ふ人があるものか。しかし、歸途は何うするんです。まさか又此の垣を越すのではありますまいね。御菩提寺と言へば、庫裡にも學寮にも知己がありません。門は鎖つて居ても、墓から本堂へ抜けられるでせうから、其方へ廻つて、成るべくは、表町へ出るまで、誰かに送つてお貰ひなさい。——貴方がたにかゝり合つた事ではないが、私のやうな、矢張り雲助らしい風體の悪いのが、何だか、其方此方、あとに成り、先に成り、私を先刻から跟けて居るやうだから……何しろ人氣の荒い處らしい。可ござんすか。」

「御深切に、まあ、何から何まで……え、其つもりでございますとも、お京様、常やもすぐに参りますから、お參詣が済みましたら、貴女は御本堂へ入らして……」

お京は挿櫛燦然と、龍膽青く頷いて、

「お常どん、ようくお禮を申上げて。」と袖を拂ふと、時のまに窶れもしたやうな身に沁みる片頬を見せて、蓮池の方へ小刻に衝と行く。

「次手にお前さんも擔いで上げよう。」

「何ういたしました……罰が當ります。」と蹲んで了へば、

「やあ、嫌はれたな、雲助。ぢやあ、息杖を上げようか。」と洋杖を小脇に腕を組みつつ、峰は見返りもしないのであつた。

七十五

「あゝ、もし——」

とばかりでは、主命、我心ふたつながらお常は禮が言ひ足りないので、五六歩後を追つたけれども、峰のすん／＼と行くのに氣を吞まれて、うつかり見送つて……又其でも済まず、氣ばかりあたふたして、以前の破垣へ歸ると、其處に置忘れてか、蕙の刺繡、可憐い信玄袋が薄ながらに竹の尖に掛つて居た。

名札が入つて居るでもなし、まさか、あの立派な方の御人體、目錄やなぞで挨拶をせよ、と云ふ主人の心意氣ではよもあるまい。などと思ひながら、其方状に見ると、爪立つても、伸上つても門外は夜が来て、最う見えぬ。かはりに手許、身の周圍、近いほどは、枯蓮の池の面にも月の影。……其處にお京の袖を見ながら、竹垣を跨がうか、まよ、髪さへ厭はずば、下から潛つて出もせうか、と信玄袋を懷に、包と涼傘を二本ながら引抱へて、お常が四邊を覗しつつ身構をしたと思ふと、

「あッ、」と刀の刃を踏んだやうな聲を立つるや、包も涼傘もハタと投げて、

「不可ません、不可ません、飲んぢや不可ません、そ、そ、そんなもの。」と息を切つて呼びかけ呼びかけ、此の卵塔の片隅に、高く暗く木槿が茂つて、咲く色も淺葱にや、とむら〜と月に映つて、葉の影に露に濃い中へ、一散に飛隴つて、我を忘れて背後抱きに抱止める。

抱止められた若い婦の、白魚のやうな手の裡から、濁つた眞蒼な雫が垂々と、且つ缺け且つ荒れた墓石の根に溢れた。……竹筒の水を傾けて、掌に掬んで飲まうとしたのを、お常が此方からちらと見て、膽を冷して飛附いたのである。

「申、申戯ぢやありません。御存じでないのせうか、墓所の溜水は、何處のでも、櫛の枝だの實だの、幾日となしに雨と一所に朽ちたり、腐つたりして居ますからね、大毒なんです、生命を奪るんです。まあ、危いこと。何うなすつたの、咽喉が乾いてお飲みなさらうとしたんですか。」

「……………」

「え、」

「はい、」と優しい聲が涙ぐむ。其の抱き止められた娘は、眞心の人の力にも堪へないやうに、はたと草に膝を支いて、なよ〜と戦くのが、可哀に手に響く。肩越に顔を見ようとして、密と差覗くとともに、頭から氷を浴びたやうに、お常も慄然としてふる〜と震へた。娘は鹿子の背負

揚を解いて、膝を巻しめて居たのである。

「飛んでもない、まあ、飛んでもない、貴女、覺、覺悟で飲まうとなすつたね、ね。」と心を籠めて抱きしめられて、

「はい、はい、」と唯弱々と差俯向く。覺悟に閉ぢた睫毛にかくれて、寂しく面寝れしたやうながら、此は正しく菊川の、秋美しき幾世の面影。

うつむいたなりに鬢のほつれ毛、はら〜と、あはれな頬を白露に映し留めつつ、濡れ〜と打傾いた、小さい石碑に、先祖代々とのみ見らるゝのが、亡き遊女の墓標で、善明院に墓があつた。

「まあ、何うも、何うも。」

とお常が一人慌て惑うて、——毒と云ふ水は早や滾れた、——娘の手を尙ほ袖で捲きつつ狼狽へて、

「確乎なさいよ、確乎。え、可うござんすか、急ぐ處ではありませんよ、必ずともに、此處は慌てる處でないのですよ。」

幾世の亂れた結締は胸とともに震へながら、

「はい、堪忍して下さいまし。」

「そ、そんな、私にあやまるなんて、それが不可い。気が轉倒して居なさるんだ。必ず、此處は急ぐ處ではないのです。落着いて下さい、氣を確に——私何うしたら可いだらう。大慈大悲、大慈大悲。」と口の裡。

「お常どん、何うかしたの。」
垣の彼方の薄に、櫛、輝くやうなお京の聲。

七十六

お常が口早に、然し四邊を憚る聲を潜めて、こゝに娘の自殺をしようとした事を、息を継ぎ、息を継ぎつつ言ふのを、垣に摺れく近寄つて、葉越に伸上つて聞きもあへず、

「お常どん、——大事に、大事にね、氣を着けて上げるんだよ。今ね、前原さんと呼んで、呼んでね、一所に其處へ行くから、可いかい。」と、お京が言ふかと思へば、蟲の鳴く音も止めないで、薄が戦ぐ衣摺れの軽い音。

「姉さん。」

「あの、私は、」と幾世は内端な身動きで、擦抜けようと肩を震はす。

「否、放さない、放しませんよ。私は何のおたよりも成りません、奉公人でございますが、今

のは主人でございませぬ。大事にしてお上げ申せ、と屹と申しつかりました。はい、あの、もう慥う成りますれば、主命とやらでございませぬから、たとひ姉さんの方で御迷惑でも、お止め申さなければ成りませぬ。そして決して御心配なさいませぬ。唯今主人が連れて参ると申しましたのも、大丈夫憂慮のある人ではありません。姉ばかりでは覺束ないと思ひなすつて、御相談相手になさるんでせうから、ね、ね、姉さん。」

幾世は現を呼覺されたやうな含聲で、

「はい、」

「御様子を伺つた上で、必ずお力に成りませうから。」

「濟みません、私は、もう。」

「何の、死なうとなすつたこんな時に、濟むも濟まないもあるものぢやありません。」

お京が續く。……一足前に、蝙蝠の躍るが如く、道服の袖を煽つた、形は滑稽けながら、眉長く、瞳深く、早や涙ぐむまで同情の色面に溢れ、提灯なしに黒く成つて駈け込んだのは、お京は姓を言つて前原と呼んだ、が、乾坤一露臺の主人、觀星堂如海、即ち道人は、淨玄寺の學寮の食客であつたのである。

「お常どん。」

「先生。」

「扱て椿事ぢやな。」

「貴女、些とはお落着きなすつたの。」とお京も親しげに袖を寄せた。

亡き遊女の墓の前に、三人の六つの袖にも置く露や、情に涙の誘はれて、

「はい、」と幾世の居坐を直さうとして身を開くと、結へた紐に膝を取られて、崩折れ状に倒れるのを、お常が早く引抱へて胸で止めた。手が觸ると、兩の袂にまだ、其の上に石がある……

「まあ、こんなもので、飛んでもない、身を投げようとなすつたね。」

「え、」と、お京が尙ほ摺寄る。

「何時の間に拾ひなすつたな。溜水の櫛の實の毒を飲むのを止められて、止められながら、此の墓で拾うたかな。お常どん放すなよ。さて、よくの事ではあらうが飛んでもない無分別ぢやぞ。」

「否、否、あの、此處ではございません、お墓へ参ります途中、観音様のお石塔の澤山ございます處で、拾ひましたのでございます。……申譯はありません。」

「お京様、それぢや、彼處でございませぬか。」

「あ、然うね、……貴女、観音様の御像が倒れておいでなすつたでせう。乾と、乾とね、身代りに成つて下すつたのですから、どんな御心配な事があつても、お助かりなさいますから、お落つきなさいませよ。」

とお京が塵を拂つて遣る、幾代の膝に溢れつつも、墓に一束、嫁菜の花の置かれたのを熟と視て、

「あ、矢張り母様の墓ですか。」

と言ふより早く、衝と身を背けて立つと、堪へぬ涙に、肩を絞つて袂を當てた、月に桔梗の露の一本。墓に伏したは女郎花。

露の袖

七十七

「言語道断ぢや。」

如海道人は氣を詰めた沈んだ色して、

「天地は不思議で、何が間違ひの因に成らうも知れぬ。では、先づ人形に潜めてあつた、あの翡翠の玉が、和女を殺さうとしたと言つても可い——は、あ。」

と又深く頷いて、墓の水を月に透し、草に覗いて、

「至極の儀ぢや。成程、眞黒に朽ち濁つた溜り水に月がちらくと映ると……腐れ沈んだ櫛の實と思ふのが、青い玉のやうに見えて、ふと其の翡翠を思ふにつけて。——こゝに草葉の蔭に居なざるのが、生前何かの本で読んで和女に話して聞かせなかつた、此を飲むと死ぬると言ふのが胸に浮んで、覺悟を早うして、水に赴かぬ先に其の毒を以てぢや。……はあ、成程。」

然も、これ、何と何うも、和女が……一つは其の仁に對して申譯の無さにも死なうと思つた人が、折から垣の外を通つて、……はあ、合す顔のなさに草に領伏し、尾花に絶つて隠れると、和女の名を呼びながら、此の墓地へ入つて、それが次手で、今の、あの娘御、お京さんを抱上げて、垣を越さずるとずん／＼歸つた。……はて、餘所ながらも、後影を拜んで、暇乞の出來たのを一生の思出に——卽座に毒櫛を飲まうとしたのぢや、何とも早や。」

「あの、櫛の實は、まだ女中さんの影が、彼處に」と指すにも、幾世は心の悩み、氣の苦勞に着崩れた、衣紋の亂れ其まゝに、肩すく襟の友染さへ月に幻の草を描きて、夜目には襦袢も白いやうに、死装束の可哀が添つて、寂しくも品よく見えるのに、膝の解いて手につかねた、背負揚の禱めくさへ、年紀より所帯染みて可憐しい。

「彼處に、あの、見えませんでしたものですから、切もものや剃刀何かですと、堪へても聲を立てませうし、様子でも見着かりませうけれど、水を飲みますのですから、見られたつて、何とも思ひはなさいますまいと存じましたし、それに、お姿は見えなく成つても、心の底に何處となしに、——確り地をお踏み遊ばす、立派な聲音の響きますうちに、一生懸命に、墓に絶つて死にましたら、寂しい冥途へ參りまして、屹と、まだ、霧ですか、霞ですか、雲のやうなものの上に、矢張り高い空で其の聲音が聞えて居て、どんなにか心強く、たよりに成るだらうと思ひまして、死急ぎをしましたものですから、貴方がた皆様に、御苦勞をお掛け申します、申譯のありません上に、お恥かしくつて成りません。」

「何が、何が、恥かしい事も何も無い。あの、女中ともぢや、目は火ほどには光るまいに、薄暗い中で、毒と見て止めたと言ふも、外ならぬ、神佛の御心ぢやとお思ひなさい。——處で、今の娘御ぢやが、妙齡の若い人、何ぼでも、遅う成つては、宅で案じやうは大抵では無いのぢやで、其處は女性の果敢さな、此なり附添つて居て、和女の身の上に立入つた相談は出來ぬなれど、成りかはつて、能う事情を聞いて、決して間違ひのないやうに、私の取次に従つて、どんな事でもお力に成らうから、と歸り際に染々と然う言ふのぢやが。——雜と聞いたばかりでも私は吃驚した。——よく顔を見れば、新道の菊川の姉さん、それ、人形を預けた坊主ぢや、と私が名告つたのに、和女よりは、あの娘が驚いて居たぢやらう。歸つたあとで聞いたればこそ、……然も無

うて、あの娘が、こゝに居て、右の其の翡翠が、和女の身に少からぬ害を及ぼした事を聞いたら、蒼く成つて倒れたも知れんのぢや。一廉の深川ッ子で、鼻ばしは強いけれど、いや、眞は大の弱蟲で、ハツと氣を打つと氣絶け兼ねぬ。さて、何を隠さう。——私が、いつか頼んだ人形、あれを拵へたのが、お京さん、今の、あの娘なのぢや。」

七十八

如海は眼球も口の皺も深く思入つた面色で、

「其の人形と、膚に秘めた翡翠に就いて悉い事は先づ、追つて談話もせうが、雑と言へば、蒼穹に白羽の矢を放し、大海へ青い石を投込んだも同然で、風の反響、輪を造る水の餘波は、聞きもし、見もしたいが望みながら、決して、あの玉が元へ戻らうとは思つて居らぬ、と言つて戻るのは願はぬでもない。言はば羽根、手鞠、歌留多か何ぞに走掛けた、お京さんの慰事に過ぎぬのぢや、と言つて、眞實、眞剣でない事もない。——和女に強い迷惑を掛けて、慰事では餘り氣の毒故に繕ふではなけれども、眞實な證には、あの、翡翠は、あれは一つ宛、お京さんの、母親即ちあれにごさる。」

と指せば、伏屋に倒れた嫁菜の花も、館が臨む蓮池も、草の中なる月の影。

「去年の佛が、あの娘に譲つた、記念の珠數の玉なのぢや——と言ふ次第で、不思議に此處で出會うたと言ふも、淺からぬ因縁。何方に向いても決して遠慮氣兼ねせずに話をして貰ひたい。あの娘の代理に聞く私もな、和女は坊主と思ふぢやらうが、いや、出家が木の端なら、鉋屑も同様な、實は賣卜者ぢや。が、和女が安心するために言ふ、此でもな、學問も生活も相當にしたもの、唯つた一人の、」

と思はず言つた聲が沈んで、さし俯向いた幾代の肩に掛けようとした手を控へた。

「む、娘を持つた覺えもある。——智慧も分別も些とはある、少々は金子もあるのぢや。はは、」

と碎けて、幾世に氣を解き、心を置かぬやうとの打明笑ひで、

「賣卜者に金子があつては、話が眞面目に成らぬが然うでない。……御前様々々、と爺婆は奉るが、隣の淨玄寺の住職は、私が別懇の友達ぢや、其の縁で、勝手に食客をして居るので、氣が向くと辻へ出る。晝間は山門を右へ出た表町の、古着、古道具屋の小部屋を借りて、有合せの赤毛布を敷込んで、雁來紅の鉢植やら、雌雄の雉の剝製などを飾り、青玉、赤玉、孔雀石、金砂玉、瑪瑙の類、緒々、根附の敷を繋いだ、店の賣物を一寸借り、赫耀と頸に掛けて、孔雀明王御示傳などと稱へて、笠竹を拵ぬるがな。——毎月缺かさず代々の精靈の墓參りに、あの娘を連れて大

きい御新造様が見える時分に、二三度立寄つて易を立てたわ、殊の外信仰して、それから懇に出入りをする。……佐賀町の大問屋、知つてぢやらうも知れん、稲村屋ぢや。引續き若い御新造、合せて世話焼随一と言ふ。……お京さんに取つては嫌くて意地の悪い叔母前までが、妙に又八卦を信ずる。如法の大資産家に、何の迷ひも無けれども、唯々縁者一類まで、とつおいつ、心遣ひは、あの娘の身ぢや。驚破鎌倉と云ふ時は、お京さんの縁談に極つたり。で、又其の時は、急病人で醫師へ驅着けるやうに私を迎ひに来る。……それ出向くわ。先づ以て、あの娘の居室へ顔を見せ、至極快晴仕り、祝着、とニヤリと遣るのを合圖に、小さな紙入から、澤山出て、此の懷中へ、づしりと入る。は、は、は、所説は、親類縁者が度々手を替へ、品を替へ、面を替へた、世話肝入につけても、餘り我儘のやうで、あの娘が義理にも退引ならず、斷り切れぬ縁談でも、私に扱て易を立てて、此の縁大凶までもない、はじめよし、中頃争ひ事、とでも言ひさへすれば、立處に扱が行く。……其處を頼む袖の下ぢや、と言ふ儲け口が月に七度八度はある。……講談本の義賊ではなけれども、使ふべきには使はうと現在若干、懷中に控へて居る。まだ其の上にお京さんが後楯ぢや。……いや、後楯どころか、迷惑を掛けた當人、私も、もろともに平にお詫をする、が、わびて済む事ではない。何事も打明けて貰ひたい。——お墓は和女の母様か。私は其の蔭へ隠れたつもりで聞く。恥かしがる事も何もない。」

と、しんみりと成つて言つた。

七十九

幾世は、やう／＼に顔を上げて、月あかりに視れば地藏さまの如き、情ある觀星堂の面を仰いで、

「何と言つて可いのですか、あの、お嬢様はじめ皆様のお情はお禮の申しやうもないんですが、そんなに御心配下すつては、眞個に申譯がございませぬの。」と只管身を恥ぢ、どんな不都合でも舉動つたかのやうに、死なうとしたのを詫び入りつつ、

「それに、櫛の實を、玉のやうに思ひまして、それを飲まうとしたことを、はじめにお話したものですから、貴方が、あのお人形さんをお預け遊ばしたために、間違ひが起つたやうにお思ひなすつて、飛んだ迷惑を掛けた、氣の毒だつて、唯今のやうに、私にお詫なんかおつしやいました、は、眞個に私、困つて了ふんでございますわ。そりや、若旦那から、貴方へお返し申すやうにと、お詫けなさいましたものを、皆な奪上げられて了ひましたのは、口惜いやら、悲しいやら、口では言へませんほどですけれど、其のために死なうとしたのではありません。……お恥かしいんですけれど、身でも投げようと存じましたのを、毒に取換へましたばかりですし、——それも

今に成つて考へますと——私が自分で身勝手に死にますのに、次手に心ばかりも若旦那への申譯にもして、死ぬのに得でも取りますやうで、……あの、唯死ねば可いんですのに、……先様は御存じなくつても、自分の心ばかりでも、そんな、そんな、色と形の似たのを飲んで、悲しい胸の、せめてもの慰めにしようなんて、何ですか、考へますと、若旦那に恩に被せがましようございまして、死ぬのに張合があつて、嬉しいと思つて、そんな得を取るやうな氣に成りましたのは、却つて申譯がないのでございすもの。」

と同じ事を繰返したり、條理がこんがらかる、纏れる、で、其の上、息だはしい胸先を押へして、思ふ半ばも口へ出すのは、しどろであつたが、心を察し、氣を逆つて聞く方で判断すれば、此の娘が死なうとしたのは、誰かに奪はれた翡翠の故に、と言ふのではない。外に止み難き事情があつて、身投もせう、と墓へ暇乞に來た所へ、思ひがけなく、峰、其の若旦那が通り合せ、面影を視て、名を呼んだのに、合す顔なき面伏さ。身を隠すうち、密を見て、あ、此で死んだら、其の言譯にも成らうし、死ぬのに張が出来て嬉しい、とて死ぬのを嬉しくしようとしたのは、死ぬのに得を取らうとした、さもない心だつたのが恥かしい、と言ふのであつた。

幾世の優しさ。
「あの、ねえ、貴方。」

と不意に仇氣ないまで、此の時、幾世が呼びかけて、露おく瞳で凝と視て、

「死ぬのに、次手ツて事はありませんねえ。」

「そりや、ない、そりや無い。」と觀世堂は只和げ宥める氣だから、のみ込み兼ねるのも領き、
「次手などがあつて堪るものではないとも。そりや、無い。何しろ死ぬと言ふ事は……」

「ですから、あの、翡翠の方は次手なんでございすから、お嬢様も貴方も御心配なすつては不可ません。」

「何、其の事か。……私たちに心遣ひをさせましたための氣あつかひかい。これ、何と言ふ優しい娘だ。和女が死なうとした苦勞のあるのに、私たちの斟酌までしては身も心も堪つたものではない。さあ、肝心な事を聞かう、何と第一、誰が其の玉をば奪つたぞ。」

玉あらしひ

八十

扱て聞けば、……高輪の若旦那、峰の先見は明かで、幾世の周圍が周圍ゆる、託けて置いて、人形の出處へ返すべき翡翠一顆丈では——屹と誰かに奪取られる。——逆も志は果されまいと

(添)に與へられた方の同じやうな翡翠は、六月の十三日の夜、翌日とも言ふ事か、其の夜の内に、
繼しき父なる群八のために取上げられたさうである。

その(添)の分とても、見事な簪の玉である。然もあれだけの若い人の、飄然と来て與へて飄然
として去つた美玉は、紅白粉した貝殻と瓜の皮の中に咲いた、優しく可憐しい花の幾世に取つて
は、妙見宮が夢枕に立つて、青く輝く星一つ授けられたやうに、一生の運の辻占の如くに嬉しく
も、尊くて、骨が枝ならば、白く削つて鏤めたいほどののを――

奪取る方は一向に早やお手輕千萬で、「先刻、店でこたあついで居た翡翠を見せろい。」――あ
の晩、水兵の見張をして、あとで又峰の見張をして、猫萬と一所に幾世を中へ引挾んで、擱立て
るやうにして歸つてから、時間まで店を働かせたあとで、障子へ入るのを待つて、群八が突如其
言だ。はツと思つて、一刀鳩尾を刺して抜取られるほどの氣はしたが、現在障子越に見て、聞い
て知つて居るのを、否が通る譯はないから、あゝ、若旦那の話は此處、と覺悟して、出すに出
惜みをするやうにしつゝ、それでも帯の間で手は震へながら、紙に包んでなかつた方の添の翡翠
を出す時、煙管を片手に群八が捻廻いて、悪磨きに磨いた金齒に當つて見て、「本筋だ、質が好
い。」と和笑として、煙草入の緒の明石玉の赤いのと較べて見て又和笑として、「今月は一度餘
計に出して遣る、善明院の墓参りに行きなえ。」と煙草盆ぐるみ引摺んで、胡坐で捲つた膝も蔽は

ず、尻の蚊をべたべたと敲きながら二階へ寝に行く。

間の隅に、其頃よぼ〜の上に半病人でぐつたりと寝て居た祖父さんが、死骸が睜くやうに窪
んだ目で此を視て、何にも言はず涙を流すと、幾世は黙つて、其の肩へ縋りついて、其の夜は帯
も解かずに寝た、と言ふ。

が、一體、當夜には限らない、常も祖父さんに絶るやうにして寝ると言ふは、群八が時々二階
から降りて来て一跨ぎ跨ぎ越しては、じろりと幾世の寝顔を見て行く、氣味の悪さの用心と、い
くら氣を張つて、張詰めて居ても、妙齡の眠い盛り、夜半の三時、早びけでも二時と言ふ家業
ゆゑ、つい居きたなく睡眠に落ちる。……時には老人の目ざといのを便る爲と、それから、式の
如く問狭なれば、隣家の猫萬が、新道中の女を、慰み散らす間々に――裏から入つて来ては
長火鉢の前に坐り込んで、幾世の起居を、眼鏡の上下から淫げた蛇のやうな眼色で見ることが、翡
翠を奪られた夜などは、幾世を連れて戻ると一所に入つて、何か、火鉢の前で群八と額を寄せて、
ぶつくと饒舌つて歸つたあとなので、平時でもの事ながら、何うも其の猫萬の居たあとと思ふ
と、濕々して、變に粘る……あとへ坐つてさへ、其處から衣ものが汚點附いて、足が漆かぶれに
でも成りさうなのに、あの顔中の疣がぶつりと蟲に成つて落ちて居て、背筋を這上りさうで堪へ
られぬ。……心では、掃きよめて雑巾掛もしたいのだけれども、先方は金持の旦那業。……で

なくツても人間同士が汚ながるのは、我儘らしくて濟まぬことと、そんな事はせぬけれど、だけれど、居たあとへ坐るのさへ、分けて床を取つて、寝ると成ると腥い氣に包まれて、蟻の腹に眠るやうで我慢も辛抱も出来ないの、ぐツと片寄つて、病人の祖父さんに縋るのが、其も習慣に成つて居た。

八十一

其でも其夜は、種々の事を思つて寝ずに明したほどだった。幾世は尙ほ一つ身に代へて最惜んだ挿櫛を遺失して居る。どれも類なき髪飾の飾を。——簪の花の萎ると言ふ、天人の五衰を一夜の思ひ、女心は察し遣らるゝ。が、頼まれた最う一つの玉は、人形の賣手がやがて見えよう。吃と返すまでは大事にして守護しよう。彼か此か、と祕置くものを選んだけれど、幾世の智慧で祕すほどの個處は、すぐに群八に捜し出されさうで心許ない。唯一人信じて預つて貰へる人は、洲崎の引手茶屋、鶴兼と云ふのが有るけれど、其だと返すべき人が来た時に、店を預る客商賣ではあるし、出入りを鶴の目鷹の目、障子越と煙草屋とで睨んで居るから、つい駈出して取りに行くにした處で、右から左の間に合はぬ。

左様、右様、苦勞をしたあとで、偶と考つたのは、幾世自身が人形に成つて翡翠を抱く。——

緋縮緬の細い緋紐に玉を潛めて、此を二の腕に守護袋のやうに、とすると、米を磨ぐにも拭掃除をするにも、襷掛けに成れば紅い鳥の刺青の羽搏きするまで包まれぬ。處で、背へ廻して、大事な大事な乳の下でキリ、と緊めて、素膚で祕した。が、愈々人形の衣の下にあつたと言ふのと同じに成る。……成ると、不思議に、嬉しい様な、可憐しいやうな、頼母しいやうな、ほんの上せるやうな、ぞつと身に沁むやうな時めく氣がして、我ながら思はず熟と胸をしめつける事さへ度々あるのに、尙ほ不思議なのは、人形の着て居たのが白地でないため、此の一夏は紺地でなければ、お納戸地なりとも、然うした色のを着たくつて着て居たほどで、又其の風俗が亡き母に自然から似て見えるから、大方遊女も影身に添つて、玉を守るのであらうと思ふにつけても、何だか、寝て居るうち、覺めた間にも、夢のやうに、其れなり千代紙の姉様に成つて了ひたいやうな氣がして、我心ながら思ひ計られないほど、いつも氣が緊つて、暑さに汗にもならないばかり、預つた玉を大事にしたのに……

——幾世は話す聲が震へて、泣く音を袖で忍びつ、——

八月に入つて、おなじ母の命日に、……此だけは祖父さんの手前もあり、さすがに群八が故障を言はない墓參りに、例によつて、朝のうちにしようとする、新道を鱸が泳ぎはせぬか、珍しい事群八が、「待ちな、後に俺が一所に行く、晩方にしねえ、油早で朝から暑いや。」と言ふ。其れ

とても、幾世は一所に出るのを、氣の進んだのでは無かつたが、母様の身に成れば、慫うした事でも嬉しからう、と遊女のために幾世も嬉しく、日暮前に墓參を濟すと、「久しぶりだ、其處等で一杯。」で、其も氣の進まぬのを、高橋邊の西洋料理へ入つて、群八は強かに飲み食ふ。此の頃は、緒メに、あの翡翠をつけてから、薄羽織でも、羽織を着ると、煙草入を前帯に、見てくれがしにチヨンとさして、小肥りの腹を突出して居るので。見るにつけても幾世は何も胸へは通らず、氷に水菓子かで咽喉をしめして、やがて西洋料理を出ると、ふら／＼の群八が、電車をよして納涼みながら、木場を抜けて歸らうと言つた。豫て隙さへあれば袖袂を引く漢と、人通りの少い邊りを二人では、と思つて、強ひて可厭と言へば、まさか手籠にしても連れて行きはしなかつたらうに、幾世は此の以前、おとした挿櫛の行方を、新道を出て平久町に住む賣卜者に卜て貰つた、易名を五龍と言ふ……

如海道人が、

「はあ、五つの龍。」

「御存じて在らしつて……」

「五龍、はあ、否、成程、しかし其から……」

八卦は聞いても解らぬし、覺えもせぬが、櫛は水に取られたので、此はもとへ戻らないやうでも戻る。海は底なく深うして涯なく廣けれど、月に従つて潮のさしひきに、陸に離れつ、又合ひつ。波は寄せつ返しつで、漾ふものはいづれ歸る。方角と距離を言へば、洲崎から向つて、木場の見當、失せものは水に落ちて、大方さし潮で川筋を彼の邊に流れたに相違ない、と云ふ五龍軒が其の時の卜筮。

心にも掛けたれど、直其處までも行つて見る餘裕も無くて本意なかつたに、恰も群八に誘はれたので、墓參の歸途の折も折、またどんな間拍子で、遊女の記念の櫛が手に戻らぬとも極りはせぬ。其とても、何處を尋ねて、誰に聞く術もなし、然も月おそき頃なれば、たよりの無さも言はむ方なけれど、袖に置く涙も露を結ぶと聞けば、秋草の花の影、目に映らぬとも限るまい。いづれ、其のまゝさし措くよりも心ゆかしに成る事と、つい可懐さに引かされて、木場まで連立つたのが過失で……往來の途絶えた處とさへあれば、威しつ、賺しつ、平時も言ふことを繰返して、「幾ちゃん！」とあれ忌嫌らしい。「不可ません、父さん。」「兄さんと吐せ、畜生め。」處々の納涼臺は、幾世を救ひの賽の神。

右左して、中木場を通つて、鶴歩橋を左に、惠比壽の宮を過ぐる頃は、宵も遁ぎて町靜に見渡す前後の水に、橋に、人足が弗と絶えた時、「幾世、兄さんと一言云へ、言はねえか、言はねえと、生命は取らねえが、水へ倒に突込んで、踵に蘆の穂を啖かせるぞ、何うだ。」「勘忍して。」「何うだ。」「あれ。」「何うだ。」「はい、兄さん。」「幾ちゃんや。」と酒の口を寄せられて、玉なす冷汗を流す處へ、向うから弓張提灯。嬉しや、助かつたと行合へば、何事ぞ、地獄へ化猫の根越萬兵衛。ナポレオン帽をのめらして、細い杖をついたのが、牛頭が擱んだ鐵棒ほどに、灯影に幾世の目に映つた、面の疣が皆動く。

うつかり油断をシテ遣られ、延びた鼻毛を抜かれた老夫が、幾世を連れて群八が善明院へ墓參と聞いて、近火ぐらるでは滅多に消費はぬ、蠟燭を驕つて、目を光らして出て來たさうなが、電車道を選ばないで、裏通りを探して來たのは、蓋し蛇の道は蛇で、群八が小鳥を狙ふ場處は、猫老夫も其の場合には狙ふ場處の、邪淫の本筋を辿るのが、北から南から出會つたのである、と、推量される處たし、幾世も當座は然う思つたけれど、後で知れば、程も時間も、群八と猫萬とで謀合はせてあつたさうで、「行かうが戻らうが俺の勝手ぢや、二人とも一所に歩べ。」でさて連立つ。幾世は牛頭馬頭の間に入つて、悄乎と續くと、小橋を渡つた處で、猫萬が杖を留め、提灯を翳して唯ある軒に、松、小ふし、無ふし、九三、六四、五六など印のあるを一面に立並べた挽板を

仰いだが、「此女を。」と何と幾世を指して、「甞うて置くのに、此と普請をするで、椽木を見るんぢやが、汝たちも一所に入れ。」と豫て心得た處か知らず、ぐい、と戸を開けて入るのに連れて、立迷ひつ、早や其の言に涙ぐんだ幾世も、避隠れやうもなく、群八に背を突かれて、よろめいて入る、と忽ち寒氣立つて、樹立彌が上に蔽ひ茂つた魔所の谷底へ落入つたかと悚然としたのは、犇々とある夥多しい材木の威力と、むせ返るばかりの木の薫に胸を打たれたのみでは無い、陰々たる水の香も添つて、唯見ると、天上高き、廣い木小屋の眞中に、橋かと思ふ、大組を横へて、鎖で掛けて、上から大鋸を釣したは、二尺角一尺角を、下の組に横ふるや、一呼吸にサクリと割る事、恰も豆腐を切るが如き、凄まじい水力器で、宛然大なる鰐の赫と口を開けたやうに見えたからであつた。

八十三

厳しき宮、尊き寺、殿、樓、柱梁にも成る材木の充ちたのに、悚然とするの寒氣立つの、忌嫌ひをするは勿體ない氣もしたけれど、生命を封する檻、肉を斷つ組も同じ妾宅を營む木口を選みに、と聞いたばかりで、鎖で繋いで宙に釣つた鋸が、黒髪に臨んで刃を鳴らすやうに見えて、肩から血を浴びた如く、幾世は其時、最う、手足が震へ、土間に散敷いた鋸屑も渚の砂を踏む思ひ、

足許も覺束なければ、見る目に處さへ定かならず、暗き谷底かと思へば、深き淵かとも疑はれ、小屋の圍の一重の外は、果知らぬ荒海かとも誤たれて、心細いまで凄かつた。「もう私、可恐うございますから勘忍して。」と立寄ると、猫萬がセ、ラ笑つて、「う、可恐しい事が早う氣が着いて、汝も生命を縮めいで濟みや、俺も舌を伸ばさいで濟みさうぢや——」と一つべろりと舌舐摺。「此間中のやうに強情ぢやと、あの大鋸の下へ先づ、帯を解いて、俎の上へ仰向かせてから、否か、應か、よう返答を聞かうと思つて、相談した事ぢやが、のつけから可恐しさが分つたら、何と群八、これは其にも及ぶまいかい。……幾や、何しろ一寸下に居をれ。」で、のそくと這個牛頭が蹲込むと、「坐れ。」と背後から馬頭が帶際をハタと突けば、氣も上ずつて一支へも無う、幾世がはツと崩折れる。「幾や、さあ、幾や、い、娘ぢや、あいと言ふのぢや。」と猫がちよつかいのやうに肩を敲いて、「地體、豫て汝が身體へ金子を貸す時から、契約濟の事ぢやで、斷るにも及ばんのぢやが、金貸冥利、約束手形の差押へでも一應は前以つて沙汰をする。汝が身は疾に、汝のものでは無い。證券紙を貼つて俺が預けて置くと同じぢやで。然う思へ。……此のさて美しさゆゑに、大事にして藏うて置いたが、千年の壽命を伸す、うまい木の實のぼたくと蜜の垂る、處へ、此の頃は蟲が着きさうで何うも危い……」と猫萬が苦笑して言つたのは。——翡翠の若旦那が二度、菊川の店へ来て、あの夜の事があつて以來、太く氣にして、猫萬が隣家から迫れば、

群八も内から迫る。此の後のの迫り方は、豫ての結束、老夫に身を任せろ、と言ふのと、内證で自分の言ふことを肯け、とて挑むのと兩方で、蛇の首と尾を兩手で握つて幾世の咽喉を縊りさうな迫り方をする。……

剩へ、嘗て菊川羊君で白く塗つて演劇の一座を率ゐた時から、劍は權なり、威なり、と號して、ガツと申せば、スツと抜いた、と平時話して、塗鞘の短刀を捻くるのが癖で、時々其右兩様の話を迫詰めても、幾世が島田を俯向いて横に振ると、また必と短刀を抜いてガラリと切尖を撓めながら、一度女優を此の術で退治した事がある、心に従はない女の、生命を奪らないで懲知らせるには、頬邊をツブリと貫くに限る、とびたりと幾世の頬に當てる……

當てると見ると、紺屋の手間取の祖父さんが、ごそくと這起きると、皺手に一挺の出刃庖丁——此は寝て居る寢床の下を片時も離さない——庖丁を握つて、柱よし、壁よし、届けば、小縁の金盥、這出しては手水鉢へ當てて、ごしくと刃音を立てて——人間の肝を食つて長生がした

いよ——とごぼくと咳をする、と群八が、あは、と笑ふ。祖父が、うふ、と鼻呼吸をするのが、例もお定まり。で、其の時々の市が榮える——店は忙しいし、新道の家何十軒は、一ツ家内も同じやうに、吸鼓拂く音も筒抜けに、兩隣向う三軒へ響くから、今までは幾世の身に、其の上の別條は無かつたのであるが……

足許も覺束なければ、見る目に處さへ定かならず、暗き谷底かと思へば、深き淵かとも疑はれ、小屋の圍の一重の外は、果知らぬ荒海かとも誤たれて、心細いまで凄かつた。「もう私、可恐うございますから勘忍して。」と立寄ると、猫萬がセ、ラ笑つて、「う、可恐しい事が早う氣が着いて、汝も生命を縮めいで濟みや、俺も舌を伸ばさいで濟みさうぢや——」と一つべろりと舌舐摺。「此間中のやうに強情ぢやと、あの大鋸の下へ先づ、帯を解いて、俎の上へ仰向かせてから、否か、應か、よう返答を聞かうと思つて、相談した事ぢやが、のつけから可恐しさが分つたら、何と群八、これは其にも及ぶまいかい。……幾や、何しろ一寸下に居をれ。」で、のそくと這個牛頭が蹲込むと、「坐れ。」と背後から馬頭が帶際をハタと突けば、氣も上ずつて一支へも無う、幾世がはツと崩折れる。「幾や、さあ、幾や、い、娘ぢや、あいと言ふのぢや。」と猫がちよつかいのやうに肩を敲いて、「地體、豫て汝が身體へ金子を貸す時から、契約濟の事ぢやで、斷るにも及ばんのぢやが、金貸冥利、約束手形の差押へでも一應は前以つて沙汰をする。汝が身は疾に、汝のものでは無い。證券紙を貼つて俺が預けて置くと同じぢやで。然う思へ。……此のさて美しさゆゑに、大事にして藏うて置いたが、千年の壽命を伸す、うまい木の實のぼたくと蜜の垂る、處へ、此の頃は蟲が着きさうで何うも危い……」と猫萬が苦笑して言つたのは。——翡翠の若旦那が二度、菊川の店へ来て、あの夜の事があつて以來、太く氣にして、猫萬が隣家から迫れば、

群八も内から迫る。此の後のの迫り方は、豫ての結束、老夫に身を任せろ、と言ふのと、内證で自分の言ふことを肯け、とて挑むのと兩方で、蛇の首と尾を兩手で握つて幾世の咽喉を縊りさうな迫り方をする。……

剩へ、嘗て菊川羊君で白く塗つて演劇の一座を率ゐた時から、劍は權なり、威なり、と號して、ガツと申せば、スツと抜いた、と平時話して、塗鞘の短刀を捻くるのが癖で、時々其右兩様の話を迫詰めても、幾世が島田を俯向いて横に振ると、また必と短刀を抜いてガラリと切尖を撓めながら、一度女優を此の術で退治した事がある、心に従はない女の、生命を奪らないで懲知らせるには、頬邊をツブリと貫くに限る、とびたりと幾世の頬に當てる……

當てると見ると、紺屋の手間取の祖父さんが、ごそくと這起きると、皺手に一挺の出刃庖丁——此は寝て居る寢床の下を片時も離さない——庖丁を握つて、柱よし、壁よし、届けば、小縁の金盥、這出しては手水鉢へ當てて、ごしくと刃音を立てて——人間の肝を食つて長生がした

いよ——とごぼくと咳をする、と群八が、あは、と笑ふ。祖父が、うふ、と鼻呼吸をするのが、例もお定まり。で、其の時々の市が榮える——店は忙しいし、新道の家何十軒は、一ツ家内も同じやうに、吸鼓拂く音も筒抜けに、兩隣向う三軒へ響くから、今までは幾世の身に、其の上の別條は無かつたのであるが……

祖父さんは老衰して、先月の末に歿したのである。然うすると幾世は、寝るに絶る力はなし、覺めて柩に取る陰もなし。淺間な小家も一時に曠野の狀に荒果てると、猛獸、毒蛇は日中から荒れ哮る。短刀は日に何度となく頬に觸れ、疣は蛭のやうに手足に附着く、此頃。居ても起つても新道あたりに身の置どころがなく成つて、今は慙うと覺悟して——死ぬのは此がためであると言ふ——今日は日暮前に、群八が錢湯に行つた留守の、……其留守には、猫萬が目を離さないのが例だつたけれど、新道の出口に大喧嘩があつて、二三人血みどれに成つたとか、火事のやうな騒ぎの些少な隙に、菊川を抜けて遊女に暇乞に來たのだとの事、——儂さは墓に苔蒸したも其のままで、こゝに土新なるべき祖父さんの亡骸も、荒寺で無住も同様ゆる、外寺から導師を頼んだりなんぞ入費を惜んで、骨にしたまゝ、押入へ突込んで、隣近所の手前は、佛の遺言で故郷の静岡へ送るのだと言ふが、幾世こそ兩親は見ず知らずでも静岡が故郷だけれど、遊女親娘は然うぢやない。佛事供養も思ふに任せず、初七日に心ばかり五目鮎を内で拵へて、佛様へ供へようとしたのに、小皿によそつて、一寸店へ立違つた間に、裏から猫が入つて來て、お初穂を嘗めたが口惜しい、と言つて、

「情なうございしましたよ。」と、幾世は話しつゝ、ほろりとする。

如海は大きな息を吻と吐き、

「口も利けぬ。いや、應答のしやうもないが、何は措け、聞きかけて心配で堪らぬのは、木小屋の中ぢや、何うしたよ。先づ以て、よう無事で居たなあ。右に左、生命に別條が無かつたればこそ、此處で話も聞けるのぢやが、何うした、其の時は何うしたな。」

「えゝ。」

と幾世も息を繼いで——

言ふのを聞けば——然う云つて猫萬が、蟲の着かぬうちに味はねばならぬ。屹と今夜のうちに應と云へ。で、返事を、返事を、と迫詰めても、黙つて、俯向いて、震へて、果ては袖を嚙んで泣く。其の袖を群八が捻離して、「口の開かせやうがある。鋸で横に裂くのだ。組の上へ仰反れ。」と引つ立てると、猫萬が、ニタ／＼と笑つて留めて、「先づ待て、鋸引の刑の前に、一段苛責と云ふものがあるで、此の杖でお見舞申さう。痛くないやうに骨へ響かしてくれうさかい、其の材木へ縛れや。」あゝ、れあゝ、れ。「聲を立てぬやうに、さあ、此ぢや。」と猫萬が、そろりと懷中から手拭を出して、鋸屑を包めて、猿轡を持つて寄ると、引立て狀に材木に幾世を摺寄せて、早や其の背負揚げに無手と手を掛けた居た群八が、「旦那、此の女あ、恥かしがりだからね、裸に剥い

ときや、手足に釘を打つても聲は立てねえ、人が来ると極りが悪いからよ。」とお、然うか、殊勝なや。其處が俺の目の着處ぢや。」と手傳つて、縋子の腹合せをするくと解かれた時には、幾世は最う、身を悶えても、魂は消えても、聲と言つては出ななんだが、「や、此の女？」と群八が眞赤に成ると、「わあ、何時の間に……」と猫萬の疣の周圍が青く成つて——「私、恥かしくつて言へませんわ、(はらはら、はらはらおびを。)ツて、と言ひかけて、袖を面にハツと蔽ひ、幾世は片手白々と、折れもやする、と胸を押へて、

「乳の下を結へました、くけ紐を見付けたのでございますよ。まあ、お恥かしう存じます。翡翠は其の時に奪られました。」

と涙の傳ふ月の顔、うら恥かしさを微笑み消さうと、口を曲めた、白齒もれしか切なさうに、笑靨に紛ふ面裏れ、ふるへる胸に衝と一條、紅の色幻に透いて、薄い袷の縞よりも、其の幻の月影が、揺々と草の風に戦ぐ。

八十五

「それを、取られまいとしたものですから、一人が私の両手を壓へて、一人が、私の襟を開けて、紅い紐を解いて……」と切れ々に幾世が言つた。

言に雪の映るばかり、人の手が、唯胸とは言へ、膚に、清らかに美しい此の娘に、迫り觸れた惨虐を目の前……月の光さへ痛々しい。

「あ、待て。」と如海は墓ぐるみ黒髪かけて、道服の兩袖以て、引包むが如く、幾世の背に蔽ひ翳し、月の影を遮つて、

「何と何うも……聞くばかりでも、私が此處で、手に掛けて、和女の帯を奪ひ、手を扼つて襟も胸も開けるやうで聞いて居るに堪へんものを、何と彼等は、牛頭馬頭よ、なあ、青鬼、赤鬼ぢや。」

と、其の影やある、卒塔婆、風白く、墳墓、露青き四邊を視つ、

「あ、心ない事をした。露も、風も、木小屋の中の和女の身に、いま沁入るやうでいたはしい。

これは、此の話は、墓原なんぞ、戸の外で聞くべきものでは無かつた。成らう事なら、帳深く、褥厚く、屏風で圍うて聞かうものを。」

と、溜息しながら、慌てたやうに、墓を見向いて、

「母御にも相濟まぬ。……何と、其に、赤鬼青鬼で心着けば、廢寺に成つた此の善明院の、それ、其の戸袋に蔦が繁つて、壁の剝落ちた脇堂には、三途河の婆々の像を安置したで、巢がらみに曇つたれば、宛然の土蜘蛛ぢやらうが、淨玻璃もあり。倒れたか、轉んだか、近頃は訪ねぬが、それ、牛頭も居る馬頭も居るわ。……帯を解くの、背負揚のと、彼の奪衣婆どのござるにつけても、

眼前地獄ぢや。何とも早や、」

と額を壓へて、道人は謝するが如く、

「心ない事ぢやつた。……坊へ連れようと思うたれど、誰聞かいても、坊主大勢。氣を置いて、よう話すまいで、一應聞いた上で、と思うたが、強い心得違ひぢやつた。」

と詫びるやら、悔むやら、慰める、いたはるで、氣も心も墓の前にもたれ込んで、傍目も觸らずで、氣が着かなかつた。

颯と風を切る音がすると、門前へ人の氣勢。提灯が二ツ揃つて、ト月夜に後戻りをするやうに見えて、俵が二臺と思へば、もう其處へスツと留つた。

牛頭、馬頭よ。

如海は幾世を胸に抱いて、天驅りもせむす勢で、窪んだ目を光らした。が、女の聲で、……

「前原さん、先生。」

と、早や間近で、……

「やあ、お常どん。」

續いて、ひよこりと松小僧。

「御上使——」

「馬鹿だね、お黙り。」

と、お常が嗜めて、

「お京様が御心配なすつてねえ。——急いで御様子を伺ひに。」

「はて、もう、そんなに時刻が経つかな。」

「何故でございます。」

「一寸の間、姉さんと此處で談話をして居たと思つたに、お前さんは更めて又お宅からぢや。」

「まあ、先生、佐賀町からぢやありませんか、俵で急げ、とおつしやるから、飛ばして來たので

ございますもの、ほんの一息でございますよ。」

「成程。」

「貴女、お落着きなさいましたか。」

「はい。」

「すぐにお寺へと思ひましたけれど、俵の上から此處に在らつしやるのが見えましてから。」

「はて、彼から見えたかな。」

「月夜ですもの、見えますわ。」

如海はつるりと頭を撫でて、

「成程な。」

「お寺の森で、梟が鳴いて居ら。」
と投げたやうに、其の癖心細い聲をして、小僧の松が呟く時、お常と道人は、菊川の墓に會釋をして居る。

後に退つて、嬉しさうに涙ぐんで控へた幾世が、腫ぼつたい目で見返つて、
「御苦勞様、濟みませんわねえ。」

「へい、何ういたしまして。へい、矢張り何ですか、其處の垣根を飛越してお寺へ行くんですか。」

「え、あの……と、口籠つて寂しく微笑む。」

「さあ、参りませう。」と墓の前をお常が起つと、

「南無……南無……あ、俗名お衣どのと承はつた……いづれ更めて。」と道人も腰を伸して、

「これは姉さん、お待遠で。」

「まあ、何うしませう、勿體なうございますわ。母もあの、どんなにか喜んで居りませう。」

「いや、まだ……此から——お喜びなさるやうにして上げたいと思ふのぢやで。」

「眞個でございますねえ。まあ、姉さん。」
「い、え、何うぞ。」

「御案内は私がせう。」

と如海が前に、——振向いて一寸別れに手を合す幾世が続いて、門へ卵塔を連立てば、結綿ばかりに月の艶、髪うつくしく頸寂しく、いま葬つて歸るやうな、しめやかな露の人々を、送るか、呼ぶか、蟲の聲、蟲の聲々。振立てて鳴く鉦た、きのチーチーンと幽な音は、菊川の草の蔭らしい。礫をカタリと落したやうな音がすると、つい墓に添つた、壁も板も分ちなきまで、古び朽ちた其處の雨戸が、カタ／＼と續いて響いて、縦に、樹の枝の映るやうな裂目が立つと、其の間から差覗いて——車夫の附いた四人が古寺の門を左へ出て行く、薄の中の影繪の如き提灯の灯を見送り見送り、風が来て、幾世の袖の草すれに此方へ音訪る、やうなのを、恚う見澄まし、聞き澄ますうちに、ふつと見えなく成ると、睨を返して、佛に立つ薄紫の嫁菜をたよりに、由縁の草を熟と視た、蔦の露に冷いまで、醒めた瞳の涼しいは——奪衣婆と牛頭馬頭が、蜘蛛の巢の中にあると言ふ——寺の其處は脇御堂に——何事ぞ、渠は三浦柳吉である。

些と風邪氣かと思ふ、が婀娜な聲で、裡から、
「柳さん。」

「……………」
「三浦先生。」

「氣取つてるよ、一寸、柳さん。」
「何。」

「娑婆は、どんななの。」

「月夜だよ。」

「明いかい。」

「あ、明いのさ。」

「大きにお世話だね。」

「何がお世話だい。」

「御苦勞様にお照しだ、決してそれには及びませんのに。」

「詰らない事を言つてるぜ。」

「蟲の聲しきりなり。」

一寸途絶えて、

「い、月かい。」

「あ、い、月だよ。」

「お前さん、どんな氣がするえ。」

「別にどんな氣もしやあしないよ。」

「何とか思ふでせう。言ふに言はれなからうね。」

「言ふに言へるよ。」

「おや、何と言ふのさ。」

荒 寺

八十七

「言ふよ、別に何とも思はないとさ。」

「ぢやあ、そんな處を開けないで閉めておくれな。お、寒い、寒いから。」

「何、そんなに寒くはない。」

「だつて、無常の風が吹込むんだもの。」

「馬鹿な、地獄の明店に入つて、三途河の婆さんと相借屋をして居るものが、贅澤な、無常の風も無いものだ。」

「だからさ、地獄だから、娑婆から吹くのは無常の風ぢやないの。」

「いや、餘り娑婆な事もない。外は卵塔場だ——あ、お互に、此處は冥途の追分だよ。」

と、菊川の墓に對して、板戸に悄然と凭り、ほろりとする。
「一寸、誰とお互なの。……死んだ遊女？……幾世さん？——口惜いね、閉めて下さい。……速かに閉めないで啖着きますよ。」

「む、閉めよう、私も寒く成つた。」と柳吉も鼻聲で掠めて言つて、ガタ／＼と鎖す。
と言ふが搔分けた蔦を夜風に戻したのである。
朗かに蟲の聲。

また、うっかり開けられて成らうか、氣味の悪い、十王廳の婆と鬼とが、暗中に住ふと言ふもの。然りながら、堰止めあへぬ月の明は、薄く溢る、水の如く、蟲の音を空へ漾はせ、草の葉を衝と越えて、鎖す板戸へ附入りに流れ込んで、ちら／＼と荒寺の裡に影を投げて、破間、隙目を洩る光は大なる白露の散亂れたやうである。此の薄明りに透し見れば、泥水の引いた干潟の狀なる腐れ床に、ぶく／＼と泡を吐く藻に似て搔寄せた古壘の上に、筵に縞を染めた煎餅蒲團を、腹と

背中、洗髮の青いやうなのを頭だけ出して、肩からすつぽりと包まつて、腹這に成つたと覺しく、顔のみ獄門の幻影の狀に擡げて、口を利いて居るのはお舟であつた。

あはれ、觀音、勢至おはします、尊き御堂なりせば、荒れたればとて、頼れたればとて、よしや又地藏の倒れた野原でも、映入る月は蓮の絲を織掛けて、たゝすまふ影は白蓮の花咲くべきに、牛頭馬頭の中に寝たる夜鷹よ。隙間漏る影は木葉ながら夜具に降つて、風に亂る、鼠の如く、床を這ふ光は蛇と成つて、壘に敲り、枕に廻轉る……

「あ、皆に成つた。」
枕頭へ、どかと坐す時、引傾けて持った貧乏徳利を、恠う投げるやうに言つて柳吉が、ドンと突遣る。と、昔話に傳へ聞く、野槌とか言ふ化物めいて、ごろ／＼と轉がるのに、がさ／＼と鳴つたは、蛸の脚と精進揚を食餘した竹の皮を這つたのである。

「一服遣らう、前刻から煙草も喫めず、息も吐けなかつた。あ、切ない。」
で、用心の可い事は、袂に心得て居て、パツと燐寸。が、小さな狐火とよりは血の滴つた色に見える。

「それが切ないんぢやないでせう。ふん、心柄だわ。何の、幾世さんの、……愁歎話なんぞ、此方で聞かうとさへ思はなけりや、勝手に鼻唄でも喇叭節でも唄ふが可いぢやありませんか。」

一寸面白かつたらうね、(はい、はい)なんて濕つぽい鼻聲でさ、ひそくめそく遣つてる處を、此處から唐突に、(誰だ)とか何とか言つたら、驅出したか知ら、倒れたか知ら。あの弱蟲だから菊川のは消えただらうね、消えちや詰らない。それよりか、半間な賣卜者の慌てる處が見たかつた。

「馬鹿な事を。先方は可哀相に生命がけたよ。」

「おや、一寸、生命がけが好きなのなら何時でも死にませうか。氣障アな、柳さん、お前さん、途惑ひをした夜這のやうに、板戸に嚙りついて、少々氣取つて、震へながら聞いてた處は、口三味線で嘸して遣りたいやうだつけ。……あれさ、帯の先が引摺つてるよ。」

煙草の火に、瞳が大きい。

八十八

「一服おくん、おもしろいさうに喫むわねえ、私にも。」

と云ふと、顔が、首を落したやうに、ころり、と枕に横に成つた。

「あら、吸付けてさ。」

「何だなあ、詰らない。」

「をかしな見得をするよ。昔馴染が墓から覗いて居ると思つてさ、可厭な人。」と凄いやうに莞爾。

つい、見惚れた様子で、

「然らば御意のま。」

「あ、おいしい。」

と火皿の下を男に持たせて、長羅字でフーと遣る。

「もう、一服。」

「御意のま。」と、茶碗に拂いた吸殻を、追掛けに吸着けながら、

「ねえ、おい。」

「何よ？」

「縁と言ふものは不思議だなあ。」

「然うかなあ。」

「何だ、真面目にさ。」

「真面目に聞いて居られますか、そんな御託宣を。……思ひも掛けない此様な處に遊女の墓があつたり、お前さんの氣にして居る賣卜者が飛び出したり、……別しては御執心の幾世さんが死なうとしたり……」

「否、お前との中の事だよ。」

「憚り様。」と、もう一服。ふツと吹かす。

「尙だかい。」

「最う澤山よ……御述懐は……」

「詰らない。」と横を向く。

「否え、煙草もさ、そして、もう粉だね、と蒲團の中で迂るやうな身動きして、

「酒は無し、……どれ、些と町へ出て稼いで来ませう。序に巢をかへようや、こんな處にや居られやしない。」

「お互に、自棄で暮すにや、此の寺ぐらゐる氣に入つた處は無いちやあないか。」

「私は氣に入りません。そりや不斷は然う思つたけれど、お隣の墓を知らない中だ。命日だわ、

御機嫌うかひだわつて、幾世さんに一寸々々、來られて堪るもんですか。……今夜の中にも、

假に又木賃へでも、材木納屋の隅へでも、引越ませせうよ。」

「私は此處は退かないよ。」

「御勝手に……一寸、其處に……彼處に掛けて置いた私の衣ものを取つておくんないな。」

「御勝手に。」

「よう、後生だから。」

「あやまつた、堪忍してくれ。」

「ふ、幾世さんが見てるだらう。だから可厭さ。……ぢやあ頼まない。」と、衝と背筋を白く起きてすつと蒲團を抜ける、と月を膚の雪女郎。腰の色も水のやうに古壘を探つて、影が一幅細い川に成る、一段低い床板に爪立つた、が、寄れば可いもの、及腰に、帯ぐるみ衣物の裾を取つて引く、と此の衣物は、鼠の巢とも、煤とも、吹込んだ去年よりの落葉とも、さながら塵塚の如き戒壇の上に、三體残つた、奪衣婆と、牛頭馬頭の鬼の軀の上へ掛けて、頭から引蔽せてあつたので、いま引いて取る手の機に、がたん、と物音が、夜陰の寂寞を破つた爲、凄しく響いた、不意を打たれて、思はず白身の腰を支く、トタンに、衣物に引包まれて壇を這つた其の馬頭の鬼が、何時何處へ飛ばしたやら鐵棒も持たない大手を廣げて、ドンとお舟の乳のあたりを突いて落掛つたので、ハツと氣を打たれたらしく仰ぎ倒るゝ。

「何うした。」

と、背後抱きに、眞白な肩を抱起しながら、唯見ると、氣の所爲か壇の奥の淨玻璃かと思ふ、ものの面に、髻髻と同じ婦の影が映る。時しも、本堂位牌堂を掛けて襖なき庫裡、廻廊、廢寺の中、月の影は、幾人何人ともなき眞白な女に成つた。其の、其の一人毎に、一人々々に、皆斯の如

く、馬頭の鬼が胸に乗つて、且つ、鐵棒を脇狭んだ牛頭が上から覗いて、そして奪衣婆が乗出して、膝に手を置き、目を光らして覗込んで居るのである。

八十九

柳吉は颯と色をかへた。

が、此の時お舟は、柳吉の手に背を凭たせながら、右に左に激しく瞳を働かしたのは、前に、後に、柳吉が見たと同じ数々の幻影を認めたのであらう、ぶる／＼と身を震はすと四邊の白い影も、齊しく皆ぶる／＼と震へた。お舟は瞳を一つに寄せると、白い鳥の羽搏く如く、月光に揺られつゝ、衝と腕を延べつゝ、舌をも吐きかねまじく胸に迫つた、もく／＼と、ずばら長い馬面の鬼の鼻頭を、ぐい、と向うへ押し遣りながら、壇に乗出した奪衣婆の嘲笑へる状なる青膨れた顔を熟と視て、

「お巫山戯でないよ、お婆さん。」

然ればぞ、いつも寝るに衣を解いて、其の頭から引包むのは、此の姑を憚るのではなく、「お役目。」と言つて、脱いだのを、ふはりと掛けては、片頬笑して冷かして居たのであつた。

其の時、柳吉は思はず、抱いた肩を柔かに捻ぢ状に親嘴した。此の心強い氣に接しないでは戦

慄が止らなかつたからである。

忘れたやうに、ふらりと垂るゝお舟の腕とともに、突支へて居た馬頭は仰向けに倒れる。床は

ガタリと鳴つた。

心強い婦は、其の鬼を、白身にして抱いて、もとの戒壇に直しながら、

「お錢を持つといで。」と、トンと肩を敲いた。

閑却されたのは牛頭で、何のために鐵棒を脇挟んで脚を踏張つて居るのか少しも分らぬ。

お舟は立ちながら衣を掛けた。裳を曳くと嬾々と成つて振向いて、

「柳さん。」

「……………」

「帯を締めておくんないな。」と襟を引締めながら言つた。

「不器用だ。」と、ぶツきらぼうに、肩を聳かし、膝に拳を確と置いて、身構へて目を配つて見た

のは、お舟ばかり其處にすつと立つて、幻影は消えて、たゞ月洩る破寺の本堂——脇堂に成つた

のを確めたのである。

キウ／＼と繻子が鳴つて、

「ぢやあ、背負揚だけ結んで。」

「可し。」と何故か勢よく、くるりと向直る、お舟の帯の上に手を掛けた。

「何のための註文なんだい。」

「更めて縁を結ぶのさ。いつかは恚うして、矢張り私が人形に成つて、……其の時翡翠を返したのが、縁だつたわね。」

「其の通り。」と又勢競つて、

「面白い！ さあ、結んだぜ。其のかはり……」

「親嘴？」

「勿論。」

「あ。」

と相寄ると、

「痛快。」と言つて、柳吉は戒壇の婆と鬼とを、お舟の頬の上から睨んで、呵々と笑つた。

「大間男爵、茄子丸の奴等、審査員ども！ 何うだ、手前たちに、此の意氣が分るか。」と云つて又笑つた。

當年、柳吉が秋の展覧會に出した繪は、等身の夜鷹が幽靈橋にイんだ姿で、潰島田。其の装は言ふまでもなくお舟で、そして眞白な小猫を抱いた、猫は鶴兼の婆さんの懷中から顔を出したの

から思ひついたので、其の猫の目が青かつた。此は翡翠の色であつた。

お分に成つたか知ら？……柳吉の繪の心を——勳章を帯びた大間男爵と、烏帽子を被つた茄子丸等が展覧會の審査員である。落選したのは言ふまでも無からう。

水鳥

九十

「まるで地獄なんだ、其状は。」

と、猪口を傾けながら話す柳吉と、對向ひに對手に成つて飲むものは、小父さんの棟梁吉兵衛で。……場所は高橋際の鱈汁。夜も早や十時を過ぎた頃、此の屋の迷惑も思はるゝ、ゆつくりと飲む氣と見えて、入込みを離れた二階の奥の片隅に陣取つた。……當夜元町の榮花亭、席の此の名は、恚うした面々には些と皮肉に聞える講釋場で不意に出會つて名告り掛けた、去ぬる夜の船

戦に、もの別れと成りし一別以來、天晴れ敵哉、シヤ打物業は面倒なり、寄れや組まむと下足札で火鉢を敲いて、埋火に雙方吸殻の狼煙を擧げつゝ、後座の修羅場を聞いたのち、蚯蚓鳴く露地を出て、扱てこゝに秋の夜語。天井低く鱈肥えて、杯の火花を散す、戦正に酣にて、

「……正體の分つたは後の事だね、いきなり幾世と言ふ其の美しいのを、面に疣々のある青鬼と、頬骨の張つた分厚な面の赤鬼とが、二人で材木へ肩胸を擱んで推し附けた處は、張板へ紅絹の切を伸すやうに見えて、小屋の材木は、何の事はない土壇に植ゑた拷問柱さ……孕んだわ、轉んだわ、と聞くに堪へない事を吐き合つて、何と女の胸の下から、紅い紐を手繰出して、冗談ぢや無い、奴等が角を突合せて、提灯の灯で、胞衣でも絞るやうに、其の括紐を抜いて檢べるのが、血みどろの腸を撈るんだね。で、抜いて抜くと、赤鬼の掌へ這つて出たのが、……前刻からも話す通り、私が持つてるのと同じ翡翠だつたつけ。——材木を積んだ小屋の奥の暗い處から、密と此を覗いて居ると、何の事はない、白い胸を裂割つて、魂を抉り抜いたとよりは思はれない。……御存じの夜鷹も、さすがに私の手に擱まつて、ひつたり身を寄せて見たんだよ。」

「旦那」と、吉兵衛は、眉と共に目を寄せつ、擧めた顔で、

「世間も一皮裏へ廻つて、末生の落へ來ると、怪しげな繪でも無くつては、有りさうもねえこととがザラだからね、遺兼ねめえてね、そんな徒は。——だが、何かね、其の今のお話は、そりや、此の夏、小雨の降る晩、旦那が私の船へ乗つて大川を漕ぐ處へ、右の潰島田の黒い衣ものが、上の橋から、あやかしのやうに舷へ附着いたつけ、……あの晩の事なかね。」

「否、後だよ。あとの事さ。第一ありや何だ、(あの晩)ぢやない、曉方だつた。驚いた。」と引入れられたやうに言ふ。

「然れば」と吉兵衛も頷いて、半ば苦笑ひで、

「何とか言つたね、お前さんが傘から目を出して、(やあ、眞黒な虹が見える、永代橋だらうが月夜に成つたか)と言ひなさんだ。(月なものかね、最う夜がしらんだんだ)つて私あ、……其に違えねえんだが、自分でも驚きましたぜ。すると怪しい姉さんが、(危い、危い、尻尾が出さうたから陸へ上げておくんさい、甲羅經て空は飛んでも、水は泳げない鳥だから)と然う言ふんで、佐賀町の端から十間川へ漕入れて河岸へ着けると、(あばよ)なんて澄まして上るから、船は軽く成つたと思ふと、旦那、お前さんも其の後へ附着いて上つたんだ。ポカンとしたね、私あ船で、——何だ、雌雄の聲を出す傘の化物め、と投げては見たが、姉御が、媚めいたおいらん端折で、またしとくと降る中を、お前さんが蛇目傘で庇つて、後向きで行くのを見ちやあ、畜生め、私も十年少けりやあ、船を背負つて、朝比奈で、此から一番、洲崎の門を破らうとね、煙管の雁首で舷を叩きましたぜ。」

と此處で、敲いて、

「はッはッはッ。」

「……正體の分つたは後の事だね、いきなり幾世と言ふ其の美しいのを、面に疣々のある青鬼と、頬骨の張つた分厚な面の赤鬼とが、二人で材木へ肩胸を擱んで推し附けた處は、張板へ紅絹の切を伸すやうに見えて、小屋の材木は、何の事はない土壇に植ゑた拷問柱さ……孕んだわ、轉んだわ、と聞くに堪へない事を吐き合つて、何と女の胸の下から、紅い紐を手繰出して、冗談ぢや無い、奴等が角を突合せて、提灯の灯で、胞衣でも絞るやうに、其の括紐を抜いて檢べるのが、血みどろの腸を撈るんだね。で、抜いて抜くと、赤鬼の掌へ這つて出たのが、……前刻からも話す通り、私が持つてるのと同じ翡翠だつたつけ。——材木を積んだ小屋の奥の暗い處から、密と此を覗いて居ると、何の事はない、白い胸を裂割つて、魂を抉り抜いたとよりは思はれない。……御存じの夜鷹も、さすがに私の手に擱まつて、ひつたり身を寄せて見たんだよ。」

「旦那」と、吉兵衛は、眉と共に目を寄せつ、擧めた顔で、

「世間も一皮裏へ廻つて、末生の落へ來ると、怪しげな繪でも無くつては、有りさうもねえこととがザラだからね、遺兼ねめえてね、そんな徒は。——だが、何かね、其の今のお話は、そりや、此の夏、小雨の降る晩、旦那が私の船へ乗つて大川を漕ぐ處へ、右の潰島田の黒い衣ものが、上の橋から、あやかしのやうに舷へ附着いたつけ、……あの晩の事なかね。」

「否、後だよ。あとの事さ。第一ありや何だ、(あの晩)ぢやない、曉方だつた。驚いた。」と引入れられたやうに言ふ。

「然れば」と吉兵衛も頷いて、半ば苦笑ひで、

「何とか言つたね、お前さんが傘から目を出して、(やあ、眞黒な虹が見える、永代橋だらうが月夜に成つたか)と言ひなさんだ。(月なものかね、最う夜がしらんだんだ)つて私あ、……其に違えねえんだが、自分でも驚きましたぜ。すると怪しい姉さんが、(危い、危い、尻尾が出さうたから陸へ上げておくんさい、甲羅經て空は飛んでも、水は泳げない鳥だから)と然う言ふんで、佐賀町の端から十間川へ漕入れて河岸へ着けると、(あばよ)なんて澄まして上るから、船は軽く成つたと思ふと、旦那、お前さんも其の後へ附着いて上つたんだ。ポカンとしたね、私あ船で、——何だ、雌雄の聲を出す傘の化物め、と投げては見たが、姉御が、媚めいたおいらん端折で、またしとくと降る中を、お前さんが蛇目傘で庇つて、後向きで行くのを見ちやあ、畜生め、私も十年少けりやあ、船を背負つて、朝比奈で、此から一番、洲崎の門を破らうとね、煙管の雁首で舷を叩きましたぜ。」

と此處で、敲いて、

「はッはッはッ。」

「濟まない。」

と柳吉は、軽く辭儀をして、衝と杯を差しながら、

「言譯をするんぢやないが、まさか、一所に船を上らうとは私だつて考へなかつた。——尤も船は洲崎なんぞ……八幡様の裏までも遣つて貰へようとは思はず、永代近くなれば、あとは俵のつもりだつたんだがね。それ、種々経緯のある、其の翡翠さ、不思議な事で私の手にある。……目に見えない、と半眼で、手で恠う一寸空を搔いて、

「何か、美しいものの心に従つて、其の玉は人に返さねば成らないのに、あの時酔狂で船の中へ轉がしたのを、那女に拾はれて帯に藏はれて居たものだから、其を取返さうと思つて、船からついて出たんだがね。——返しません——(最う一度来て逢はないぢや可厭だ。)と言ふんだ。月夜鴉ならまだしも、二番鶏ぢや、夜鷹と取組合の喧嘩も出来ず、仕方が無い、最う一度出向くとして、(何處で何うして逢ふんだい。)と訊くと、此奴が變つて面白……」

「明夜の前講と言ふ處だね。早速ながら、はてね、其處で、」

「那女が言ふにや、何時でも構はない、木場から恵比壽の宮、彼處等へ来て、彼は起重器と言ふ

のか知ら、鎖で材木を引上げる、大な鐵の、自在鍵のやうなものが、水岸に處々突立つてるのを、石なり棒なりでカーンと敲け、と可いかね、音を合圖に、顔を見せる、と言つて、思切つた事には眞晝間でもお構ひなし、と言ふタンカなんだがね。……如何に天下のふてくされだつて、白晝

夜鷹にや逢へないから、四五日経つて出掛けるのに、家の近所の三島様の縁日で、古金屋の露店で鐵鎚を一挺心得て置いた奴を、矢立て何ぞのやうに腰へさして居たなんぞ、我ながら魔が魅したものでぢやあないか。且以て素面では勇氣が無いから、深川へ入るとお不動様の前あたりで強烈に煽りつけて、眞直ぐに突抜ければ、直き其の鐵の鉤の、空から振下つてる場所は知つてたけれど、其の晩の二番目は序幕から見氣、仙臺が合方に逢ふ仲の町の場は引返しつきの三立目あたりと言ふ面白づくで、故と深川座の前から黒江町へ掛つて、大廻りに木場の中を、酒の目の炬火で、獸の如く、照しく、縦横十文字にふらついた。よく土地の若衆たちに、襟首を掴んで水中へ投込まれなかつたものさね。

さあ、待つてたやうに鉤が見える。引上げた時の工合か何かで、水の上へ出て釣下つてるから、柱に掴まつて、乗出して、ゴーンと敲くと、寂しい處だ、四邊へ響いて、カーンと鳴つた。」

「水の中から糺出しさうだね、おいらんが。」

「否、可笑しな事は、何故か空から、黒い襦袢でふはくと降つて來さうな氣がして、遠見の松

の梢越に洲崎の電燈を仰向けに睨んだ。が、然う言ふ氣のするのが、最う覺束なさに心着いたので、嘘を吐け！ 鐵鎚で鉤を敲いて、夜鷹の忽然として顯れさうな道理が無い。……第一此の工合だ、と嘘にもカーンを遣る時、(ち、ん、ふい、ふい御世の夜鷹等)とか、何とか、呪文を唱へるのを教へて置く筈、高價な翡翠を取放しで、おまけに根岸くんだりから深川まで誘寄せて、鐵鎚でカーンと遣らせる、成程、先方は可恐しい魔法使だ、が其の術に掛つて、カーンと遣つてる馬鹿らしさは天竺にも無いべら棒だ、と自棄に最う一つ口惜紛れに打撲ると、鐵の鉤めが、ゴツンと動いて、鎖で機んで、ブウンと返る、と此奴に頤を引掛けられて、もんどり打つて水の中へ打込まれるのが、三十七歳の今月今夜と定まつた、前世の約束か、と偶と思つて、ぎよツとして追はれたやうに飛退るとね……」

「へい、まあ、お前さんは三十七かね、本命にしちやあお若うがすぜ。」

「面目も無い、小兒だよ。」

九十二

「其處をだね、棟梁……背後から兩袖で、涼しい風が撫でるやうに肩を抱いたものがある。經驗は無いが、月から兎がひらりと降りて、人の肩に留まつたら憊うだらうと思ふ、頬に頬が合つ

て大な目で顔を覗いたのが那女なんだ。(待つてたわ。)と莞爾して言ふぢやあないか。

さあ、憊うなると、時間の打合せをして置いて、公園で出合ふ出来合の寸法とは、まるで以て物差が違ふ。使はれたか、使つたか、魔法で顯れた婦だからね、光輝かないのが不思議なほどだし……それに何だ、此方を客に取つた處で、幾千金にも成るまいに、翡翠を取放しで、消え失せた方が割だらうものを、約束を守つて姿を顯したと成る、と許嫁より實がある。怪しげな夜の袖も、黒い胡蝶が翼の紋に玉を抱いてるやうに見えて、それで島田で、もつれ髪だ、悚然とした。

……(冷い手だなあ。)(逢ひたさに。)(何。)(水垢離を取つて居たの、暖めておくれ。)(と衝と懐中へ手を入れた。……寒中ぢやあない、此が眞夏なんだから、世の亂れさ、暴風雨の前表だらうかね。

「堪らねえ、腕の中を御覽じろ、鱈が腹を出して反つて居らあ。」

「いや、小牧山や三方ヶ原の御記録を読むのぢやあない。此のくらゐの事に驚いて夜鷹の講釋が聞けるものか。」

「斷念めちや居ますがね、少々助けておくんさいよ。」

と酔つた顔で、手を掉つて、

「はッはッはッ。」

「道行は預るか、此から、岸を傳ひ、橋を渡つたが、魔界の天女と手を組んでる所なんだ、雲を踏む心持がしさうなものを、へられけに酔つてるから山火事を見ながら泥の海を泳ぐ気がした。やがて、連込まれたのが、大鋸の口を開いた其の可恐い木を挽く小屋さ。——一足先だつたんだ。——幾世が引込まれたのよりか、私たちが……」

「は、あ、はてね、」で、吉兵衛は小首を捻る。

「……此の凄いのを一目見ると、頭へ鋸の刃がガリ／＼と来て總身の骨を削るやうで、那女の鬢と袖の香が、五寸釘でチク／＼と腸へ沁通る。痛快だね。材木小屋で夜鷹を買ふのは、此の積夜具に限るか何かで、故と組へ上り込んだ。——（此の鯉を見ないか。）と言へば（私は星よ、御覽な。）と廢と捻つたのが懐中電燈の小さいので、……時々暗闇を照らしたつけ、其の時、懐の中で眞蒼に點したから、紺の羅に透いて、膚には、あの、翡翠の影が映るやうです、しかし棟梁。」

「足場の天頂、危険々々。」

「酔つて殺された鱈でも、まだ人間の亡者には成らなかつた私だから、まさか地獄で寝る氣はないんだ。——處で、更まつて玉の事を言出した、相當の事は心得ようから、あれを返しておくれと……仔細を言ふと——此處を聞いてもらひたいな、棟梁。」

「軒なものかね、生死の境だ。」

「差したる事でもないかね、（ぢやあ、其の紙の姉様人形からは、何うして玉を取つた。）とね、那女が言ふのさ——心持ちやない、其の仕方なんだ。「どんな風にして。」と肩に凭掛つて鋸屑を敷いて、棲を投げながら聞くもんだから、（そりや何だ、賣卜者の店で十錢で買つて歸つて、棚の上に置いたのを、二三度手に取つて見るうちに、何だか千代紙の帯の下に、コト／＼手に觸るものがあつた。）——手に觸るも嫌味だけれど、事實然うなんだから、其の通りに言ふと、（ぢやあ、斯うかい。）と手を取つて、帯に當てた……」

「何と聞いているか、此奴等。」と吉兵衛は箸を返して、椀の中の鱈に當つて、

「ちよッ、變な目で睨んで居やがる。」

九十三

「お銚子だ……遣取りは繼ぎにして、あとは各々手酌で遣るから、一時に二本ばかり、熱い燗を……待つたく、一本は度合の好いのを——」

柳吉は小婢を呼んで言ひつけて、

「那女がね、で、其の手を壓へながら、（其れから何うして）と恚う尋ねる。……棟梁の前だがね、更めて饒舌ると成ると、少し弱つた。」

と片手を袖口へ、俯向いて、酒にほてる額を撫でたが、

「鎧を脱いで腹を切る次第ぢやなし、翼も毛羽も撈らんぢやない。帶留の紐を解いて、——人形の姉様のだよ——淺黄の一粒鹿子の背負揚を解いて、それから縋子の帶……と棟梁、何を拜むんだい。」

合掌したる吉兵衛が、

「鱒に引導を渡して居ますよ。」

「悟り給へ。」と一禮して、

「那女がね。(寝かして置いてだか、其とも立たせて置いてだか。)と言ふ。(柵の上で居勝手だから、人形は横に寝かした。)とありのまゝを話すと、白い兩手を……島田に支つて、爪さきで裾を引いて、俎の上へスツト寝た。翡翠は胸にある、帯を解いて、其の人形にしたと同じやうにして取れ、(でなけりや殺されたつて返さない。)と言ふんだ、……棟梁。」

吉兵衛は、椀から、むしやくと啜つて、默然の苦笑。

「汝元來とか何とか言つて、赫と氣の上氣るトタンに、冥途へ落ちる人魂です、いや、提灯の灯が、戸に見えた。吃驚して二人ともするくくと黒縋子の帯ぐるみ、鰻の如く材木の蔭へ伏木隠れさ。潜つた處へ、面の疵が化物めいて入つて來たのが、其の猫萬で、幾世を引挾んで群八だつ

た

——見て居られるもんかね、引組んぢやあ敵はないまでも、突如飛出して、幾世を庇ふべき處だつたが、鬼が前方で幾世の其の紅い紐を掴んだ時、ふと氣が着くと、人間のつもりが、此方で、何うだい、夜鷹の青い紐を、うつかかり持つたまゝで、手を取合つて忍んで居るんだ。

變な氣がした。はてな、女に對して、時と場合ぢやあ、裏表でも、夜晝でも、同じ惡魔に成るのぢやないか。如何に心持が違つても、目の前に、彼と此と、恚う較べて見る時に、いづれ日月に向つて面を合された體裁ぢやあない、と思ふと、持つた紐が、忽ち毒蛇で、離しても離れず、腕が萎えて、拳を揮つて飛出すのに、おのづと逡巡をしたんだが、チラ／＼と凄い稲妻が映すやうに、彼奴等の手から手へ、往つたり來たりした翡翠を、俺が、己が、で争ふ中に、幾世の姿は愈亂れる——(先づ此の女から話を極めよう。)(阿女何うだ。一寸、お見舞ひ申さう。)—で……聲も立てずに、唯肩を震はして泣く幾世を、赤鬼が材木に磔つて兩手を扼ると、弱腰など打つ氣だらう、老夫の青鬼が即ち躡んで、杖を構へたから、最う堪らない。」

「其處だ、旦那。」とハタと手を拍つ。

「いや、取つて投げたのぢやないから、張合は無いのだがね、老夫のナポレオン帽だけは肩まで滅入込ませる勢で、あの鐵鎚を引被ると、(焰魔大王を知らないか。)と、一喝して飛出したんだ。

や、狼狽へまいか。」

「真個だ。」と又手を拍つ。

「老巧な奴さ、しかし提灯を、遁げながら吹消して、二人とも小屋から失せる、背後から那女がね、(辨天様の御地内を、何と思ふ。)と浴せ掛けた。夜鷹の分際で罰の當つた、——此が悪かつたんだよ、棟梁。」

「はてね、飛でもねえ、何うしてだね。」

「まあ、お待ち。……(何うした姉さん!)と可哀相で、日本中の力で抱締めて庇つて遣りたい、暗がりの幾世を、(確乎しな、大丈夫だ。……新道の菊川鯨の姉さんだらう、私は心配なものぢやあない、知つてるか! 三浦だ。)と手探りの手に觸る手の、ぶる／＼と縋つたのが、千曳の石より身に堪へて、そして鶴の羽より軽くッて。(存じて居ります。根岸の先生。)と花片が露に咽ぶ聲して、言ふか、と思ふと、霞が腕を傳ふやうに、スツと入身に、私の胸へ、ひたと冷たい前髪が、血に透る。……横に居て那女がね、(呆れたねえ。)ツさ。」

「や、呆れたねえ。」

「申戯ぢやあないぜ、棟梁。」と胡坐を居直る。

九十四

「いゝえ、決して申戯どころぢやあ無え。」と、吉兵衛は首を掉つて、

「聞いても、氣掛りで成らねえ。へい、其の姉御が聲を掛けたのが、何うかしましたかい。悪かつた、と言ひなさるから心配だ。」

「まあね、しかし其れは後で此方が考へたんだ。——私ばかりが怒鳴りつけて、其奴等が遁げたんだと、どんな可恐しい小父さんか、凄い兄哥か、材木小屋の奥底が知れなくつて、遁切りに濟んだかも知れないんだがね……婦が一所だと成つて、小屋の暗がりに忍んで居た此方の内兜が對方へ見透いたんだらうと思ふのさ。——何うして、悪い事に掛けちやあ抜目の無い場敷を踏んだ奴等だから。……悪くすると、一時は不意に怯かされて遁げたものの、遠くまでは飛ばないで、そつと聲音を盗んで引返して、隙見をして、様子を伺つたのかも知れない。……其處等は猫の遣方です、後退りをしい／＼、あの、疵一つ一つ眼にして、じろ／＼と見る奴なんだ、可厭な奴だ。」

と手酌で呷々と引掛つ、

「其處へ行くと、此方は小僧だ。小父さんの前だけれども、ねえ、棟梁」と酒の息を、は、は、と自棄かと思ふ笑顔である。

「何でも可うがさ、棟梁でも、小父さんでも、大分酔ひましたぜ、疊がふら／＼と船のやうだ—
—話が岸へ着く迄は。」と胡坐を揺る。

「あの時なんぞも、洲崎と言つたが、實は、其の逢へない幾世の顔を見たさに、無理な船にも乗つたほどなのが、其の羽目だから、唯もう胸が一杯で、慰めようにも、いたはらうにも、碌に口が利けやしない。(怪我は無いか。痛みはしないか。心配するな。)と暗がり、背中を撫でて遣りながら、(苦勞をするなあ、辛からう。)とだらしの無さは、半ば泣聲なんだから、駕籠昇だね。乗つてて捌きを着けようと言ふ立役の旦那ぢや無い。……(死んだ遊女のやうに思ふんだよ。)と思はず抱しめたんだから、饒舌る事も、する事も半間さが堪りません—處を、腕とも言はず、背とも言はず、臀とも言はず、チクリ／＼と夜鷹が捻る、いや刺すんだ。藪蚊どころの騒ぎぢやない。」

「これは大變、頭の赤い烏ぢやあねえが、そんな夜鷹は火に祟らあ。」と吉兵衛は腕を組んで、「しかし黒焼にすると痢の藥だ。人間一生に一度は、そんな目に逢はねえと、婦に振られた時無理心中を仕かねえ、はッはッはッ。」

「笑事かい。(痛い。)とも言へないやね、此の場合。……齒をくひしるばつかりさ。幾世も口は利けません、それに婦が居ると思ふもんだから、「はい、はい。」と密とつけ答へをするんだつけ。

(貴方、お目にかゝりたうございましたわ。)と引しめたのを力に言つて袴と緋られた時は五體が痺れた。(私も逢ひたかつた。)と言つた。即ち、捻つたがね、もう痛みません。其のまゝ石にでも成りさうな處へ、どか／＼と聲音、大勢。小屋の戸に提灯が五つ六つ、はッとする間も何にも無い、(此處だ。)(此處だ。)と喚立てて、木場の若衆、奉公人は小屋の持主の許のだらう、救世軍の士官が交つて、(何奴だ。)(誰だ。)と取巻いて、振照らす提灯の中から、弓張を突附けたのは疣猫だ。——此だよ、棟梁、此方の内證を見透かして、仕返しの手廻しに、曲者が忍んだとか何とか言つて、觸廻つて、時の間に狩集めたものだと思ふのは。——さあ、凌げない、金平でも往生だらう。」

「此奴は咽喉へ支へるね。」と吉兵衛は、ドテでこなして居たおなじみの牛蒡を鵜呑みにして、

「本多平八郎でも煩かしい。」

「況や弱卒に於てをや。」

九十五

柳吉は喟然として、重さうに天井を仰いだ、
「唯もう穴があらば入りたい處なんだ、と云つて其處へ這へますか。」

「まさか、お前さん。」

「ね、だから土龍に成つて踏まれるよりか、鶴の如くで、打たれるか撲かれようと覺悟をして、澄まして懐手で立つて居た私の顔に、其の弓張を突附けたのが猫萬で、（此の犬。）と言ふと、（畜生。）と群八が平手で横頬を一つ撲つたんです。撲つたと思ふと、其の手で、幾世の片腕を、あ、抜けはしないか、と思ふほど引摺んで、ぐいと引立てると、あれ、と白い足で爪立つやうに成つて、涙を一杯の目で此方を振向いたが、もう戸の外へ。……此を見ると私は痛さも口惜さも忘れしたがね、泣くより笑ひか、疣の老夫めが、其處に解けて落ちた幾世の帯を攫ふが早いか、驅出して居なく成る、すばやいのさ、遣方が。」

で、立掛つた若衆どもは、いまの一騒ぎに何が何やら、提灯は有りながら暗中で鼻を撮まれた形で、はくしよなんて、中には嚏をしたのが有る。が、勿ち一寸陣備へを立直して、貴方は、君は、お前さんは、と詰め掛ける、何をして居る、何だ、何處のものだ、と口々に言ふ中に、「此は私どものだが」と年配の男が一人、持主の手代かと思はれるから、其の前に頭を下げて、「済まん事をしました」と詫びるより他はない。（いや済むも済まないも仔細を聞いた上で、御挨拶もします、お掛合も申さうが、夜分人の機械場——機械場と言ふと見える——へ無斷で入つて、何をなさる、何をします。）と、えごい顔をされたのには實際弱つた。何とも口の利きやうが無い。」

「夜鷹を買つた、何うでもしてくれ、と尻を引捲りや可いんだ。」と棟梁は氣競つた顔色。

「今なら言兼ねもしまいがね、……些とは世間から身を庇ふ氣が有つたんだよ。進退きはまつたと思ひ給へ。婦はと見ると、土間へつぐまつて、肩腰をすぼめて、頻に、恚う鋸屑を捨るのが、疊の塵を撈るとかつて、處女のやうに包ましいから可憐に見えて、一所に撲たれでもしようなら、胸の下へ敷いて倒れて、私の身體で楯に成りたい氣がしたんだ。が、何、成りたけ清潔さうな鋸屑を選つて掻集めて居たのでね、（皆様。）と不意に言ふと、衣ものを庇つて、其の上に膝を支いて、「今まで、聲も出ませんでした……急な腹痛で、此の納屋の外の處に、路傍に倒れて苦んで居りましたのを、お通懸りに此旦那が、見兼ねて御深切に介抱して下さいつて、夜露は毒だと、其を凌ぐのに、中へ抱込んで下さつたんです。……済みません。）と優容なものでね、然も何時の間に手廻しをしたんだか潰島田を引散して捌き髪に成つて居たのさ。此だと人相が變ります。いづれ、あの近邊では、怪い婦が出没して、通行人を怯かして、懐中ものを引攫ふ風説があつて、内々警戒をして居たんだから。——おまけに、此處へ來た救世軍は、一度肝を抜かれた奴で、婦が持つて居る懐中電燈は此奴のを引こ抜いた手玩具だ、と言ふから串戲ものさ。——以來、口惜がつて復讐に狐を探してふらついて居たんだらう。が、此奴のために、私は名を聞かれて了つたんです。苦くも、酸くも言譯は、病氣の介抱で立つたものを、（あ、しかし。）と言葉尻を上げて言ふん

だ、其の救世軍が。(社會道德のために、風紀の匡正を期する我々職責上、あゝ、貴方の、御姓名を一應伺ひたいですな。)と言ふんだ。分るかい、棟梁。」

「分らねえ。」

「こりや分るまい。(ぐつと引飲んで)私にも分らないが、黄色な聲で、ねつゝ饒舌るのが、小焦れつたくて、癢に障つて、我慢が出来ないから、故と一禮して恭々しく名刺を獻じた、——材木納屋に於て、夜鷹を買ひ申候段實正也、——と證書を出したやうなものです。は、は、」と酒の息がはずんで又苦笑した。

九十六

「何うだい、二人を素裸にして、箒とバケツを持たせて、一晩中掃除をさせて清めようぢやないか、などと言ふ後言を聞きながら、悄れ返つて小屋を出たが、ぞろ／＼と其の人数がついて来るんだ。……出れば直ぐに入幡前へ出られるものを、憎乎としたと見えて逆に木場の方へとぼつきながら、引き廻しにでも逢つてるやうな気がしたが、那女の言種を聞きたまへ。(あ痛々)ツツて、胸を壓へて、私の袂に掴まつて歩行きながら、小さな聲で、(町内に提灯を點けさせて、花嫁の禮廻り、洒落てるわね。)と笑つて居やがる。惠比壽の宮の前になると、(鐵鎚を忘れつこなしよ。カ

ーン。)と言ふが疾いか、神樂堂の欄干へ手を掛けると、身の軽いことは道成寺で、ひらりと擧つて、すつくと立つて、(辨天様をいぢめたね、町内の連中ども、此の秋は洪水だよ。其の時白い蛇が泳いだら私とお思ひ。)と、黒い姿で一寸こむやうにして、髪が支へさうに樂屋口へスツと入つた。——提灯が亂れる中を、此を機會に、私は一散に驅出して歸つた、とだけで、其の時は濟んだのだが。」

柳吉は一息した。息繼ぎに又呷つて、

「——棟梁、此處へ來ると、酔はないうちにと思つて最初に君に預けた。——其の翡翠を、お京さんか、あの娘さんなり、觀星堂と言ふ其の賣卜者の手許まで、君から返してくれ給へ。何うして、其の出處が解つたかッて……其奴を言ふと、私の今住んで居る處が知れる。挨拶が有つたり何か、また浮世につながりが出來ると面倒だ。氣まづく思はないで、棟梁も居處は聞かずに置いて貰はう。自然また大川で流合ふか、講釋場で落合ふ事も有らうから。」

いや、古い奴だが世間は夢だ、目が覺めて居るんだとは思はない。

述懐ぢや無いがね、私も此で一寸した畫工なんだよ。棟梁、毎年秋の、畫の展覽會を知つてるかね。」

「何だか知らねえが、四五年以來此處等でも大層な評判でね。むかしの入谷の朝顔、團子坂の菊

いや、もつとかね、春のお花見ほど女小兒まで騒いでね、私等が嬉々なんぞも今年が一番、近所の娘に連れてつて貰はうッて浮かれて居やがる。豪勢な人気なんだ。おやあ、お前さんも其の繪の大歌舞伎の人騒がせの役者なんだね。」

「落第だ。」と頷然とする。ト電燈が息を引いてスツと暗く成つて、壘の濁つたのが赤く見えて、人は背が黒く、胸が白ける。

「落選さ。此の舞臺へ、目鼻のはつきりした處を見せようとするには、審査員と稱へる試験役があつて、茄子、胡瓜、南瓜に絲瓜か。毛の赤い唐黍、ハイカラ擬のじやがたら薯なんと言ふ——水の乾いた前裁どもが、皺びた面の並大名で、すらりと高慢な椅子を並べて、葉巻なんぞを横御へに、青、白、赤の吹分けの手品を使ふ。ちよッ、そんな場違に、深川の夜鷹が分るものか。……はじめ畫の題の風説をした時から、夜鷹は止せ、と方々から注意されたを、意固地にお目に懸けたんです。操りの絲に掛つて、畫看板の宙乗よりか、蜘蛛の巢に搦んでも根を生して地獄で胡坐だ。落第は驚きませんが、パツと此の落第の評判が立つと一所に、いつかの材木小屋が大比羅に新聞で世間に鳴渡つた。それも、女房が亡くなつた、女にかつゝと、と言ふんなら、それが悪けりや金子を貸せ。で、多寡を括るが、可厭な事は、三浦某は、實地に夜鷹を研究して、材木小屋で、素裸に這はされた、あゝ、斯の如きは獻身的の藝術なり。(と今は半ば獨言で、)此ぢやあ

氣障さが堪らない。嘘と聞いても身體を粉にして棄てたいから、我身で我身を勘當して、然やうなら、と家を出た——鐵鎚一挺、此奴で今度は木場の月夜に、空からかゝつた鐵の鉤を、腕ではすんで打つた時は、尾上の鐘より音が冴えたぜ、カーン！」

「旦那……」
ぐらぐらと壘が動く、戸外に激しき人聲、蹶足。おなじ二階の向うの隅に、釜形帽子をすつぱりと被つて、蹲まつて飲みながら、時々じろくくと此方を見越した、肥つた書生風のが、のツと立つて町を覗いた時である。ト息を詰めた、棟梁が、
「火事だ、近え。」

組皿菊皿

九十七

歌の藥芍

「幾世さん、佳い品を上げませう。」
「……あら、母さんの。」と、熟と視て、すぐには袖にも取りやらず、幾世は胸で抱くやうにして、片手を優容に疊に支いた、撫肩を迂りさうに、お召縮緬の、紺地に藍と茶の堅縞の羽織の袖の、

するりと敷いて、袴の袂より長いのと、何となく風には當らなさうな奥床しい薫が添って、品の立勝つて見えるのは、想つても出處が知れる。——優しい人に風ひくな、と朝夕の膚寒に、佐賀町のお京が我身の被せたのである。

峰桐太郎が(佳い品)と言つて、衣兜から出して、卓子臺の上で、學校の手帳の如く、紙包を開いた一品は、いつか幾世が遺失したのと寸分違はぬ、極彩色の秋草の挿櫛で、但彼は夕月の霧深く、此は旭に露も輝くばかり新しい。

唯見ると睫毛が暗いまで、両手を支いて俯向いて、

「まあ、何うも……」

木小屋の牛頭馬頭から引續き、菊川の香も消えさうだつた幾世の身の、峰を前に、此の羽織と、其の挿櫛は、觀世音の柳の袖、普賢菩薩の花の簪に見えたであらう。

如海道人も傍らに控へて居る。……

場所は日本橋の檜物町に、萩の家、通稱を村咲と言ふ、上品向の待合の奥深き一間なのである。

此の日、此より先、峰は丸の内なる其會社の偉なる大理石の建物の裡に、海の如く連つたる卓子の一席を占めて、一冊の帳簿にペン以て細字を記して居た。紙にサラ／＼と白雪の音の立つたで、勤務中の人々は靜肅なものであつた。

扉に音なく、給仕が進んで、

「峰さん、御面會の方でございます。」

ペンを衝と臑で上げて振向いて、名刺を覗くと、觀星堂如海としてある。

「坊さんですか。」

「は、然のやうにも見えますが。」

其處で、ペンを置いて、名刺を受けると、印刷した所謂名刺でない、奉書を裁つたのに、拙ながら濃墨で名を記して、傍らに(菊川の事につきまして。)と口上がはりに書入れがしてあつた。

「通して下さい。」

「は、階下の三ツ目でございます。」

「分りました。」

給仕が退る。

峰は記し掛けた帳簿の面の前後に、明かな瞳を配ると、靜に綴を合はせ、吸取紙にペン尖を拭つて置直すと、カタリと椅子をすらして脊高く立つて、柱の大時計を視た。他の場合には、人の前で、峰が時計を出して時を計るのを誰も見た事は殆ど無い。——勤のうちに私用で立つには、恚うするのが癖である。

並居る人々は皆目を舉げた。峰の起居は珍しい。

それから扉を出た。

螺旋形の深く暗き階壇に上から臨んだ時、ロンドン製の、背廣の衣兜のキリ、と高いのに、しつくりした脇を高く挿入れた時、目許が優しく仇氣ないほどに見えた。隙があらば、深川へ出向いて、幾世に興へて喜ばせようと思つて、こゝに納れた筈の插櫛が、指に嬉しく觸れたからである。

で、降りる姿は若々しく見えたが、廊下で立直つて、靜に大跨に、應接間の、衝立で劃つた真中へ。

椅子に落込むやうに抜衣紋に成つて控へた道行の丸頭が、近づく聲を聞くと、慌てて立たうとして、椅子が膠で附着いたか、と尻を藻搔いて、漸と身を開くのを、

「貴方、其のまゝ。」

九十八

「これは、初めました。」

「初めました。……お訪ね下さいました、私は峰でございますが。」と、峰は目で來意を訊いた。

「はい。」と、だぶついた襟を合せて、

「手前は唯今お取次まで名刺を差出しました觀星堂と申す、深川に居ります、え、時々大道などへ出ます怪しげな易者でございます……しかし其の決して不都合なものではございませんので、突然御面會を願ひまして、早速お聞濟みで、何とも恐縮でございます、實は、」

「何ですか、菊川の事でお見えに成りましたさうですが、と又(か)と裏問ふ瞳である。

「はい、え、蔭ながら承り及んで居ります、貴方は御身分の有らつしやりまするお方様で。」

「串戲ですよ。」と柔かに手を卓子に置く。

「先方の家業柄、恚やうに白晝表向に伺ひまして、知らん、と仰せられたら、其までの儀を、菊川の事か、と仰せ下さるお言葉は何とも難有い次第で。」と額を下げつゝ、

「唯其だけでも大に力を得ます譯で。就きましたは、少々お願ひの條がございます、と申して毛頭御難題な事ではないのでございますが、思召を一寸伺ひたい仔細がありますので。幾世、

あの、店の娘と、私同道いたして参つたのでございます。」

「御一所に。」

偶と峰の目は扉に注いだ、秋冷やかなる石疊の廊下に花の影ありや。

如海は効性なう、道行の袖で指して、

「戸外に差控へて居りますので。お若い方のお勤め前、御外聞がありましたは、と御遠慮を申上げました。」

「貴方」と、峰は衣兜へ手を引いて胸を起した。

「怒うなすつて下さいませんか。」

「如何にも。」と早や頷く。

「会社の時計が二時三十分、唯今少し過ぎて居ます、かつきり四時には退出ますから緩りお話を伺ひませう。」

「あ、如何にも、……之は若い娘さん許りか、年配なものが附添ひながら、飛だ心ない事を仕りました、如何にも。」

と、もう立つて、腰を引いて、

「御時間頃更めまして。」と狼狽へた體で出ようとするのを、峰も衝と起ちながら、

「一寸、貴方。」

「はあ〜。」

「失禮ですが。」——此處で日本橋の萩の家を導いて教へて言つた——

「電話を掛けて置きますから、お連と御一所に——お差支はありませんか。」

「差支どころではございませぬ。」

「此から直ぐにおいでなすつて、茶でも召食つて御休息なすつて下さい。……日中は戸外はまだ暑いでせう。」と言つて、目を窓に移した。庭は常盤樹ばかりながら、桔梗など咲いたやうに、

紫の影のさす峰の瞳は優しかつた。

大路の柳も葉の透きたれば、木蔭に立つさへ晴がましく、幾世は涼傘を持たないのに、會社の横の塀について——彼處を行き、其處を通る、塵埃の中の萌黄、紫、綾錦——帝國劇場へ派手な褌を翻す、群に離れて、深川の水は涼しいが、眩しさうに俯向いた、黒緇子の半襟に陽の當つて白いのも、すき切れしたか、と包ましかに、袂の端を重さうに取つたのも、借着の袖丈揃はないのを氣にして合すとは見えないで、人の惠を肩にして、手に据ゑた、其の姿の床しさ。

「や其處か、其處か。」

と觀星堂、酔つたと思ふ、ふためいた腰附で、日和下駄をがツたがたと、逆上せた顔で、帽子と蝙蝠傘を一所に抱へて、名古屋扇を大煽ぎに煽ぎながら、會社の石壇から幾世を見うけて、呼ばはりながら、あたふた寄ると、ト見て、

「日中は、まだ戸外は暑い、あは、。」と嬉しさうに莞爾々々しながら、大蝙蝠をゴツンと開いて、幾世の黒髪にさし掛けたは可い、が、帽子を忘れてポコンと落とすと、幾世が拾つて、砂を拂ふの

を、まよろりと見て、頭を抱へて、
「いや、これは。」

九十九

「お待ち申して居りました、何うぞ此方へ。」

——峰に教へられた通りに電車を下りると、下りた處から小戻りをして横町へ入るのに、赤々と秋晴の日向を、止せば可いのに觀星堂は、峰の情を波顔に、件のしけもの大蝙蝠傘を、幾世に翳掛けて、ト道を行く。——都の眞中、此の邊の人は種々の世の状を見馴れて居ればこそ、黙つて通して、油屋の隠居が年代記にも書きとめなかつたけれど、二人が此状は、住吉の坊さんが結綿の京雛を買つたとも譬へやうの無い稀有な道中。風一陣吹くならば、辨天と現じ、壽老人と化して、颯と隅田川の虚空を指して舞上りさうに見えたが、仔細なく萩の家村咲の門を潛つたのである。

「これはくお出迎ひ恐入ります。」と如海は腰を折つて恭しい。

女中が姿な顔をした。おや、氣の知れない幫間と、柳橋あたりの綺麗處の寢したのが、何かの趣向、かつぐのではないか知ら、と思つたが、洒落や串戯をする若旦那でないから、と相當にあ

しらつて、

「恐れ入ります。……何うぞ此方へ。」と謹んで案内に立つた。

「さあ、和女。」

幾世が俯向いて控へるのを、

「然うでない。和女が上客ぢやから、お先へ。」

「でも。」と、困つて蔭の方へ肩をかはす。

「まあ、それでは（と幾世の風俗を、も一度見て、）彼方様がお困りでせうから。」と女中が捌けば、

「然らば御免。」で、日和下駄を草鞋の扱ひ、如海は長旅の旅籠屋へ着いたやうな足取で、廊下を

とばくさと導かれて、

「暗いぞ、氣を附けて、氣を附けて、」と振向いて、此の薄暗さに、幾世の姿の麗に明いのに小首

を捻りく、奥座敷へ通されたのであつたが——

女中がやがて煎茶に干菓子、銀の湯沸で出直ると、襖を背に當て、座敷の入口に整然と坐つて

居るので、「御免下さいまし。」で入つて、紫檀の卓子臺の周圍に、三つ揃へてあつた緞子の座蒲團

を、最う一度据直して、

「何うぞ。」

「はい、はい、否、もう。」と扇を捻くる。

「何うぞ、貴女。」

「いゝえ、私は。」

「ちやんとお褥を差上げて置きませんと、手前どもで、若旦那様に悪うございますから、何うぞお敷き下さいまし。」と茶を注いで並べて慇懃である。

「如何にも。成程其處もありますかな、然らばお約束のお茶を頂きませう、さあ、幾世さんも。」

とはじめて座に直つて、茶碗を兩の掌に据ゑて、中庭の石燈籠を視めながら、

「これは、結構なお住居で、御閑静であらつしやいますな。」と押出したやうな咳をして、見返ると、幾世ばかり。女中は最う居なかつたので、間が抜けつゝも吻と息をして、

「幾世さん。」

「はい。」

「はい。」

「何う云ふ處ぢや知らん思つたが、此は待合茶屋ぢやさうな。が、和女は差支へ無からうか。」

と、もの／＼しく聲を祕める。

幾世が膝で一才寄つて、

「何故でございますの？」

「いや、従前と違つて、近頃の待合は甚だ其の怪しからん事をするさうでな。」

「でも、若旦那が然うお言ひなさいました家でございませうから、あの、そんな事……」

「分つた、大きにな。——會社においでか何うか、一應電話でも窺つてからと私が言つた時、御病氣でなければ屹とお勤めでせうから。」和女が言ふので、いきなり出向いて逢へたのぢやつた。

いや、其のくらの信仰をせん事には、今度の相談も出来ぬ筈。分りました。——尤も、それに、

和女は、お商賣柄、こんな家には馴れてぢやつたな。」

「存じません。」

「は、や、又来たぞ。」と更まる。

今度は女中が盃洗に添へて銚子杯。チリンと鳴る音信を、グワサリと受けた物音は、如海が動

じて懐中から笹竹の袋を落したのであつた。

百

時に、白露の輝く如き挿櫛に對したる、幾世の前髪艶やかにて、俯目に手を支いたのを峰が視

て、

「幾世さん、私に禮を言ふ事は些とも無いのです。一體、私が頼んで水兵さんに連立たしたため

「そんなに弱蟲ですか。」
「いや、最う御覽の通り。」
「それは悪かつた、御免なさいよ。……では更めて進呈をすゝとしてだ。私に禮を言ふ事は少しもない、お取次をしたに過ぎないのだから。唯苦心と言へば、其の櫛を典具帖に包んだ手段です。其は大に感謝して貰はないぢや引合はない、何故と言ふにね、……妹の部屋へ忍込んで、御祕藏の櫛笥の蓋を開けて参考にしたのだから。……こんな事は、私が七歳の時、姉の居室を窺つて、人形を吹矢で狙つた以來一度も無いのだよ。」
「まあ、お悪戯をなすつたのでございますね。」
「處が今は此の通り温順しい、お前さん、知つてゐるね。」
と振向いて、揚げた緒口に、品のいゝ、おとなしづくりの藝者が、傍から酌をして、
「濟みませんが忘れしました、實にも覺えが悪うござんして……」
「遺恨があるんだな。」と振向いて、如海を視て、
「御信用なすつて下さい、其温順いのが妹の手箱の中を、何に櫛を包んであるだらう、と思つてたわけは、……其の櫛を送つて寄越してくれました、三浦さんは、最う根岸の家からではなく、出先、として、また小包が亂暴なんです。……鹽煎餅か駄菓子でも包んだかと思はれる、紙袋に

に、遺失したんだから。お前さんの、私に責を負はす氣のない事は知つてゐるけれども、私としては出来るものなら償はなければ成らなかつたんでね、秋草の繪の畫手を聞いて、これは一つ話をしたら三浦さんが書いてくれない事もなからうと思つたけれども、一度頼んで見ないうちは、浮り饒舌れない、と思つて、あの時は其のまゝ分れたんだが——快く頼まれてくれました。其です、母さんの記念のと同じだらうね。」
「はい、そして、あの、お描きなすつて下さいましたのは、矢張り根岸の先生でございますか。」
「あゝ、三浦さんの丹精だよ——羨ましく成つ了つた、餘り綺麗で。」と居住居は崩さぬが、打解けたものいひで、盃を含んで言つた。
「濫りに口を出すきではありませんが、全くお見事な事です。」と如海も見つ、打傾く。
「私が貰はうか知ら。」と晴々しい面色で、峰が對方から軽く手を出すと、幾世が嬌態をして、袖で止める眞似して、
「可厭でございますよ。」
「何故。」と眞顔で顔を視ると、
「でも、下すつたものを、若旦那はづるうござんすわ。」と睫毛を伏せて莞爾する。
「なぞと言つて、弱蟲が急に強がるわ。」と如海も笑ふ。

引巻いて、新聞で疊んで、上を竹の皮で巻いたのに、半紙を貼つて宛名と處がきが記してあつたんですかね。」

如海が偶と扇子を話の中へ挟んで、

「……竹の皮に、紙袋、はあ、で、新聞とおほせに就きまして、近頃、夥しく沙汰をします、浮世繪の御名家の……其の三浦先生の、お行方が相分らんと申すは、眞個でございますので。」

「御存じですか。」

「僅少の拾讀み、借りものでございますが、二三の新聞で拜見しました。……此の菊川の娘さんも存じて居りますので。」

幾世は膝に袂を重ねて、悄乎と差俯向く。

「竹の皮に紙袋……あ、御境遇のほどと思はれまするな。」

「困りました、自棄な事をしてつて。」と、其の髪の濃い額に、幽なる影を帯びたが、

「尤も自棄よりか、半分は洒落なんぞせうが。」

凜とした聲で言つた、峰の聲で恚う言ふのを聞くと、不思議に其が洒落のやうに聞えぬでも無かつたのである。

百一

「しかし、家出をしてつては、洒落が洒落でなくなつて事實に成りました。私たちも心配をして居るのです。——實は此の櫛を頼まうと思つて、もつと早く訪ねて行く筈でしたが、つい、くだらない用事でも隙がなし、それに夏中二三ヶ月は、あの人たちは皆展覽會の繪のために、傍目も觸らないほど忙しいのを知つて居ましたから遠慮をして——

其のうち先月の末でした。三浦さんの繪も出来上つたと言ふ新聞を見たものですから、其頃でしたよ。晩方から逢ひに行くと、晝室に評判の夜鷹を立てて、門生たちを集めて茶話か何かして居た所で、私が行つたものだから、對向に成りました。何しろ飲みますよ。女のお弟子が茶を注いで持つて来て置いて行くのを、頂戴しようとする、柳さんの先生が、「お止しなさい」で茶碗を引手繰るから、埃か髪の毛でも入つて居るのを見附けて、それで止せか、と思ふと、何、然うぢやありません。突然縁側越に庭へざぶり、と打まけて置いて、襖際の絹地の中からウキスキイの壺を出して、タダと茶碗へ注いでくれて、自分も引掛ける勢です。老人氣のない所へ、細君が亡くなつて男世帯だから亂暴で、……お弟子さんに軍鶏を買はせて、ぶつ切で、それから更めてお燗酒です、——目の青い白猫を抱いた黒い姿の婦の前で。……其は立派に出来て居ました。私

は別に斯道に心得はありませんけれども、辻に立つて色を鬻ぐ婦を唯描寫たのではありませんまい。暗い影も、深い意味もあるやうでしたが、審査を受けて、展覽會に出す製作としては、結果を危ますには居られませんでした。

審査員の眼に夜鷹は不可い。……夜鷹より遊女、遊女より藝妓、藝妓より白拍子、白拍子よりは巫子で、それよりか處女が無事なので、一層支那の美人の方が、雲でもあしらつて置くと天人擬で氣うけが可いのですから。

些と立入つた事なんですが、其上審査員の中には、三浦さんを戀の仇だと思ふ男爵が一人あります。義太夫狂で、少し馬鹿だ。」

と峰は靜に卓子臺を壓へて言つた。……

「御前とか閣下とか言つて、又此の頓馬に、膝行拜伏する畫工があつて、其等が審査員なんだから大概様子は分りませう。親が死んでも、子が死んでも、いゝ事にして、一面識も無いものへ、電話帳を繰つて引札を配らうと言ふ連中が、株を買つた番太郎で、棒を突いて立つて居て、此の繪は通す、通さないが聞いて呆れる……ぢやありませんか。

一體、繪なぞと言ふものは、批評はすべしだけれども、審査はすべきもので無いのです。神様ならば知らない事、おなじ人間同士、批評は出来ても審査の出来よう譯がない。するのは罰當り

です、僭越です。——されるものも不心得です。しかし、する者も世渡りなら、される者も世渡りです、其は可いとして、數の少い審査員のうちに、戀の仇が居て、其の前に跪くのがあつては、三浦さんの繪が選に入らう筈がない。

其ばかりぢやありません、繪のやうな夜鷹が、自ら三浦柳吉の女房だと名告つて、其の男爵から少なからぬ金子をゆすつたと言ふのを、——女に聞いて知つて居ての仕事なんです。何うです、間違つて居るかも知れないが、痛快は痛快でせう。

——三浦さんが、飲みながら私に話しました。……」

百二

「幾世さん。」

峰が呼んで見返ると、幾世は又目を俯せた。……其まで恍惚したやうに、顔を見入つて居たのである。

「自分も飲むものだから、つい飲んだ話をして。——いま緩くり、お前さんが相談があると言ふ其話を聞かうがね、——櫛は然う云ふ譯で三浦さんが家出をしたあとで寄越してくれただよ。竹の皮と紙袋の小包……眞個お話の通り(と觀星堂に、裏長屋にでも居さうです。)」

「え、序ゆゑに申しますが、實は、晝伯に、つい近頃お目に懸つたものがございますので、」
「あ、何處で。消印にもありました、いづれ深川でせうが、其は、」
と此の人にも似ず、やゝ乗掛つて、

「幾世さんも知つてるのかい。……あの人と別懇な、お前さんも一寸知つて居たつけ、神戸の社長さんね、其は非常に心配してね、私も氣に掛けて探して居るんだよ。——好い事を伺ひました、何處に居ます。」

「其でございませうが、何うしてもお住居をお聞かせに成りません。なれども、伺はなければ成らぬ仔細もございませうなり……否、何うも一々申上げると實に入組みました事で、ものの數なりませぬ私なども、一分此中に加はつて居るのでございませうが、其は差措き、晝伯の御身に就いてのみ選つて申せばでございませう、お目に掛つたのは吉兵衛と申す大工でございませうな。」

「奇遇ですな、それは三浦さんに乗せて、大川を漕いだ棟梁でせう。」

「御存じで。」

「其の事も、夜鷹の繪の前で、酔つた上の大氣焔に交つて居ました。」

「手前同然と申す。」と如海は一つ低頭をしながら、

「世間並には些と通りの悪うございませう小父が、元町邊の夜講釋でお出會申して、其から近邊

の鱈汁で御一所に飲酒をしたさうでございませう。其の時、大層御機嫌で、世間から姿をお隠しなさつた様子も一應伺ひましたさうで。但肝心伺はなければ濟まない義理のございませう御住居を承はりませんうちに、飛んだ事は摺半鐘で火事がございませうな、貴下。

棟梁が見ますると、方角が佐賀町で、こゝには大切な出入先の稻村と申す大問屋……此稻村の事は、唯今別に改めて、此の幾世さんの身に就て申さねば成りませんが。——と先づ慌てて飛出します際、深くはなけれど馴染の鱈汁ゆゑに、「女中や、俺を知つてるな、勘定は俺がするぜ、可いか。」と言つて、と申すのは、貴下の前ではあります、晝伯は實にお見上げ申すもいたはしいばかり、見すぼらしい御服装であつたさうで。

何、ほんの小火で、火事は直ぐに消えましたが、成程、右の稻村の近火ゆゑに、お店で樽からがぶ飲み、泥の如くに酔うて、棟梁が、奇特に鱈汁へ引返して、ひよろ／＼もので二階へ上らうとしますと、帳場でお連様は最早やお歸りと申す。然らば勘定と云ふと、夫は頂いた、けれども手数が掛つて困つたと云ふので、聞けば、あれから手酌で、呷りつけて、肱枕で寝て了つたのを、夜も更け迷惑につけ、揺り起いて、さて勘定と成つて、財布をお拂きなさつたが、三分の一にも足りぬ。貸せ、とおつしやる。彌が上にも迷惑なれども、斷つてお貸し申さぬとも言へぬで、御住所を、と尋ねる、と地獄だとの言葉。——近火で氣が立つて居つた最中、勘定もせ

んで、馬鹿になさるな、と極めると、實は夜鷹小屋だ、と斯やうで。——出たらめにせよ、其の小屋は、と伺ふと、場所は言へぬわで、再三の揉合ひ。果がないので、癖に成る、其筋へ突出せ、で若いものが引摺出す。」

「事實ですか。——困りましたね。」

「はい、先づ其の鱈汁の帳場で、棟梁への話が……」

百三

「……然る處、前から二階の一方の隅に、長々と飲んで居ました、紺紺の羽織に衣服で、丸肥りに肥つて、樽りとした鯨めいた書生風の漢が、其の摺つた揉んだの間へ、づんぐりと出て、お連れを、先生、と呼んで——と鱈汁で吉兵衛に申すのが三浦さんの事だ。……書生風とあればお弟子か何ぞでございませう。其が袂をチャラつかせて、足りす前に話をつけて、右に左、抱くやうにして戸外へ出た、と云ふのを、話半ばかり地震の如く、身體を揺つて、聞いて居つた棟梁が、此の丸太棒、と怒鳴つて、帳場の前へ大胡坐に成りましたとかで、其だから言はない事ではない。勘定は俺がうるると女中やに斷つたのを忘れたか。——然やうではございませうが、と鱈汁殿が申すには、親方がお連様を旦那々と言はれましたで、勘定は旦那の方から——やい！これ、旦那

那が落魄れてるから俺が達引くんた、高橋の吉兵衛がついて居たお連様を、其筋へ突出すなんぞと、怪我にも頬げたを敲かせたとあつては男が立たぬわ、さあ、火掛りから歸つて来た棟梁お杖には火の玉が二つ轉がつて、足には樋竹を伏せてるぞ。此の屋臺骨を蒲焼にしてくれうで、煙管を振廻いて、煙草盆を打撒ける。店前の騒動の處へ、小父が知合の若いものが、見舞歸りに通りかゝりまして、立たぬ男を背負つて歸つたとか聞きました、が、いや、餘計な事を——此の泥酔漢は静と寝かして置きました、」

と、如海堂は鹿爪らしく、用意のはな紙で、息繼のサイダアで濡らした卓子臺の上をぐい、と拭つて、

「承はりましただけでも、三浦さんが御窮迫の様子相分りまするやうで。しかし右の次第で、吉兵衛が御住居を伺ひ損ねたのでございませう。」

峰は軽く額を支へて聞いて居た。

「残念でしたな。私も小包を受取つたから、早速幾世さんに上げようと思つて、會社の歸途に新道へ行くと居ないから、雇女に託けて置くものやうに思へなかつたので——幾世さんへと向替へて、過般の人形のやうに、大事に袂に入れて歸りがけに、何處と云ふ的はなかつたけれども、何だか三浦さんの居さうな氣のする……木場から寺の裏道を、蝶々のやうに偶と行逢ひでもしな

いかと思つて、夢のやうな心で探し捜し歩行いてね、彼の邊の墓所の中に、大な木槿がこんもりして白く咲いた花にかくれて、お前さんに、よく肖た人が見えたので、幾世さん——」
「は。」と思はず、幽に言つて、引緊めて袖で胸を抱いたのは、乳に血が響いたのである。
「門へ廻つて、墓所へ行くと、違つた、女中を連れた、大家のらしい……餘所の美しい娘に逢つた事があるんですよ。」

さては、あの時の、峰の袂には典具帖に花を包んだ、秋草の此の櫛があつた。

「若旦那、あの、其の方がお京さんでございます。」と、幾世の言ふ聲も、最う曇る。

「お京さん?……」

「實に、御存じはございますまい。」

いや、誰も知るまい……鬼蔦の板戸を隔てた一重の彼方の、善明院の脇堂の暗い裡に、柳吉の居たりしを——家を捨て、世を棄てて、地獄に墮ちた渠が身に、慍くても尙棄てやらず、菊皿と組皿を、露の袖に隠せしは、誰がために何をする事ぞ。鶏頭の紅、萩の紫を、日影に映し、雨に溶きて、尾花の胡粉散る中に、膚瘦せて衣寒きが、脚の折れた經机に罐詰の殻を支ひながら、配所に視むる影ぞとて月形の櫛に瞳を凝らして、情の露を、女郎花よ、撫子よ、汝の花に葉に注ぎしならすや。

牛頭馬頭と奪衣婆と、蜘蛛と落葉を身の周圍に、世を忍ぶ荒寺の畫も尙ほ暗き處に、此を鬼の工と言はむか、描きし一枚の挿櫛は、畫筆を取れる渠を照らして、然も一卷の經であつた。お舟の目さへ憚つたらう、皆幾世への心づくし、たとひ魔の手に成れるにせよ、繪は世に優しき人の心の姿である。

柳吉の面影は、自然から、こゝに顯れて、電燈の霧は薄い紙の花に添ひつゝ、靉靆いた。

如海は幾世と目を合せた。

「眞個……其の日でございます、幾世さんが、あの、其の墓所で死なうとしたのでございまして。」と言ひ掛けて、幾世の睫毛の震へるのを見ると、如海は眼をしばたゝいた。

「一寸。」

如海の今の一言を聞いて、ふと遮つて目を左右に配つた、藝妓が二人と、女中が席に居たのであるから。

「お話は、此の人たちが聞いて居ても構ひませんか。」

如海が、ト顔を見ると、幾世は優しい目で答へて、

「え、。」と小聲で言つた、が、藝妓の一人は、衝と立つて、入口の方の一所に並んだ、機に應じて座を外さうと、そらさぬ心構をしたのである。

「可いな。」と如海が念を押すと、

「はい。」と幾世は手をついて、きつぱり云つた。

「ですが。」

「否々、お人拂なぞと申す、手前ども身分ではございません。藝妓衆に失禮に當りまするで。」

「恐入りますこと。」

「飛んでもない。」と二人が品よく會釋する。

「お恥かしいばかりなんでございますわ。御耳に入れて、些とも、あの差支へないのでございませぬ。」

「其に、先刻、會社から御退出の時間を待ちます間に、思ひも掛けませぬ、御酒も尙ほお料理を斯やうに下されましたで。手前、お女中に、此は何事、い、年紀をした老夫が、餘所の娘を連れて押掛けて参るさへあるに、お若い方に御馳走に成つては、第一御兩親もお有りなさうものを、親御に對して、申譯がない、と申ましたれば、餘所は知らず、此家は親旦那様からの御最良ゆゑ、若旦那の、此の家で遊ばす事は、御兩親様もよく御存じぢやに依つて、憂慮をするな、と言ふ儀

で、——今更敬服とも何とも恐れ入つたくらるでございませぬから、藝妓衆も、お身内同様。

「あの、若旦那がおやさしく、何時もおうはさなさいます、お姉妹とも。」と言掛けた、が、言が過ぎたか、とハツと臉を染めて、傍に置いた蒲團を撫でて綴糸を……

糸の色は白魚の指に、指環のあるより美しかった。

藝妓二人は言合せたやうに、ト俯向に、齊しく手を反らして、熟と指環を視た。

「……あの失禮ですが、此處に在らしつて下さいませ……何うしても矢つ張りお姉妹のやうに存じますから。」

「勿體ないことを、……ですが、貴方、眞個にお優しい、ねえ、お藤さん。」

「お千さん、嬉しいお心意氣だわね。」

藝子島田と銀杏返しと、いづれも鼻筋の通つたのが、斜に顔を見合すと、張と意氣地のある目ほど、心の露は染みやすくて、何となくほろりとした。

「では、此處においで。」

と、峰の聲さへしめやかである。

「でも、故と……」

「御遠慮を申す方が、」

「ぢやあ、おいで。遠慮でなしに。——彼室で二人で御飯をおあがり——女中さん、支度をして
おくれ。」

「さあ、何うぞ。」

「貴女……」

「はい。」

「急いで若旦那をお口説きなさいませよ。」

「まあ、私……」

「御飯は早うございますから。」

「直ぐにお邪魔に参りますよ。」

透かさぬ二人が立並んで、袂清らかに、すらりと出て行く。

——峰は仔細を聞澄ました——

且つ其の、聞きつゝ、瞬きもしなかつた玲瓏たる瞳は、幾世の身の、菊川の常住、材木小屋、善
明院の光景を、刻むが如く、眼前明かに映したのである。

瞳

百五

峰の目は氣を籠めて輝いた、が慟ましさに、幾世の身を恥ぢて背けた結綿のほつれ毛さへ正し
く視るに忍びないで、眦を伏せて如海に言つた。

「……餘りの事に、何とも言ひやうがありません。が、とに角、幾世さんの身體は、唯今は何處
に何うしてあるのですか。」

「其の事でございます。」

如海は更たまつて咳きながら、

「幕所で事件のありました晩に、取りあへず、私が厄介に成つて居ります、淨玄寺の學寮へ預か
りました。尤も住職も話せませす、ものの解つた人物で、此が會得いたしての上の事の事ゆゑ、秋の長
夜ではありまするなれども、廊下の外へは鼠一疋寄せませす、私預かつて就寝せました。

其のまゝ、隠まひ置きまして、早速私が右の稻村へ参つて、こゝで相談に掛りましたが、くど
うも申しました、群八並に猫萬が其の人外ゆゑに、何しろ新道の家へ返す譯には参らぬでござい

ますので。」

「真個です。然うですとも、」

「お京さん……其の娘御は直接のかゝり合でございますし、勝氣の事ゆゑ、一も二もなく自分の部屋へ、すぐにも引取らうと申すのなれど些と其は、考へもので。——え、貴方の前なり、幾世さんも、最う恚うした上での話。遠慮なく申せば、菊川鯨の娘も、おでん屋、蛤鍋屋の白首も、世間で見るとは一連でございますのに、……お京さんは大問屋の祕藏娘、尤も嫁入前に、——いづれ内々では埒明きませぬ表向き相手の悪い群八猫萬に對して掛合はねば成りませぬ……とする、彼奴等が何を何のやうに觸廻つて、——斯る事より自然縁組の妨げと成るまいには限らぬ、と一家中の心遣ひ。……」

いや、此に就きまして、」

と、如海は風采に些と相應はない白い手巾で額の汗を拭いて、

「お京さんは、お京さんで、私は稲村の娘だけれども、何もね、お嫁に行くために生れたのではないのです。」などと、駄々を捏ねて、私をはじめ弱らせますわ。よし又、前申す稲村の當主夫婦が、夫を承知でも、老主人を始め、大勢の縁者の中には、評判のむづかしやと云ふ叔母前もあり、苦蟲の叔父御もあり、なか／＼然やうな我儘は通せませぬで、ひぞつ娘は風の吹いた時の人れますさうで。」

おもしろい、軍は此方から逆寄せして、廓の大門を開いて向合つて戦へなぞと、相談に預つた稲村の中番頭、渾名を三略と言ふのが、灰吹を敲いて景氣をつけます……いや、何うも——店の若い衆たちが漏聞いて、場所が好いたため、さあ、今年の祭の揃いで押出せ、で、……中には内々、此の娘も群八をも知つて居るのがありましてな、野郎が何時も懷中に短刀を呑んでるだけに喧嘩は血の雨——威勢が好いなどと騒ぎますのを……其こそ——お京さんの外聞ぢや、と私が止めます、な、とんと、がらくた合戦。……お聞苦しい事で、」

と一息して苦笑して、

「で、私が出向いて、鶴兼に逢ひますと、年は取つても、其の昔の深川の羽織と聞けば、最惜しい娘を助けると誓ふに、おつと来た、と二つ返事と思ひの外、なか／＼何うして、おいそれものではございませぬ。……小猫を膝に、長煙管を支いて、ぢつと聞いて、藍微塵のおさすり半纏の

萎えた襟を合せました。……」

百六

「はて、此は些と見當が違つたやうだが、老主婦引受けてはくれんのかと、憂慮うて返事を待ちますと——お前さん方……と鶴兼が切出しましたは……私どもの事で——菊川の娘のお世話をなさらうと言ふには、少からぬお物入だが、其邊はお含みか、と薄目を開いて、額で私の顔を見ます。此にぎよつとして、乗出して居つた私の懐中はベコンと引込みましたなれども、其處は佐賀町のお京さんが、小さな巾着に入れた黄金の鍵を持つて控へて居ますので、承知でえす、何か此許へあの娘をお頼み申す、食雑用などの事か、と訊きますと、鶴兼は莞爾と笑うて、あの食の細い娘の雑用ぐらゐるなら、餘所外へ預けて私が出します、と長羅字をトンと置いて、自分に力が無いから、此までとても、……大門内外のつい目の前で、あの娘の苦難を朝に晩に見聞しながら、針の山から血の池を覗くやうな切ない思をして居ました。口を利くより金子を出せで、金子でなくては群八等に何一つ話は出来ません。お世話をなさるなら、乗切つて、金子を積んで、群八と親娘の手を切らして、すつぱり、あの娘を、他人にしてお遣んなさいまし。些と微との繕ひ仕事では、却つて肩裾が冷えませう。——一寸店前まで遊びに来て、あの優しい聲で「お上さん。」と言

はれると、死んだ遊女が思出されて、歸したくないくらゐ。……引取つて世話をするのは、願つてもお引受けしたい處。あ、甲斐性が有るなら、群八と他人にして、私の娘にして、古屋臺でも鶴兼の暖簾を譲つて、足腰の利くうちに、豫ての望み、竹杖に縋つても、靈地靈山國々の順禮がしたうございます。……まあ、突詰めて死なうとまでしましたのかい、無理はない、可哀相に、と果はぼろ／＼と涙を流して、半纏の袖で顔を押しへる始末。」

如海は更めて座を正して、
「いや、何うも、私まで、老の繰言めきました。が老主婦の申す條理は明白。なまじ世話は却つて幾世さんに苦勞を増させる、親娘の縁を切つて他人に成れ、他人にせい、と申すので。尤も、當方とても、出来れば其は望む處。屹と其の望は貫かうと云ふ肚を合せました上、……取りあへず鶴兼へ預ける事に成りまして、幾世さんは一先づ引手茶屋へ參つたのでございます。」

「然うすると、」
峰は掌で卓子臺を靜に壓へて、談話を緊めた。

「幾世さんは、今其の引手茶屋に居るのですね。」
「如何にも。」
「今日は其家から來たのですね。」

「如何にも。」

「今夜歸るのも鶴兼ですね。」

「如何にも。」

「幾世さんの身體は、其様で安心が出来るのですか。」

「は？」と、怯かされた如く、叱られた如く、驚いた如く、如海は問返す如く口を開けた。

「お話の様子で分りました、鶴兼の老主婦と言ふのは信用が出来ますが、新道と洲崎では、其の不埒な奴等と、幾世さんと顔を突合せて居るのですが。……」

「成程。」と、グツと息を引いて合點んで、

「姿を隠して置かばこそ、明に群八の方へ申出でて、掛合つて居りますので。且は新道と廓とは、其の道々で、組合なり、規約なり、親方とか、子分とか、持々の繩張が違ひますとか申す事で、彼の毒を以て毒を何とかで、少々無理がありましても、一旦鶴兼が引受けました上は、彼奴等如何ばかり姦悪でも陰で亂暴は働けません。」

「分りました。」

と、幾世を見向いて、峰は目も晴やかに頷いたが、

「掛合は何うになりました。」

「え、其の事でございませぬ、表看板に稻村を持出しましては、あゝ云ふ輩が又如何やうな無理難題を申出るやも計られませぬゆゑ、群八に向ひます當の對手は大道賣卜の某で、……此なら罷間違つて、踏まれようが蹴られようが、然して損益の無い木偶人でございませぬので。」

掛合人も然るべき人物を選みまするより、却て當つて碎けた方が纏まりませうで、鶴兼が差略で、廓内の先づ顔役口利と云つた男を見立てまして、方角も暗剣殺から、先勝日に差向けますと、(可し、親娘の縁を切らう。)と思ひの外、話は早分解がいたしましてな。」

「結構でした。」

「其處で金子の事でございませぬ。」と一寸乾いたかして唇を沾す、如海が未だ其のコップを引かないのに、

「先生。」と峰が聲を掛けた。

「や、」と如海は、馴れた己の稱號ながら、此の人の口から呼ばれようとは殆ど思掛けなかつたので、狼狽へた目色をする。

「……其の金子は私に出させて下さるんでせうね。」

「えゝ！」

「或程度まででしたら、即時にお受合をしようと思ひます。が存外な金高だと、一度、母に相談をしてからでないと、お約束は出来ません。無論、頼めば私の言ふ事を肯いてくれませうと思ひますが、自分だけでは、其れですと計ひ兼ねます。しかし大抵間違はありませぬ。」とすつきりと言つた。

「……………」如海が黙つて、大息を吐くと、

「まあ、」とばかりで、幾世は何故か、衝と目に涙を湛へたのである。

「存じも寄りませぬ事を。」

如海は力を籠めた聲で、

「我折れました、お潔い。……が、神以つて然やうな儀を御相談に上つたのではございませぬ。」

「お情なうございませぬわ。」

其様なことを御許に、ねだる妾と思召すか、とて幾世は涙せきあへぬ。其の姿を下目で視て、

如海は又開直つて、

「何と御賢慮にもございませう。貴下に然やうな御迷惑を掛けまして可ものでございませうか。」

峰はしめやかな聲ながら、爽に、

「幾世さんを彼等から自由にするのに、第一先に立つ金子の事を御相談を受けるのを、私は決して迷惑とは思ひませぬ。が、假に迷惑としてもです——迷惑ではないのですよ、誤解をなさいませぬやうに——で、假に迷惑としてもです、迷惑を掛けられるのを厭ふやうぢやあ友だちには成りませぬ。知己の效も何も無いぢやありませんか。御相談を受けられますか迷惑を厭つて居て——相談をしたい、承はりませうと言つた上は、迷惑結構です、立派に迷惑をさして下さい、屹と迷惑をして見せますから。」

峰の音調のやゝ熱するにつれて、如海が膝に手を支いた抜衣紋の肩は、可笑しく戦き、太陽に向へる露の身の、幾世の影は美しく濃きが、猶且つ消えさうであつた。

「然も迷惑ではないのです。較べて見れば、私が過般、翡翠を幾世さんに預けた方が、どんなにお前さんに迷惑だつたか知れやしない。」

幾世の、忍び泣く音は、打顫へて、

「否、……否、……若旦那、私は嬉しうございました。」

「それ、見たが可い。」と調子が解けて、

「私も嬉しいんだ……迷惑するのが——そして先生、右に左、先方の申出は幾千金なんです。」

如海は手巾で鼻を拭いて、

「三千五百圓と申居ります。」

はッと幾世が身を切めて、

「私は死にたうございますわ。」

「馬鹿な事を。」

あの、嬉しさうな峰の毗よ。

百八

「群八申すには、娘の身を引當に借りのある猫萬の借金を返した上、鮭屋の店には、相當な美色を雇入れぬ事には商賣が成立たぬと申すので。」

「何しろ其だけで、唯今の額で承知しますのですか。」

「然れば満足らしいございます。尙申すには其の餘金で、一奮發を致して、演劇の一座を組織する。恰も夜光の珠の如き一人の美婦を發見したから、此を女優に仕立てて満都の人氣をなどと、掛合人の顔役に申して、乘氣に成つて居ますさうで。」

「勝手におさせなさい。」

と峰は目で笑つて、盃を持つと、幾世が銚子を取つた、が、猶豫ふのを、峰が其の盃を寄せる

と、

「差出ますでせうか知ら、皆様に、」と言ひながら、少し震へつ、伸上るやうにして、肩を落して、嫋娜に袖で注ぐ……菊川名代の姉さんも、ありのまゝなる處女である。

「お酌はお前さんに限る——久しぶりだ……(と一口して)……先生も召あがれ。で、心配をしないで下さい。其だけの事なら、母にねだらないでも、私の蝦蟆口で丁と出来ます。……小切手だと直ぐにも間に合ふのですが、今其の持合せがありません。明日、會社、」

と言掛けて、一寸目で仰いで、打案じ、

「それよりか、御足勞ですが、××銀行——道順が可いから支店の方へ——食事の時間に隙があります。私が参りますから来て下さい。其時調へて置いて差上げますから。」

幾世は唯うつとりと、膝にトンと銚子を置く時、……

「少時、少時、何うぞ、少時。」

如海は續けざまに叩頭をして、

「涼しいお心持は、愚昧な私にも分りました。思召のほどは心魂に徹しました。なれども、眞個金子の儀に就きましては、貴方へ御迷惑は懸けません。」

「ぢやあ誰方がお調へなさるんです。」

「其は、前刻より申しました佐賀町の。」

「あゝ、稲村さん。」

「と申すうちにも、お京さんが手函から出まするので。」

「不可ません。」

峰は頭を掉つて、

「お互に、男が幾世さんの事に與つて居ながら、其中の女に金子を出させると言ふ法はないのです。」

「雖然、命を助けましても、其の命を助けますのに、何より肝要な金子をば、そつくり貴方にお背負はし申しては、一向心が通りませんので。」

「お京さんですか、其の令嬢は、毒を飲まうとする處を止めて下すつたんです。命は其で助かりました。金子は唯跡始末だけの事で、假に手柄とすれば、私の方は分が悪い、陣笠の方です。彼方の心は通つて居ります。」

「其處を重ねて申しますが、今日、御相談に上りますに就けて、……必ず金子の事で貴方に御心配を掛けないやうに、と堅くお京さんから念を推されて参つたので。お京さんは繰返して其の事をな。——あゝ、目は高い、過般、翡翠に翡翠を添へて、此の娘にお預けに成つたよしなど傳へ聞

いて、貴方のお心がよく、お京さんには通じたものと見えまして、何度も金子の事を、なあ、幾世さん。」

「はい。」

「其を、何と、阿容々々とお受けして、貴方に御出金おさせ申しては、私などは何でもない、お京さんの顔が立ちますまい。」

「先生、先生。」

「は、は。」

「峰が申すんです。」

と屹と言つた……

「女は、そんな事で、顔を立てないでも構ひません。」

「何うしたら可うございませうねえ。」

「泣くな、泣くなら嬉泣に大きく泣け。」と潤と目を睜いたが、如海は衝と退つて手をついた。

「幾世に代つて、難有くお受けをいたす……三千五百金、正に貴方より……」

少時睦じい談話が有つた。――

「幾世さん、度々お酌を難有う。」と峰は更めて盃を取つて、

「少し酔はうと思ふんですがね、――金子の事でおいでに成つたのでないとすると、私に御相談

と言ふのは、先生、何う言ふ事です。其を伺つてからでないと、酔つては不可いと思ひますから。」

「否、お酔ひに成りまして、お横にお成りなさいましても一向差支へございませんで、唯一寸お聲を下されば其で可いのでございます。」

と如海は謎を掛けて、一言解けば可さうな事を言ふ。

「何う云ふ事です？」

はじめから難題ではなく、迷惑は掛けない、と斷つて居たから、此は何も仔細の無い事であらうが、當の幾世と附添の道人と、二人揃つて来た、聊か分量のある謎で有るから、解けば面白からうと、半ば好奇の、罪の無い目を睜つて待つ。

ト此時如海は、抜けた衣紋を搔合せて、

「實に……貴方が餘りの御厚情に、老樹も春に逢ひました如く、ぼつと霞に包まれて、肝心な事をば夢のやうに忘れようとしたしました。――時に、唯今の右の金額で、群八の方は承知をします。お京さんが其の金子を出さう、就ては後日のため、親と娘の縁切の趣を、群八から一

札……何か三百代言の取引めいた、可厭な事で、お聞苦しうはございませうが。」

「然うではありません。……愈々群八に金子をお渡しに成る時に、貴方の方に其御用意がなかつたら、私から御注意をしようと思ひました。相手が相手ですから、正式に印紙を貼らせなければ不可ません、氣障な事ぢやありません。其は私の方でも主張します、立派に證書をお取りなさい。」

「それ、貴方さへ然うおつしやる。」と如海は幾世を且つ視遣つて、

「掛合人も其處に脱落はありません。……處で御存じの内端なれども、此の娘の母親が、妻として、此の娘が娘として、群八の手に表向き籍が入つて居りますので。」

「あ、其では金子は取つて、證書は寄越すが、籍を出すとか、出さないとか、其處へこたはりを着けるのですか。……駄目ですよ、丁と籍を抜かないでは。……貪る金子なら、額をもつと出してお掛合ひなさるが可い。」と、すつきりとしたものである。

「否、然やうの儀ではございませぬ。……先方に聊か故障は無いのでございませぬが、扱て、事を取極めると成りますと、此のな、此の娘の方に故障があるのでございませぬ。」

「あれ、故障ではございませぬ。」と道瀬なげに、然し、稍々急いで幾世が言つた。

「お、故障ではない、此は私が言ひやうが悪かつた。迷ぢや、迷ぢやて。……貴方、此の娘に

迷が有るのでございます。」

峰は解けない色をした。

「幾世さんが迷ふとは？」

「縁談吉凶、身上判断、若い娘の心の迷ひ、此を聞くのは職業柄、こんな事でも役に立ちませいで、外に用の無い人間ではございますが、如何とも其の、私では埒明きません、お京さんでも捌けませず、鶴兼でも極りが着きませぬ儀がございまして、それで貴方のお悟しを伺ひに出ましたのでございしまするが……」

「待つて下さい——生命の恩のお京さん、親身のやうな其の鶴兼、而して貴下にも解決の着かない事……其が私で解けるんですか。」

「唯御一言にて……善悪ともに——此の娘の迷が晴れますので。」

「幾世さん。」

「はい。」

「確に……私で。」

「え、若旦那が可いとさへおつしやつて下さいますれば、あの、何にも思ふ事はないのでございします。」

「責任を負つて返事をしませう。」

峰は態度も決然として言つた。

「何です。」

「お聲の下に申します——此の世間に……娘として、親に縁を切つても差支へないものか……」

「と……幾世が迷つて申しますので……」

百十

「……………」

颯と野分の音がして、日本橋なる萩の家の、奥の小庭の石燈籠に、色の黄なる蝶の如き、一枚の木の葉が散つた。

掛地はなしに、床の壁の中央に掛けた番形の籠に活けた、蓼と薊と千鳥刈萱と、穂と花と皆白うして、葉のうら枯つ、染葉したのが、幻に靡く氣勢して、日の未だ暮れぬ夕風の、疊に波が立つやうに、秋の風は音信れたのである。

峰は肅然として口を緘ちた。

「私は固より、先方の返答をこそ憂慮しましたけれども、此の娘に、否應が有らうとは弗に存せぬ。で、愈事を極めまする時に、偶と唯今の儀を問はれまして、娘として、親に縁を切つて差支へなからうかに、大きに差支へたのでございまして……扱て……」

如海は卓子臺の端ながら、蒲團をたつて、膝を進めて、

「自分了簡には、決して不都合は有るまい、と思ふなれども、鬼畜に齊しき人外とは申す條、義理にも親とあるものを、子が其の縁を切つて道が立たぬ、立つか、と申す心で訊かれたでは、町の大事、家の大事、一身の大事、うかつに答は成り兼ねますので、守本尊の姫神とも申すべき、お京さんの考へを聞くとせう、と私が中に立ちますと、お京さんは一も二もない、縁を切らないで何うしよう、と申します。が、其の姉、其の姉の夫をはじめ、此の事に預りました稲村の人たちは、いや、指圖は出来ぬ。此は幾世の思ふ心に任せるより他はない。と恚やうな意見。——又鶴兼は鶴兼で何れとも思ひ通りに……しかし縁を切らないでは、たとひ誰の手が何う庇はうとも、幾世の身は破滅だ、と言ひますので。即ち當人は、と申すと、其に此の娘が迷ふのでございまして、——では私は、と此の大道易者の判断を問はれます、が、先づ假に私をはじめ、鶴兼、稲村の人々と恚う揃つて残らず意見が合致したら、それで心配は無いか、と申すと、此の娘が言ふには、人の親の娘として、何うも決心が成り兼ねる。——や、それでは縁を切らないで、舊通りと

して、御身は何うなる、と言へば、死ぬよりほかはないと言ひます。分別に餘りました處で、ハタと手を拍つて考へつきましたは、淨玄寺の住職、私、友としては勿體ない、人も存じた高德の大智識の金欄ゆゑ、此の意見ならば安心か、と念を推しました時に、此の娘が申すは、いや、縁を切るにせよ、切らぬにせよ、此の事ばかりはお寺の御前の教へでも暗中に迷ひます。……唯、日本にお一方、貴方、——貴方でございます。——若旦那の思召さへ伺へば、安心して覺悟が出来る、と申すので、お京さん、鶴兼もろとも、私が代理として推して出ましたは右の次第で……切れ、と言、お言葉を願ひたいのでございます。」と面や、赤うなるまで、汗を漲らしつ、言つたのである。

峰の血は面に白く輝いた。

「難題です。」

沈んだ聲は、幾世の兩の袖に響いた。

「此は難題だ。」

半ば呟くのが、幾世の胸に透る。

「實際、意外な難題です。」

沈んだ此聲は、又衝と幾世の血に沁みて、臉のあたりが蒼澄んだ。

如海のばちくと瞬きするのがベソを搔いて泣くやうである。

「幾世さん。」

「は、はい。」

「待つて下さい、——先生。」

「はあ。」

「貴方は何うお考へに成るのですか、……私も人の子なんです。」

言語の威に、如海は思はず頭を垂れつゝ、

「……人の子ぞ、とおつしやる、あゝ、難有い思召、其のお言葉につけましても、何とも申上げやうはございません。又申した處で、私では此の娘に安心が成らぬのでございます。」

「幾世さん、では私が言へば、親娘の縁を切るんですか。」

「はい、すぐに。」と涼しく言つた。

「其が人間の道に外れても。」

「えゝ、罰が當りましても。」

百十一

幾世が神佛に誓つてまで、あこがれ求めた是非善悪の一喝に對して、峰が決斷に淀みつゝ、月の蝕せんとするが如く、明かなる額際に衝と影の翳すを視て、

「もし、此は、……然やうにお心を苦めては成りませぬ。群八事は近渴をいたして、金子の授受を急ぎますなれども、五日や三日、此の娘の身に指一本指す事ではございませぬで——唯今すぐに御明答を仰ぎませいでも、兩三日中に、かさねて御意を得ます、其の時までにお考へ置きを願うては如何なものでございませうか。」

峰尚ほ無言なりしかば、

「喃、幾世さん。」

「えゝ、私は最う。」

「さ、お禮を申して、」

と、催促に、蒲團を這つて、何にも言はず、肩を落して幾世は手を支く。

「厚き御待遇に預りまして、何とも御禮の申上げやうもございませぬ。いつれ後日、——然らば。」

「若旦那。」

「少時。」

椋鳥と金絲雀と、二羽たつ鳥を壓ゆるやうに、峰は肱を擧げて確と留めた。

「即座に、出来兼ます此返事が、三日の後、十日の後、一月、一年、十年の後なら、明に出来得るとお思ひですか。道ならない對手にせよ——子として親の縁を切る。——天地神明國家に對して、聊かも疾しい處なく、此の是非を決斷するのは、私は百年の難題であらうと思ふ、問はれて返事に苦むのは、唯今も、千年の後も或は同じかも知れません——後日も今日も同じ事なら、即時にお返事をしようと思つて、私は今、足りない力で、答の金銀の的を射るのに、腕に相應はない強い弓を、胸に満月の如く引絞つて居るのです。」

小庭に、かつ散り、かつ散りつゝ、さら／＼と舞ふ落葉を瞻めて、峰の姿は颯爽としたが、ハタと紫檀に拳を落して、はじめて硬直なる胸を折つた。

「撓切れない。——お恥かしいが、落した矢は地を這ひました。執方の的へも當りません、……お返事は出来兼ねます。」

と意氣激しく言葉てた。如海が狼狽へ、幾世が悲しむのを視ると、やゝ調子を穩かに、

「私は此まで、もの心を覺えてから、自分の意志で自分の事に、決斷の出来ない事はないのです。しかし、もし是非曲直の分別に迷つて、何うにも處置の取れない場合には、書物にも聞かず、學校の先生にも聞かず、日月にも問はず、星にも卜はないで、父に聞き、母に問はうと思ふのです。けれども幾世さんの此の事だけは、……家に歸つて父母に聞いて、お返事をするわけに

は行きません。——此だけのお返事が出来ないぢやあ、私は馬鹿です、嬰兒だ。」

と酒には見せぬ、色の紅さを、颯と唸に潮したのである。

「實以て天下の大器量人、大果報人でおいでなさるゝ。如斯御兩親、御健在にて、貴方が、如斯思召は……」

如海道人、以ての外肘を張つて、

「就いて、此は單に私が心得のために伺ひますが、貴方の御兩親が、もし其の貴方の御兩親でなうて、父のみ片親の然も養父にいたいて、貴方の御身上が、今の幾世だつたらば、……親、即ち群八に對して、何う處置をお取りに成りまするか。」

峰は眉を展いて言下に應じた。

「縁を切ります。——絶縁するんです。」

「子として。」

「勿論。」

「はあ、金子で。」

「金子で背かなければ逃亡だ、遁げるんです。」

「執念く追へば、」

「隠れます。」

「見出して迫りましたら、」

「抵抗します。」

「對手も暴力を用ひますと。」

「殺して了ひます。」

と峰は自若として言つた。

百十二

如海の方が却つて大息を吐きながら、

「もし、假に此を、嫁、姑、嫁、舅といたしたら如何でございますか。世間の習慣は、此も親子でございませうか。」

「同じ事です、舅、姑が嫁に對する、或意味、或る手段に因つて、群八が幾世さんに對すると同様な場合だつたら、私が其の嫁ならば絶縁します、逃亡する、隠れます。抵抗します、殺すんです。……一體、逃げるの、隠れるの、縁を切るのなんざ面倒なんです。——養父として娘に操を迫つたり、色を賣らせたり、抵當に金子を借りたり、木小屋で帯を解いて胸を見たりする奴、……」

……嫁を苛める姑なんぞは、世の中に生きて居る必要の無いものです——初端から斬ツ了ふか、踏殺す方が可んですよ。」

「あ、難有い。」と何故か、如海はハラ／＼と落涙した。

「幾世さん、あれを聞いたか。——あ、難有い。(と今度は獨言して)……しますれば、殺すから思つて、金子で縁を切るなぞは天上界、何とぞ其の趣を……一言、お口づから此の娘に、御沙汰を……」

峰は冷静に頭を掉つた。

「自分は、自分の意志だけで、私なら決行します、が、人に教へる事ではありません、教へないのではない、教へられないのです。」

「尙一つ其處の處を、……幾世さん、よくお伺ひ申すが可い。……いや、一寸御免を。」

禿頭が夕照に白く映つて、すぼりと襖を抜けて出たのは、顔でも洗ひに行つたらしい。

少時、沈黙は、此の黄昏の底に、夢に深き谷へ落ちて行くやうに續いた。

燦然と電燈が點くと、其處に、首垂れた幾世の白い頸と、重い島田が見えた。小庭の石燈籠に、より／＼黄に青が添ひ、紅を重ねて落ちかゝりつゝ、暗中に消えた木の葉の面影は、こゝに袖袂を彩つて、お京の情も色に出た。

「幾世さん。」

「はい。」

「一杯飲まないか。」

「あのお酌をいたしませう。」

「いや、酌どころでは無かつたつけ。」

峰が電鈴を壓して、女中を呼んで、

「二人は何うしたい。」

「はあ、今日は大阪式に食べるんだつて、先刻から、——もう貴方、「げんなりや。」なんて帯を抑へて、斜違になつて手を支いたりなんかして……」

「強のものです。」と喟然としたが、

「連の方は、」

「は、」

「此方のお連は。」

「は、」と解せない顔をする。

「大分長いね、は、かりかい。」

「否、最うお歸りに成りましてございませうが。」と、一向な顔である。

「何、お歸りだ。——可し。」と頷いて女中を立てて、

「怪しからんな。」と、云ひつゝ、苦笑した。

怪しからんものの所爲を見よ。若旦那には挨拶の濟んだ顔色で、

「然らば。」などと女中たちに送られて出ると、出しなに日和下駄をガタつかせたのは疵持足で、

腰を擡立てて格子を抜けたが、町暗く燈の新しきに、ペコボン帽子を被りもせず脇挟んで、唯、

遁状に撓腰で背を扁く振向いて、待合を見ること恰も城の如く、「話合は二人に限るぞく。」と咳

きながら、人脚を曲りつ畝りつ、すたく落武者の體して、急足にひよいと出たは、中將湯の角

ト向うに春陽堂を視て、あの四丁目の電車通りを、これから、几帳面に左側を縫つたが、丸善の

前に行くつと、膠で着いて、ひたと留つて、階上を仰いで暗然とした、が其の眼は明かに、眉は濃

かであつた。あゝ絶えて久しや、少くも月毎週のはじめ毎には、世につれて此處に世界の新知識

を涉獵りしを、——子ゆゑの暗に影を潜めて、露店の星に易を賣る。

這個觀星堂を誰とかする。母なき一人の愛娘の、芳紀少く二十にして戀人の許に嫁ぎながら、

不倫なる男を血に斬つて、獄舎の鐵窓に蒼く瘦せしより、世を儚み、世を憤り、世を呪ふ、伴狂

を痴愚に替へて、淨玄寺に隱遁した、倫理學者にして博士たる大澤時觀は渠ぞかし。

少時すると、帽子をすくめて、深川行の電車へきよとく。

百十三

「今言つた事はね、私一人の考慮ですよ。」

峰は居直つて、嚴然として言つた。

「親に對して取るべき處置を、決してお前さんに指圖した譯では無いんだから。」

「はい、若旦那のお心は、よく解りましてございます。」

「で、何うするんだい、身の振方は？」

「貴方のお口から、子が親の縁を切つても構はない、とおつしやつて下さいませなければ、矢張り、あの、其は道なりません事だと存じますから、義理の父とは舊通り親娘で居ようと、私は覺悟をいたしました。」と幾世は蒼澄んだ顔して言つた。

「覺悟？」と其の色を疑と視て、

「お待ち、……覺悟と言ふと、群八と縁を切らずに居て、此までのやうに、苦められ虐げられようと云ふのかい。」

「え、因縁事と斷念めますから。」

「斷念めて、お前さん、其の鬼の苔を身に受けて、能く堪へ忍んで行かれるかい。」

「殺されますれば、それまででございます。」と、袂と聲を引絞つた悲しい聲。

「お京さんをはじめ、觀星堂の先生も、鶴兼も誰も皆、お前さんが縁を切るのを不都合とは思はないのに、何を憚つて、誰に遠慮をするんだらうな。」と半ば歎息したのである。

「あの、嬉しく、日に照されて消えますのも、悲しく風に散りますのも、口惜しくつてくく人に踏まれて落ちますのも、露の生命と斷念めますけど、道ならぬことをいたしましたしては、神様、佛様、目に見えませんが、御罰が可恐うございますもの。生命の苦難は同じでも、未來は助かりたう存じますわ。」ときつぱり言つたが可哀に聞えた。

峰の胸はきりりと締つた。

「幾世さん、最う其では、迂遠く、理非曲直を論じて居る場合でない。私が「可し。」と言へば、もしかですよ、もし私が「可し。」と言へば、其神佛が可恐くはないのかい。」

「え、私は貴方を神様とも佛様とも思つて居ります。若旦那のお言葉が直ぐに神様、佛様の……」

「お待ち、些とは人間らしくはしたいと思ふが、神佛には、些と私は、實は縁が遠過ぎるんだぜ。」
「それでも、私は、あの、然う思ひますのでございますもの。」

「しかし、私の言ふことが、神佛の心に違つて、お前さん、地獄へ落ちたら何うするんだ。」

「責苦も何とも思ひません、……地獄からでも一生懸命に成りますれば、貴方のお顔が見えますから。鬼でも蛇でも見返します。——心に張が有りますもの！辛いとも苦しいとも屹と私は思ひません。」

峰は胸を伏せて又瞻つて、

「同時に、私が「不可い。」と言へば其のまゝ、群八と親子で居て、苦難を続けようと言ふんだね。」

「はい。」

「夜は寝た上を歩かれるんだ。短刀で頬邊を突つかれるんだ。猫萬の疣に取着かれるんだ、木小屋で帯を解かれるんだ、俎に乗せられるんだ、鋸の下に寝かされるんだ、而して杖で打たれるんだ。」

幾世の顛へながら、濃い睫毛を滴る露に頷くのを見て、峰は未だ嘗て人の知らない、其の秀でたる眉を苦しげに寄せたのである。

「私は、それでも、子として親の縁を切るのが人間の道か、と問はれて、可し、と答へる勇氣は無い。しかし、断じてお前さんを今のまゝで置きたかない、が、縁を切れ、とは言ひ得ないんだ。——可厭だな、世間は、面倒だ。」

「若旦那」

幾世は、峰の思ひ餘つた體を視て、身をあせりつゝ言つた。

「後生でございます、……後生ですから、私をもつとお傍へ寄せて、貴方のお目を、……不躰ですけど、よくお見せなすつて下さいまし。」

「何、

と思はず、手を其の臉に翳して、

「目を……何うするんだ。」

百十四

島田の切の紫に、微に紅さすばかり、幾世の心は色に出で、

「御両親様の前、世間の前、お友達の前もございますし、勿體ない事ですけど、私の事もお考へ遊ばして、善いとも、悪いとも、口ではおつしやつて下さいませぬ。でも、お心では、どつちが善いか、縁を切つても構はないか、屹と極めて在らつしやいます。あの、其のお胸を、私や拜みたいのでございますよ。」

瞳の色冴え、意氣壯に、

「それが、目を見れば分るのかい。」

「え、／＼……もう、過日、辨天様の御堂の前の星あかりに、若旦那が私に、——水兵さんのお伽をしろつておっしゃつて、……情なくつて、泣きました時、熟と顔を御覽なすつて、其のお疑ひを晴らして下さいました。お清しいのを存じて居ります。屹とお心は分ります。」

峰は二つ三つ疊に膝を刻んで言つた。

「おいで——……いや、私が其方へ寄らう。」

と生命も投げ、髪も解け、帯も亂る、縋りやう、幾世の羽織に波打ちつ、

「あ、若旦那。」

「お幾さん。——分つたか。」

睜りに睜つて衝と閉ぢた峰の瞳は幾世の心を立處に開いたのである。

「貴方の、お情で、私は、潔う、群八と親娘の縁を……」

「切れるか。」

「はい。」

「切るんだな。」

「え、今……唯今から、生れぬ先より、もつと他人でございませう。……でも、薄情な婦たとお

蔑みなさいましては、情なうございませうよ。」と峰の膝に崩折れる。

其の肩に手を掛けて、

「可し、立派に親娘の縁を切れ！ もし言ふ事を背かなかつたら、抵抗へ、戦へ、ちよつ投つたへ、構ふもんか。——そんな不都合な人外なら、産の親でも構やしない。萬一それが道に違つて、神佛、人間、此の世間、鬼でも、魔でも祟をするなら、私が、峰が、身代に引受ける。」と半ば、あらぬ方の小庭の空、宵闇の天に誓つて言つた。

「安心おし、お幾さん。」と、縋る胸には堅さうな、正しき膝を柔かに、はじめて崩すと、落入るばかりに尚ほ縋る、幾世の指を密と壓へて、

「申戯ぢやない。」

と、からりとした言語で、

「そんなに私を信ずると、お幾さん。」

「……………」

「もしか、口説いたら何うすんだ。」

「……………」

「や、喫驚するな。」と背を擦る。唯、幾世は、有るか、無きかの聲で、

「私は死んで了ひます。」

「死ぬ。……これ、驚いた、そんなに私が。」

「まあ、勿體ない。おなぶりだとは存じて居ますが、それでも、あの大抵お察し下さいまし、若旦那。……ですけど私、こんな生命は差上げましても、お傍には参られませんか。」

「可厭かい。」

「勘忍して下さいまし、亡くなりました、母の遺言がございます。」

「あゝ、其の遊女の……何と？」

「思ひに思つて、気が狂つて、悶えて死にます臨終の際まで、「幾ちゃん、私の身に成りかはつて、たとへ彼方に奥様がお有りでも、御飯炊のお手傳、濯ぎ洗濯してなりと、三浦さんのお傍に居て、私の思ひを晴しておくれ。……行く處へは行きたくない。柳さんの根岸へ行きたい。……」

あの言ひ死にに亡くなりました。義理でも道でも世間でも無いのです。私は死んだ遊女の、其のお心が最惜くつて——貴方、貴方、若旦那……私は最う。」

身を揉む鬘のおくれ毛の、ひやくと膝に掛るのを、峰は無意識に搔撫でたが、ふと三浦の畫の挿櫛を取つて、靜に一筋、二筋、三筋、數ふるばかり其の櫛の齒を入れつゝ聞いて、黙つて幾世の前髪に——露は玉の如く輝いたのである。

「……何にも知らずに……先刻、其の人の落魄れて居る陰口を利いた、私は恥かしいよ。」

「否、(男の御方が……女冥利に……もしお二方ある時は、落魄れた人の方へ、必ず其の身を差上げるものだよ、)と母が何時も申しました。」

棧橋

百十五

高輪なる峰の邸の、町に面した門を入ると、玉川の石を洗つて敷いた、波形に畝り畝つた廣い坂を、凡そ七曲り上つた處が、はじめて式臺に成る。其のあたり、常盤樹に龍田姫の都染、薄錦葉を交へた中に玉なす蕞が聳えて立つ。上る土手の芝生には、躑躅を刈り、萩を植ゑ、見下す岩組の谷がかりには、梅櫻桃を交へて、根笹の下を潺々たる水の響は、園生の池の、一度細瀧となつて、坂を繞つて流るのである。が音も床しく露呈ならず、樹の枝靜に差交し、鴨呼び、雲應へ、海見えて、此處を通ふものは、恰も箱根、湯河原の岨道を行く思がある。

小春日の午後の日を、霞むやうに暖かに身に受けながら、薄ら寒さうに唯一人、印半纏の袖悄乎と腕組みして、龜覗きの古手拭の頬被は然る事なれど、腹掛股引の威勢は無く、汚れた袴の

尻端折の、足の白い男が、駕籠屋の俵の勘當されて、息杖を取上げられの、途に惑つたと云ふ體で、ものの山路の、三合めあたりの帷縁に、寂しく水の音を聞きながら、品川の海の香を鼻で嗅いで嚏が出さうに立つて居る。

折から下の町々の豆腐屋の聲もせず、處々の煙突の煙も幽に、唯赤蜻蛉の飛ぶ事よ。

其處へ、坂の上から、山の腹の風穴に吹飛ばされた彌次郎兵衛、ふら／＼と奴胤の面喰つた體で、ひよいと萩の上へ出たかと思ふと、下り狀の坂の畝りにかくれ、又出端へ飛出すのが、梅の梢に引撥まるが如くに見えつゝ、一散に驅下りた、鼻の獅嚙んで頤の伸びた、酒焼のした親仁は、何と、途方もない處へ高橋の吉兵衛大工が。……

一舞舞つて来て、後を振り返りながら、ト其處にゐんだ男を寄り狀に視て、近々と、

「やあ、敗軍々々、赤坂の城へ拔驅けに、人見入道討死だ。」と澁い顔する、手には麻裏を引掴み、何を狼狽へたやら、紺足袋の跣足になつた、が、奇恃な事に、今日は折目の附いた唐棧の羽織を着て居る。

「何うしたい、小父さん。」と頼被の中で言つた聲は、あゝ、聞いたやうな、三浦柳吉。

「何うにも、お前さん、からツきし世界が違つて、足が舞臺に着かねえや。」と拂いて穿きつゝ、

「私もね、河童と割床で、お前さん、河岸で降りられてばかり居るんぢやあねえ。偶にや、方々のお邸へ仕事に行く事もあるんだけど、其時あ道具箱を引背負つて、背戸か臺所口から出入りするんだ。手ぶらで大手正面の木戸へ向ふのは馴れて居ねえし、……此の何だね、櫓へ押上つて籠を叩いて、鎌倉鍛冶の鍛へたる鍔少々とか何とか言ふのは、射向きの袖を翳して掛りいゝが、静まり返つて音もしねえ城へ來ると、薄氣味が悪いから、其處等要害を窺つて、米で馬を洗つて下婢どのでも見つけたら、様子を聞かうと思ふんだが、樹の下もお前さん、綺麗に掃いて、玄關前にや木の葉もねえ、物音一つしねえから、取掛り場所が無くつて、仕方なしに大式臺へ向つたんだがね、磨いたやうな石疊で、何分土足ぢや氣が怯けて、其處で跣足さ、お前さん。」

と屈んで、手拭で爪先の塵を拂ひながら、

「一段上り二段上り三段上つて櫻を見ればだ、……お前さん、中風症の能役者が道成寺の石壇を踏むやうに、よろりやよろりと上つて、西洋館の扉へ立つて、此處は臺辭をトツチねえ。頼まう、と一つ遣つて、魂を落着けて、此れから本式に（頼まう——）と思ふ途端に、最うお前さん、其の扉がスツと内から開いて、床も天井も燦と輝いたと思ふと、折目正しく袴を穿いた、白い眉毛の房りした御家老が恭しく（いづれから）……申、申戲ぢやあねえ、深川からひらり／＼と、風吹烏で飛んで來たとも言へないし、此の風體だし、……氣が着くと跣足だし、ハツと面くらつた處

へ、横合の薄萌黄の窓掛の掛つた窓の裡で、不意に天人の舞樂さね、西洋の箏筆、それ、あれだ。
頬被もともに空を仰いだ、鳥が渡つてピアノの音。……樹々の梢に、鶴の姿の、白い雲のた、すまひ。

百十六

「あ、今日は日曜だから、妹さんが内に居るんだ。」
「然うかね、……何しろ眉の白い御家老で恐れ入つた處へ、タンタラランとお前さん、悪魔退散のお神樂だから堪らねえ。我ながら外道と思ふと、挨拶にも口上にも、カツと最う息詰つて、横飛びに遁出したんだ。何うも身に備はらねえッて奴は仕様のねえ、素面の大工にや、此の大玄關へ突立つて口は利かれませんか。……汗に成つた。」と吻とする。
「お取次の老人驚いてるだらう。」と頬被の下で笑ひながら、
「何うせ、覺悟の事ぢやああるが、(頼まう、) (どうれ、) で、突如私が此の風體を見せるのも、呆れが通越して、巫山戯てるやうで悪いから、小父さんに瀬踏をさせたんだ。……先の内一寸々々来て、御家老私の顔を知つてるんだから。——まあ、可いや、……表に案内がある、ツイと出た

と、……棟梁が其の顔色で、顔を見るなり遁出したと、過失の功名だ。のつけに此のくらの驚かして置けば、新湯ぢやあ無いが老人の毒にも成るまい。……矢張り私が先へ立つて出向くとして……棟梁、煙草入は有るかい。」

「何か御趣向かね。」

「茶番ぢやああるまいし、何が趣向なもんか、……頂くのさ。」と吸ふ眞似する。

「有るとも。煙草入が入用だと生憎だね、……お喫んなせえ、巻莖だ。」

「おや、兩提と言ふ處を、蝙蝠かい。ハイカラなもんですな。」

「夜釣をするのに、お前さん、船ぢやあ刻煙草だと濕つて不可え。處で、手當り次第に巻いた奴を買ふんだよ。……どれ、私も一本、とこんな處で暢々と吹して居て、叱られやしまいかね。」

「誰が。」

「だがね、掃除の届いた御門内だ。」

「詰らないことを言つたもんだ、貰は座敷うちだつて喫むぢやあないか。」

「やあ、成程。」

と太く感心をした頃は、二人とも、海に向いて蹲んで居た。

「餘り邸が廣大なんで、可恐しく度肝を抜かれましたよ。」

「一所に鶏鍋を突く男が、此處へ來ると雲に乗つて、スツと下界を離れるんだから、私なんでも面喰ふんです。知己に成つたはじめの年、新年の御慶と言ふので、俵で乗込んだは可いが、方々乗歩行いた時だから、車夫が、此の坂で降参つ了つて、轎を下して汗を拭く。此方は、森閑と松風の音を聞きながら、屠蘇の酔を、一二輪、遙に座敷からか、此處等早咲の枝からか、ほんのりと來る梅が香に醒して、一息煙草を吹かしたつけ。——さて恚う成ると、空腹にや些とこたへる門内だね。」と、うっかり言つた、煙に紛れる寔れた顔。

吉兵衛は、心ありげに引傾がつて、

「先生……」

「む、」

「だから、私あ、途中で、何處か見はらしあたりで、飯を入れようと言つたのに、お前さん……金主は着いてると言ふのに、懷中が私だもんだから、詰らねえ遠慮をして……いや、遠慮ぢやあねえか……我を張つて。」

「何、瘦せ我慢を張る奴が、墓掃除の人夫に雇はれて、日當を頂くものか——」

——柳吉は、墓掃除、と言つたが、實は、靈巖寺の向う裏から善明院、淨玄寺へ行く途中の、貧寺、廢院、一面の破れ卵塔に、幾百となく算を亂した、如意輪、觀世音、地藏尊を——佐賀町

のお京が志の檀那で修覆をし供養するのに——邊の裏町へ、灸點、蟲封、姫婦預りなどと言ふ、怪しき比羅に交へて七八枚貼紙で人夫を募つたのに、(お舟は如何にせし……)無錢では水も飲めないため、牛頭馬頭の間から、朦朧と影を顯して、日向で其の募に應じたのであつたが……

百十七

現に、柳吉が此處に着て居る半纏も、稻村の稻のしるしを着けたのを、墓場へ出張中の天幕張の、假の帳場と言つたやうな假小屋から受取つて、おい來た、と引掛けたので。——此の男が、御集めの人夫の端へ御採用を願ひます、と其處へ行くのに、素面な事は凡そ無い。袂を拂つた焔切の勢ひで遣つた所爲で、半分附景氣なんだから、誰が雇ふのだから、何處で執行ふ供養たか、そんな事は一切知らず——

尤も、石屋は石屋、鑿玄能で、別に雇つて有つて、臨時に使はれる方は、倒れた佛像を起したり、無縁塔を洗つたり、窪溜へ土を裝るほどな處、女子供でも、爺婆でも、隙なものは誰にでも出来る、と言ふのは、序ながらお京が、其の邊の裏長屋へ、お蕎麥か、金鏢を賑恤に配るつもり、可愛い巾着の口を開けた催し……

(お墓の掃除どなたでも出來ます。)

でお賃は若干金——橋、と認めて、崩塀や破垣へ小體に貼紙をした。が扱て此の橋、と言ふのを何だと思ひます、是即ち吉兵衛の姓である。吉兵衛に姓は可笑い、橋は尙可笑い、が、可笑いで済んだもので、源、平、藤原として見たが可い、忽ち其筋から御沙汰を被り兼ねはせぬ。此だから、音に聞いた佐賀町は固より、夜釣で知己に成つて鱈汁で分れた小父にかゝり合の有るなんぞ夢にも知らず、柳吉が頼被りの下の鼻聲で、どんな事をいたしませう、と帳場で窺ふと、お京さんの内職だから其相當に、店から出張つて居る松吉小僧が鳥打を仰向けにして教へた通り、鳥さしなんど通りさうな秋日和ぢやあ有つたが、藪陰の地藏祭と云つた光景の、陰氣で然も賑かな大勢に交つて、墓原で、……傳へ聞く釋尊の息子に周梨槃特が、天竺の村はづれで笥を盗むやうな形で、やつこらさ、と如意輪の石塔を抱き起し、抱起するに就け、何となく身に染む風に、亡く成つた遊女と、女房の傍さに、半分泣顔の、それでも汗を掻いて、頼被を除けて目を拭いて、寺の棟なる晝の月と、榛の樹に紅き日を一度に視ながら、狐に魅まれたやうな顔をしてイッ處を、やあ、先生と喚いたと思ふと、突然胸倉を取つたのは、橋氏吉兵衛棟梁。なまけものに、御誂への日向ぼつこの役が着いて、お京が斯の功德成就まで、元締の總奉行格。骸骨の目から生えた薄は無いかな、洲崎で人魚を釣りましたさうに、煙管を横啣へて、きよろついで居たのが、麻裏で飛掛つて、さあ、今度は遁さねえ。

唯、年季中驅落した弟子野郎を引摺まへた、と云ふ見得で、何でも來とくんねえ、で、手を取つて引張るから、爺婆まじりに小兒がぞろ／＼と後を跟くの、やい、此奴等、見世物ぢやあねえ、先生に御無禮だ、と怒鳴る小父が御無禮で。先生弱つて、放せ、行くよ、鱈汁か。いや鱈汁より先へお連申してえ處がある、と此から連立つたのは淨玄寺前の町、古着屋と割店の、剝製の山鳥が立看板の觀星堂。如海道人、鹿爪らしく居合せた。——何と本所の四辻で、夜鷹を賣つた顔と、買つた顔が、日中ひたりと逢つたので、柳吉が思はず半纏の襟を合せて、うっかり紐を結ぶ眞似をすると、道人は頭巾よりも前に、先づ其の人威かしの襟に掛けた、赤玉、青玉、金砂玉、擬琅玕、勾玉、矢の根石を繫いだ七彩渾沌として色は團子の如き、首飾りの大輪を外して、煤けた赤毛布の皺を縦横八面に引張りながら、小菊の缺鉢を置いた簀の子向の日向に請じて、取りあへず、翡翠の挨拶をしたのであつた……

百十八

「煙草さへ分捕るんだ。」
と、柳吉は、峰の其の門の坂で、吹して居て、

「小父さんの懐中だつて聊かも斟酌はしない處へ、今日の入費なんざ、皆お嬢的の散財だらうから、驕らせたつて可いんだけれど、神明前の甘酒にしろ、此のへこたれた腹へたてつけて見たが可い、天下忽ち大酔に及んで、目も口も利かなく成ります。對手が對手だし、酔つちや不可い眞面目な話に來たんだからね。」

と口は強氣だけれど、何となく勢のない、色艶の悪いのを、眉も唇もへの字にして視て、

「先生、つかん事を聞くがね。」

「私の星かね、男妾の口でも有るかい。」

「あれ、眞面目にさ、お前さん、それ鱈汁で酔はらつて話したつけ、何とか展覽會へ出して何うとかしなすつたつて、目の青い猫を抱いた、夜鷹の繪は何うなりましたね。」

「さあ。」

「試験をする奴が落第とかをさしたつて言ふから、肝癢を起して、引裂くか、揉くちやにでもしなすつたか、何うだかつて言ふんだが。」

「串戯を言つちやあ不可い、癩に障つて、引裂くか揉くちやにするんなら、棟梁、試験をした審査員、其奴の身體を行つ了ふ……誰が自分の描いた繪を——繪は何うでもだ、夜鷹が可愛くつて、皺にだつて、出來やしないよ。」

「可い鹽梅だ。」と大な手を拍ち、

「何かね、今の住居に其を持つて居なさるかね。」

「住居もないもんだ、が何にする、」と、一寸鷹揚な言語したが、

「夜釣の餌かい。」

「まあ、何でも可うがさ、先生、其を一つ私に譲つておくんなさるねえか。……御懇意づくと言ふのも面の皮だがね、ざつくばらんには、いづれ大金なものだらうけれど。」

「金主が着いてるんだらう。」

「え、何うして。」

「佐賀町のお京さんさ、分つてるよ。」

「叶はねえ、は、お手の筋だ。」

「二三度觀星堂に逢つたから巧いものです。娘が然う言ふと、先方でも何だから、とか何とかでね、そんな繪を描かせたのも、翡翠で世話を掛けたのも、……もとはと言へば私から、……一寸合方の要る文句があつて、腹が空いてて氣の毒だから、千兩ぐらゐる出さうと言ふんだ。」

「然う底を破つちやあ仕方がねえ。」と頸窪を平手で壓へる。

「見透しの法印に知己にしたのは誰だい。」

「小父さんの懐中だつて聊かも斟酌はしない處へ、今日の入費なんざ、皆お嬢的の散財だらうから、驕らせたつて可いんだけれど、神明前の甘酒にしろ、此のへこたれた腹へたてつけて見たが可い、天下忽ち大酔に及んで、目も口も利かなく成ります。對手が對手だし、酔つちや不可い眞面目な話に來たんだからね。」

と口は強氣だけれど、何となく勢のない、色艶の悪いのを、眉も唇もへの字にして視て、

「先生、つかん事を聞くがね。」

「私の星かね、男妾の口でも有るかい。」

「あれ、眞面目にさ、お前さん、それ鱈汁で酔はらつて話したつけ、何とか展覽會へ出して何うとかしなすつたつて、目の青い猫を抱いた、夜鷹の繪は何うなりましたね。」

「さあ。」

「試験をする奴が落第とかをさしたつて言ふから、肝癢を起して、引裂くか、揉くちやにでもしなすつたか、何うだかつて言ふんだが。」

「串戯を言つちやあ不可い、癩に障つて、引裂くか揉くちやにするんなら、棟梁、試験をした審査員、其奴の身體を行つ了ふ……誰が自分の描いた繪を——繪は何うでもだ、夜鷹が可愛くつて、皺にだつて、出來やしないよ。」

「可い鹽梅だ。」と大な手を拍ち、

「何かね、今の住居に其を持つて居なさるかね。」

「住居もないもんだ、が何にする、」と、一寸鷹揚な言語したが、

「夜釣の餌かい。」

「まあ、何でも可うがさ、先生、其を一つ私に譲つておくんなさるねえか。……御懇意づくと言ふのも面の皮だがね、ざつくばらんには、いづれ大金なものだらうけれど。」

「金主が着いてるんだらう。」

「え、何うして。」

「佐賀町のお京さんさ、分つてるよ。」

「叶はねえ、は、お手の筋だ。」

「二三度觀星堂に逢つたから巧いものです。娘が然う言ふと、先方でも何だから、とか何とかでね、そんな繪を描かせたのも、翡翠で世話を掛けたのも、……もとはと言へば私から、……一寸合方の要る文句があつて、腹が空いてて氣の毒だから、千兩ぐらゐる出さうと言ふんだ。」

「然う底を破つちやあ仕方がねえ。」と頸窪を平手で壓へる。

「見透しの法印に知己にしたのは誰だい。」

「まあさ、そんなことはりなしに、お嬢的は眞個に、其の繪が欲しい、と言つてるんだがね。」
「左に右、追つての事にしよう。腹が空きやあ、小父さんに背負をすら。——さあ立つぞ。」
「あ、吃驚した。」と、ひよろりと共に立上つた。

「さあ、寂然としたぜ。」
ピアノが止んだ、樹立に高き葺を仰いで、
「巧く落ちるかな、城は愈々要害堅固だ——一鳥啼かず……」と喟然として言ふ。棟梁は目をき
よろつかせて、猫背に乘出し、

「何處か、……部屋で。」
ポカリと采を伏せる眞似して、
「遣りますかね。」

「舌が曲るよ、黙つておいで、お先へ〜。」
「峠の取掛りまでだよ、玄關口はお前さんだ。」
萩摺れに行くを、背後から、
「小父さん〜。」

「そら、おいでなすつた。」と口の裡。

「小父さん〜。」
「返事をしたよ。」
「矢張り觀星堂の知己だな、此方の腹を見透して、碌な返事をしやしない。……小父さん、其の
羽織を貸しておくれ。」

百十九

吉兵衛は氣を打つて、
「寒うがすかい、先生、顔色が好かねえね。」
「何、此の服装ぢやあ餘りだから。」
「成程、衣服は袖の長いのだから恰好は附くと……袴丈が合ふだらうか。」
「何うせ、辻褄の合つた人間ぢや無いんだからさ。」
「お互様だ。」
「御挨拶だぜ。」
「や、似合つた。」と唐棧を着せて視ながら、
「お前さん、着たまゝで、行方知れずに戒つちや困るよ。いまだに居所を言つておくんなさらね

え人だから、……何、羽織なんざ串戯たがね。此の一生懸命の話が纏るにしろ纏らないにしろ、二度や三度で式のつく事ぢやねえから、此からも一寸々顔を見せておくんなさらねえぢや、皆がたよりが無いんだからね。」

「心配するなよ、何處か墓場へ来て手を敲きや、緋鯉の幽霊で顯れます。」

「然うだ。先生、石塔を鐵鎚で敲かうか。」

「あ、多日顔を見ないなあ。」

「え。」

「小父さん、一寸夜鷹に逢ひたくなつた。」

「此の山奥で、お前さん、そんな事を言ふと、鷲が来て引攪ふ。」

と、坂を下狀に柳吉に言掛けたのが、不意にぎよツとした様子で、ハツと手を擴げて、踵上りに、たじくと上へ退つた。

「三浦さん。」

柳吉の背後にすつくと立つて聲を掛けたのは峰である。

「あツ。」と言ふと、横に開いて、柳吉の慌て、頬被を空へ脱ぐのが我が手で首を搔くやうで、

「いや、此は。……孰方からおいでに成りました。」と面喰ふ事一方ならず。たとへば遁路を塞が

れて、兜を脱いだ體である。

峰は優しく、可懐しさうに、且つ其の肩は聳えつ、

「そりや、私の方で言ふ事ですよ。……何處においでなさるか分らなくつて、何時も探して居るんですから。」

「はあ、御尤、……いや御尤です。——孰方からおいでに——と弱つた顔して、

「いや、眞御尤です。が、しかし貴方だつて、樹から降つたやうに、何時の間にも……孰方から。」

「此處は梟の巢ですもの……怪しい穴が幾干もあります。……今其の間道から御案内申しますよ。」

「何分、何うぞ、一つお手柔かに——」

「串戯ぢやありません、前刻お電話だつたもんですから、眞個に待つて居たんです。」

「其の電話ですが、此の人が、自分の知合の許の借りて、貴方がお宅か何うか、一寸伺つたんですがね——三浦ですが若旦那は御在宅でございますか。……はあ、……とお小間使らしいのが返事をしたつて、（お家だ。）と言つたんです。けれども、御令弟方もお有んなさる、若旦那は一人

にや限らないから、と思つて、唯今此の人に瀬踏……瀬、踏は些と失禮ですな、悪からず、

「取次の老人に聞きました、何うも其の様子が、三浦さんの眷屬らしいと思ひましたから。」

「眷屬……」と又弱つて、振向いて視ると、棟梁は成程眷屬らしい身構へで、恭しく踞つて控へて居る。

「小父さん、不可いぜ、お託をしないぢやあ、」

「へい、眞平御免なすつて。」

「君かい、高橋の棟梁は、豫てお風説は……」

「先生、は、は、何とか言つとくんねえ、困つ了はあ。」

「峰さん、何も言はないで今日は、私の申したい事だけを……」

「御自由に。……入らつしやい、何うぞ。」

舊來た坂下の方へ、何處か搦手が有るらしく導くのに續いて、……樹の中に徑でもあるか、と偶と仰いで見ると、芝に秋草土手の毛氈を軽く空にイんで、松の幹に袖を掛けて、忍びやかに此方を見越す、窺突たる高島田は——兄君ともに其の友だちの身を案じた——優しい峰の妹である。

「あ、絹子さん。」

唯思ふと、峰も心着いたか、高く衝と手を舉げて、三浦を庇つたので、遠慮の意味を逸早く悟つて妹御はひらりと隠れた。

「濟まん事だが、おいらんと同じ呼名……」と、三浦は肩からゾツとして思はずほろりと落涙した。

百二十

「洒落ぢやありません。私は己を知るもんだと思つて居ます。腹が空いても時々無駄口は敲きますが、一體洒落を言へるやうな氣の利いた男ぢやありません、處へ……待つて下さいよ、大事な處だ。」

峰の家に於てである。柳吉は灰皿に煙を刻んで、

「此の世界に、凡そ人間の數は何百億あるか知れませんが、佐賀町のお京さんは唯一人のほかにいのです。高輪の峰さん、貴方が貴方の他に一人もない如く——尙ほ隣座に控へました棟梁が、棟梁、私が私の他にないやうに、と言ひたいんです、が、こんなのはざらだから遠慮をしますが——お刺に生れてから今年二十を一つ二つの妙齡まで、舞臺の俳優のほか、出入の藝人だつて、男の顔なんざ振向いても見たことのない娘の、一世一代と云ふ縁談の場合に、洒落を言つて堪るもんですか。——眞劍です、が此處なんです。——大家の祕藏娘は或意味で言ふと、恰も深川の大籬、稻村屋の遊女のやうで、婿を強ひる其の張本の伯母なんざ、全然遣手の如しだ、と云ふの

はですよ。――

峰さん、貴方は此を洒落を云ふとお思ひかも知れませんが、……饒舌り方が不味いから、無駄口と言へば其までだけれども、眞個、眞面目に言ふんです。

種々話を聞いて、熟々思ひましたがね、天下に處女たるや亦實際樂でない。現在の佐賀町のなご、十三の年紀、近所の小學校へ通つてゐる時分、既に一度、嫁に欲しいと言込んだものが有つたさうで、お京さんが踊のお師匠さんから歸つて、「唯今。」と言つた姿を視て、両親が唯噴出した、と言ひますがね。――

一體、考へて見りや、免許で鑑札を受けて店ざらしで賣つてる女郎だつて、近頃ぢやあ其の筋から、襦袢の張店は風儀を害する、とあつて、御禁制に成りましたのに、變ぢやありませんか。深窓の箱入娘を、お稽古通の途中か何かで見立てやあがつて、嫁に欲しい……と言ふ意味は、未通女を抱いて、夜のお伽をさせようと言ふんです。お剩に御座敷の諸道具一式、此の水金何千兩、衣類調度から、夜の具は枕まで、指環、簪、墨算……

と口が這つて、獨りで潜と膝を捻つて、
「不殘、引括めて油單を掛けて、雨降りの大名行列のやうなのを、高髻、白無垢、振袖の娘ぐるみ、蟒蛇が潤と口を開けて、色鳥の渡るのを、束で呑んだ上に、鳳凰の翼を押伏せて、尻尾で七

巻半巻かうと言ふのだから。……何うです、可恐さが通越してつうくしい。これで、五節句の無心も聞かず、酉の市に積夜具も承はらないんだから凄じいや。」

とフツ、と俯向いて吹く煙の濃いこと。接待なれば惜氣もなく、エジプトの金口を又シテ遣りつ、

「さあ、妙齡に成つてからは、こんなのが日に幾人と言ふ數を知らず、傳手を求め、縁に縋つて、我も人も、急設電話の申込で、富籤を引く氣で居やがる。――言ふまでもありませんが、佐賀町のは、――貴方も御覽なすつた筈です。」

と視て、峰を頷かせて、

「あの嬋娟たる容姿の上に、少からぬ財産が附いて居ます。就中激しいのは、其の申込の下積の方になると、舅姑に小姑つき、なぞと言ふのがある。……玉で刻んだ、高尾、薄雲、吉野と云ふのを、金欄緞子の圍ぐるみ、見合の寫眞一枚で引攪はうと言ふ、野郎を毎日、毎日、風呂敷で背負込むんだから堪らない。大判だつて、チツクを使つたつて、餘所行を引張つたつて、寫眞が何です、中もらひの藝妓の祝儀にも足りやしない……」

「中にも無敵なのは、御都合で養子に罷出でましても結構でございます……長男總領の類が夥しい。……内證を知つて入婿の段申入れます。——藝妓の貯金の使ひに行つた箱屋が、亭主に成らうぜ、と長火鉢の前へ胡坐を搔くより没常識です。」

で、不思議な事には、幾十何百の其の申込み手が、申込むくらゐですから、唯の一人、些少の缺片だつて、否も應も注文が有るのでない事は分つて居ませう。多勢の中ですもの、偶には、些とは鼻の下の寸法を、禪と一所に引詰めて、俺は御免だ、佐賀町のは瘡ぎすだから。楊貴妃のやうな肥満女でなくツちやあなどと、些と暑ツくるしいけれども熱を吹くぐらゐるな奴がありさうなものですかね。……いづれも、お京さんさへ、アイと云へば、ネクタイを口に啣へて、チンチンを兼ねないんだから情ない、トサ男同志ぢやあ思ふんです。……身最良で。

が、女の身に成つて御覽なさい。假に、世間の義理、親類の附合上、然うまで取りかへ引きかへ實檢に供へる首を、寢惚けた清盛入道のやうに、ハタと睨消してばかりも居られないから、青いにしろ、黄色いにしろ、精々腐の少い瓜を買つて、一寸一口、我慢して目を睡るにした處で、近頃は高島田の花嫁で、友染の羽織から眞白な手を出して、洒落に隠元豆でも切つて見ようと言ふ間は半年と無いんです。小生品行方正で、と嫁を欲しがると才子に限つて、血はどろろと濁つてね、立向ふ女に取つちや、鮫ヶ橋の下水と一般で、溝が支へてるんだから堪りません。一足踏

込むと忽ち蟲が附着いて、オギアアと泣きます、變な蟲だね。剩へシイをする、呼んで餓鬼と言ふ、途端に嫁が阿母と成る、やけに阿母は未だ可いが、近來こんなのをママと云ふ、ママが呆れら、お粥にして置け、米は高價いや。」

と、呵々と笑つたが、

「否、可笑い話があります。峰さん、いつかも、小傳馬町とかの、右の伯母なるものが来て、お京の姉さん——當主の細君などと一座で、女中が使者で、離家の二階からお京を呼ぶから、本家の奥座敷へ、中庭の橋廊下を通つて行くと、(此方へござれ)と其奥座敷の次室とかの佛間へ連込んだ。佛壇に燈明が獻つて、其の前に——お聞きなさい、——三寶の上に、定紋着の袷紗が乗つて、紅白の水引を掛けた、奉書の包があるのを、ぶくりとした願で伯母が教へて、それを御覽と言ひます。金貨をするくらゐな婆さんが、手土産にしては大業だ、と思つて、開けて見ると、寫眞です。一目見て、ゾツと疎むと、伯母前じりりと前へ出て、(さあ、今度と言ふ今度は、否は言はせません。お京さんや、お前、男爵様だよ。御華族様だよ。)と言つたのが——御存じでしたかな、峰さん——われわれの家業の方の、展覽會の審査員です、大間男爵……」

「知つてますとも。」
峰は恚う言つて、聞入りつ、唯頷いた。

「お三寶に奉書、水引は詰腹を切らせる氣でせう。——不斷が不斷だから、お京がうつかり、(まあ、不厭な、伯母さん、佛間へ呼んで、生形見を下さるんだと思つたら。)とツケくと言ふと、やあ、黄色く成つて、怒つたの、候の。古風に、佛壇からお京の母親のお位牌を取出して、あ、血の道が起る……夫を振廻して、死ぬわ、活きるわ、と言ふ騒ぎ。姉さんが泣いて弱るから、お京も泣いてあやまつた。——口惜まぎれに、其の晩、男爵は有合せた見合の寫眞三十九枚、地下のものとともに、裏の隅田川へ水葬禮……」

と、思はず、棟梁と顔を見合せて、二人は齊しく苦笑した。柳吉は灰皿へ、軽く指の先を拂ひながら、

「そんな寫眞を持つた後では、手を洗はないと、脂でにちやつくさうですぜ。」

百二十一

「御尤もな次第です。珍味佳肴だつて、装つけ押着けされた日にやあ、見たばかりでげんなりするのに、面のせつこましいのや、のつぺりした奴、眉毛の悪くびりついたのや、おちよほ口の厚い奴、毗が下つて髻ばかり反つたのなんぞ、露店で賣る繪葉書のやうに並べ立てる。いづれ、佐賀町の娘の對手に見立てるんですから、三十左右の青年……可厭な字ですな、若い年さ……然

う云ふ此方は、年も顔も黄色だけれども。」

柳吉は、寝れた顔を壓へながら俯向いたが、忽ち元氣づいて、

「澁色の年は此處に居る小父さんだ。」

「へ、へ」とばかりで、棟梁は、先刻から煙に巻かれて、單に咽入らないだけで居る。

「まあ、其の青年の紳士のです、いづれも、欲心、邪心、淫心、慢心の、面疱と齊しく、繁殖を逞しうし、旺盛を極めたのが、毒氣自ら娘の膚を襲ふんだから堪りません、蟻に集られるのも同一です。」

いつも、お京さんは言ふんださうで、(日々、男の寫眞の度に、返事をしないでも可うございませ、見ろとおつしやるから開けて見ますが、見た時、ぼつと、臉か耳が紅くなつたら、アイと云ふんだと思つて下さい。)……は痛快ですな。此が娘らしくないの、お轉婆だの、生意氣だの、と親類の年寄連。……お尻を撫でく、婿さんが欲しいの、慌てて驅出してお嫁に行つて、亭主に蹴躓いて轉んだ處から、所謂家庭の煩悶がつて居るのだの、従姉妹、再従姉妹などは岡焼半分、同じ冥途へ連行かむの、嫉妬で沙汰をするさうですが。……其實お京さんは可哀相で氣の毒なんです、と言ふものは、件の蟻が取着くので、寫眞に中毒して、一枚見るたびに、悚然として青く成つて、面寝れがするんださうです。容易でない、そんな寫眞は、番町の皿ぢやないが、九枚だ

と、娘の生命にかゝはらうと言ふのに、一度流しただけが大略四十枚。

悉皆、馴れつこに成つて、親、姉たちも平気で居るけれど、其の伯母何某には限りません、婿養子の世話をしようと云ふ連中の、心の底の見透いた薄ッぺらさ、不深切さつたら無いぢやありませんか。……何故？ 何故と言つて——（此になさい、此に限る、此なら品行と云ひ心榮と言ひ、身分と言ひ、申分はない、最う一人、と云つてない。）と云つて勧めた男を、娘が頭を掉れば、右の袂から又出すんだ。（では、此方は何うだい。）とね、苟くも一人の娘に對して、申分の無い婿が、朝に晩に、然う幾人でも有り得よう道理が無い。——眞實、世話をしようと思つて見込んだ、そんな申分のない男は、世話人一人につき必ず一人でなければ成らない筈です。……處を彼方からも、此方からも、束にして持込むと云ふものは、何でも構はない野郎と名のついたものを押つけて、巫山戯た狗ころのやうに、二つ轉がしたい了簡で。……要するに、世間に、深川に、佐賀町に、お京と言ふ綺麗な娘を、娘にして置くのを憎んで、忽ちぼてれんの女房にしたいんだ。詰り、世に娘と言ふ花の爛漫として咲いたのを邪魔がつて、早く實を取つて鹽にして、枝に薪にしたいんですな。

且以つて、此の花を、お代官様へ差上げないと、親兄弟の生命に障るとか、人參が買へないとか言ふのなら、間違ひにしる、ものは相談と言ふ場合が無いとも限りませんが、銀座を馬に乗つ

て飛ばうが、芝山内を長轡の輿で練らうが、誰に遠慮のない娘が、月々遣道のない小遣だけでも、男妾の一人や二人、欲しけりや俳優でも何でも買へる自由な身で、何を苦しんで、押着けるもの

の一山選取の婿を持つ必要があるのです。何の事はありません。此の人に婿を進めるのは、空腹からう、と言つて、雛の頬邊へ、豚を黄粉まぶしにして押着けるやうなもんです。」

「三浦さん。」

此の時、峰が一寸、言を入れて、

「前刻からのお話は、皆、貴方のお心ですか。」

百二十三

「然うですとも、私の心です。」

唯、猶豫つた、が判然と言つた。

「而して觀星堂の心です、同じく佐賀町の娘の心なんです。」

峰は凡てを目で聞く如く睜いて居た瞳を、スツと胸へ落して、伏臉に成りつ、

「ぢやあ、其のお京さんは、男を持たない、婿を取らない、結婚をしないと云ふんですか。」

「何、そんな主義ではないのです。……自分は自分の歸きたい人の見つかる時まで、傍から縁談を迫るのは見合して欲しい、と言ふんです。」

「語り、自分で選ぶまで、」

「然うなんですよ。」

「それが、當前ぢやありませんか。……まだ、世間に其が間違つてると言ふ人があるんですかね。たとへば、親が其の娘の見出した男に對して、是非を稱へる場合はありませんか。けれども、最初、選ばせるだけは娘に選ばせて、話は其からの事ぢやありませんか。——賣物のやうに、此は何うだ、彼れは何うだ、と婿を並べて可厭がらせる、其の伯母はじめ、親類たちは、第一、われわれ男を侮辱するものです。無論、寫眞で、お伺ひ申す奴等は馬鹿だ。しかし、考へて見れば、男が自ら侮辱して居るのですよ。」

「觀星堂も、然う言つてゐるんださうで。女が二十を越したつて、急ぐ事は更に無い。近頃ぢや、一年なり一月なり、待てば待つほど、女の價値は上つて、野郎の相場は下落するんだから、四十に成つても、十七八の婿が持つてゐる世の中だつて。……眞價ぢやありませんか。」

「太く、女の肩を持ちますな。」

「否、其がと言ふと、矢張り女は弱いから氣の毒なんです。——峰さん、貴方も御經驗が有る筈

です。随分嫁の口をお断りに成つたでせう。」

峰は聲靜に、

「世間は面倒です。……今ぢや兩親は分つて居てくれますけれども、矢張り親類が、見合だ、寫眞だつて困りますよ。孰方にしろ断られる方は決して名譽でない。好んでぢやありませんが、私だつて、嫁を嫌へば、其の婦人を侮辱するに當ります。濟まない事だと思ひます。雖然、此ばかりは勧められた處で可厭なものには可厭ですから、——好嫌ひをして、何の婦が！ 生意氣なと言ひたいのだけれど、實際其の人に、お京さんに同情します。」

「難有い。」

と忽ち一拜をなすと、棟梁も叩頭する。

「貴方が同情して下さるなら本望なんです。處で、貴方は可厭なものは可厭で、ときはきお断りなさるでせう。それだつて、些とは遠慮も斟酌もなさるんだ。」

「些とどころぢやありません。息子の身を堅めようと思ふ親たちの慈悲を考へ、親類に對して私の爲に氣あつかひをする切なさを思ふと……全く遣切れない事が幾千もあります。一番弱るのは、優しい、仲よしの妹に（嫂さんが欲しいわ）と遣られるんですよ。誰が懷柔策を用いますかね。憎いのは、私が嫁を貰はないと、順序として、妹が先へ縁附かれない義理だからつて、妹の

縁の邪魔でもするやうな皮肉を言ふ、癪な奴さへあるんです。何故、娘は娘、息子は息子として見て居られないんでせう。」

「眞個です……其通り、貴方にして其だもの。娘の方で縁談を断切るのは、亭主があつて、姦通をするより面倒で……重りく切羽詰つて、お京さんは、最う其の佐賀町の家には居ないんです。」と、棟梁と共に吻と息した。

「家に居ないとは？……」

柳吉は一息吐いて、

「家出をしたんです。何うです、其のくらゐ果報な娘が、家に居たたまらなく成つたんで——此處なんです……周囲の仕方、稲村屋が大籬で、娘が遊女のやうだと言ふのは——家出ぢやない、驅落ですな、寝衣のまゝに三千歳が。」

と柳吉は又元氣づく。……

百二十四

「……峰さん、貴方の御妹御が、優しく眞心で、貴方を弱らせるんなら、逆に憎々しく、意固地に佐賀町の娘を困らせるのは伯母なんです。此が其の遺手の役に當るんですが……」

古いく姉で居て、姉を笠に被る婆々だから、娘の父親さへ一目置いて敬して遠ざけて居る。

……苦手ですな。で、お京の姉……稲村の家にも煙つたい事一通でない。……此の姉さんに向つて、總入齒を剥出して、右の伯母が、(妹の身の納まりを早く着けないのは情が無いのだ。お京を可愛くは思はないか。)と唇を震はせる。序に當主、即ち稲村の養子に向つては、(義理の有る妹を何で早く縁に着けない、あの縹緞だから、物惜みをして、何時までも中二階に、繪草紙のやうに遊ばせて置くと言ふものは、口繪を一寸お見せなどと言つて、内證で手を握らう下心ではないか)トサ、いゝえさ、世間をはじめ、奉公人が陰口を利いたら何うおしだ。)と破天荒とも何とも譬へやうの無い難題を言出した。……四方から網は次第に手繰られる。娘は羽搔を緊められる、肩身は狭くなる、頸は瘡ると言ふ災難。

……處へ、また面倒が持上つたんです。峰さんは御存じだから。早い話が、大間男爵の一件です。例の奉書、水引と言ふ寫眞を、其の伯母の手許へ持込んで、稲村の佛室正面へ控へさせた奴は、根越萬兵衛。——何うです、可厭なものが出入をしませう、お京さんの伯母の家へ。」

柳吉が眉を擧げて言ふと、棟梁も獅嚙面。

「私は知りません。知らないが、知らないでは濟まない申譯の無い事があります。」

峰は引入れられた如く頷いたのである。

「お京さんが、奴の寫眞を流したのに、落第の裏書が附いて、大間の手許へ戻つたので、掛つて行き處の無い自惚家の口惜さが、頭から猫萬の肩ぐるみ、反吐の如く打覆ると、此の反吐を痒で捏ねた汚い面と、毒で爛れた臭い尻とを、伯母の家へ、ぐじりぐじりと朝に晩に持込んで、何うなされて下はります。で、老夫め、權柄づくでは手足の出ない事を知つてるもんだから、何が何でも、最上此の上はお京を御前様のお聞の伽にしないでは申譯がござりませぬ、私は生きては居られませぬ。」と懷中から出しちや、六連發の短銃を捻くるんださうで。

伯母さんと言ふ人が、また猫萬を信じ切つて、(彼や、顔へ數珠を掛けた善人だ。)ツて面の疣に信用があるんだから堪りませぬ。——(さあ、何うしてくれる。)と黄色い聲を勸走らして、其の猫萬の短銃の影を、佐賀町へ持込んで、ふか／＼と硫黄の臭をさして、家中を燻すんだ。

松の樹に引釣して、松葉でくすべる折檻でせう。噎せざるを得ませんや。

勝氣でも纖弱いから、そんな、こんなで、胸を痛めて、寒氣がして、頭痛が打つて、四五日どツと寝たんださうで。

其の——峰さん、……病人が、些と快くなつたばかりで、お湯に入つて、久しぶりで島田に結げて、衣服を着換へて、正午から柳島へお參詣をして、歸途に淨玄寺へ寄らうと云ふのが、支度に手間が取れて、お八ツ過ぎに成つて、さて出ようとすると、中二階で立つたばかりで眩暈がしたので、暫時、熱と氣を休めて居るうちに、又鹽梅が悪く成つたので、女中に床を取らした時には、最上身體に、戰慄が出て、帯を解いたばかりで、緋の紋羽二重の裾にも、綾の搔卷の袖にも、細く成つて包まつて、蒼白い薄化粧で寝ると、枕頭の螺鈿の棚の上へは、早や成田のお不動様の御守護札が立つ處へ、綱の館へ鬼車の形で、小傳馬町の伯母前が乘着けて、此が魔の魅すやうに、暮方の橋廊下を、鼠色の小紋で抜けて……」

百二十五

「天女のお手玉ほど、衣紋の崩から、緋の襦袢を紅く覗かせて、深々と搔卷の天鷲絨の襟を被いで、娘が寝て居る枕頭へ……婆々の癖に眉毛の太いのが顯れて、例の硫黄の臭を芬とさせて坐込むと、それ、伯母御のお入、と母屋からついて來た、稻村の若夫婦を右左に控へさせて、扱て、更めて又大間の件で。萬兵衛が、此の晝も來て、(最早や此ぢや、と言ふのだ。)なぞと、咽喉へ短銃を當てる眞似をして、咽喉佛をひく／＼と動かして、口を曲めて、硫黄臭い呼吸を吐掛ける。頭痛のする所だから、ツンと扶るやうに嘔氣つくでせう。

併し斷つて、可厭ならば——刺違へて死ぬとも言ふのかと、峰さんもお思ひでせう、が、然うで無いのです。此處が可笑しい。……別に二口持つて來た。で、又袱紗を開けて、一つが醫學

士で病院を建ててくれるなら養子に來ると言ふし、一人は法學士で、此も入婿に成る、かはりに洋行をさして欲しいと云ふ。いづれも新學士の秀才で、好男子で、傳馬町界隈だけでも、婿にしたい娘が六人もあるのを、押切つて伯母が持つて來たぞよ。……(此なら申分は無い、さあ御覽)と、一枚、枕した横顔の、細い鼻のさきへ突出すから、毒氣に中てられて、寢返りをする眈の切れたのへ、近々と又一枚差寄せて、(さ、よく見ないかよ、)と肩から背筋へ蝮指をすると突込んで、一つ揺つて、重い島田を抱起した。……

……(と傍に何時も附切だから、見て居たお常と言ふ年増の女中の口から、私かね、峰さん、其の時着て居た衣服の柄まで委しく觀星堂の店で。)……と聞いた時は、堪らなく可哀に思つた。短銃の難題が前髪に、醫學士と法學士が、鼻と脛に押着いて息も出来ない。名代に弱り果てて心も憎乎と成つて倒れて居る遊女を、遣手婆が突き起すも同然だ、と熟々思つた、悲惨ぢやありませんか。

娘は最う堪らないから、(うるさいわ、伯母さん。)とはじめて肩を振つたから、さあ、事で。……目上に向つてうるさいとは何だ。此は些と口が過ぎる、と養子の當主までが居直つたので、娘は、ふらふらと起ると、半分夢中で、衝と立つた。(女中が見て居て、藍と紫の麻の葉の統の絞染を近頃張つた襖が、娘を吸つて、颯と廻つて、裏へ消したやうに見えたと云ふんですが。)痲癩ま

ぎれの激しさツたら。

中二階を驅下りると、橋廊下を横に切れて、跣足で庭へ出て、楓や檜の中を、縫ふうちに、躡いた石があつて、痛い、と思ふと、え、口惜い、で、小兒のやうにね、其石を、大きかつたかさかつたか後では覺えても居ないさうですが、いきなり引摺むと「口惜いねえ。」で、はずみで投げたのが隅田川です。水が大きい。此の音に——やあ、身を投げた、と誰やらが言ふと、聲の輪に繁吹を揚げ、渦巻を立てたもんだから、臺所、店を掛けて百人近いのが、ソレお京さんが身を投げた、と蜈蚣の如く足を揃へて黒く成つて、背戸の棧橋の處へ驅着ける、と引違へて、娘は藏と藏の廂合を抜けて、表の入口の飛石づたひに、一度千本格子の磨戸に縋つて、電燈ばかり晃々とした空家のやうな店を横に見ながら、スツと抜け出して、辻俵に飛乗つて、母衣を深くして、此から驅着けたのが……」

柳吉は、ふと口をつぐんで四邊を視た。

お京は淨玄寺を志したのだけれども、夜は門の閉るのを豫て知つて、俵を下りたのは下寺の善明院の破門だったのを、つい、言ふのは、何となく憚られたからである。柳吉は今も其處が隠家であつたから。

で、雨空のやうに何となく言を濁して、